

機 動 戦 士 ガ ン ダ ム

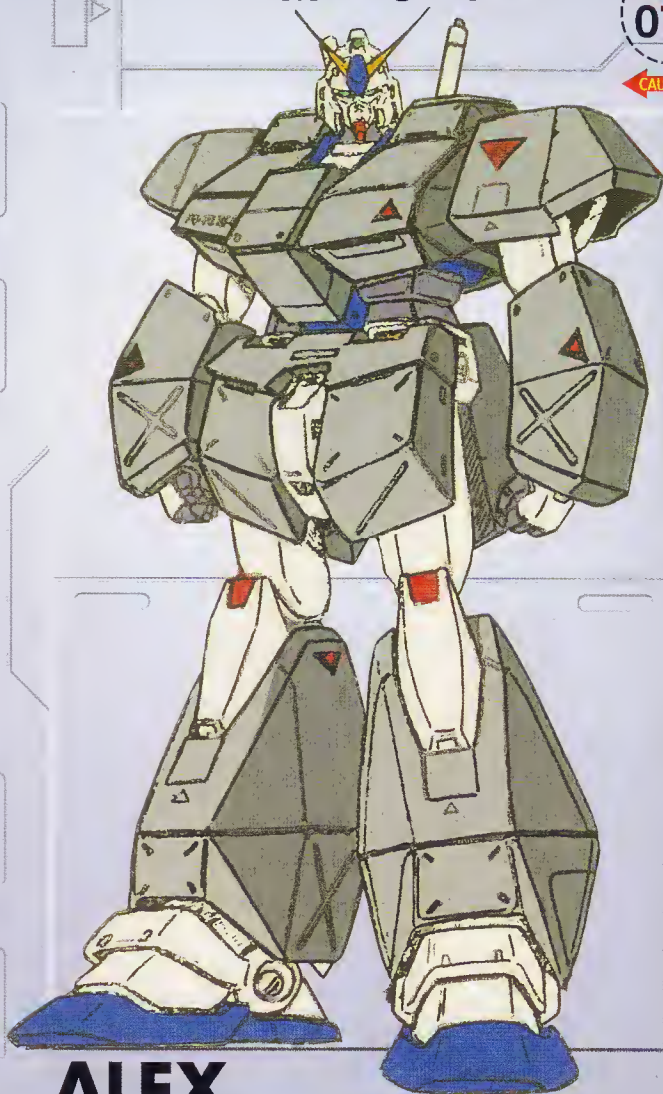
# MSV

MOBILE SUIT VARIATION



COLLECTION FILE [地球編]





**ALEX**

[ GUNDAM  
RX-78NT-1 ]



EARTH FEDERATION  
FORCE

# RX-78NT-1

# MOBILE SUIT VARIATION

NT専用ガンダム

試作第1号機

## “アレックス”

073



地球連邦軍

全高：18.0m

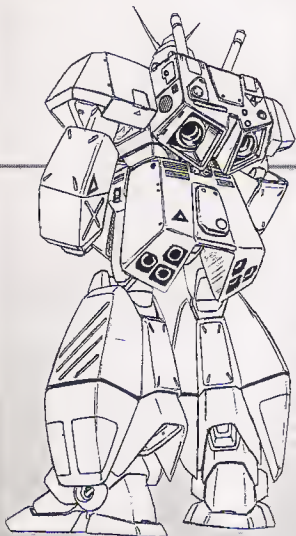
本体重量：95.0 t

ジェネレータ出力：1420 kw

主スラスター推力：146000 kg

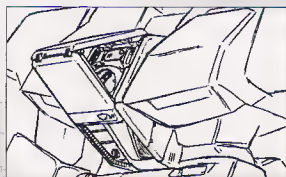
装甲素材：ルナチタニウム

パイロット：クリスティーナ・マッケンジー



REAR VIEW

HEAD

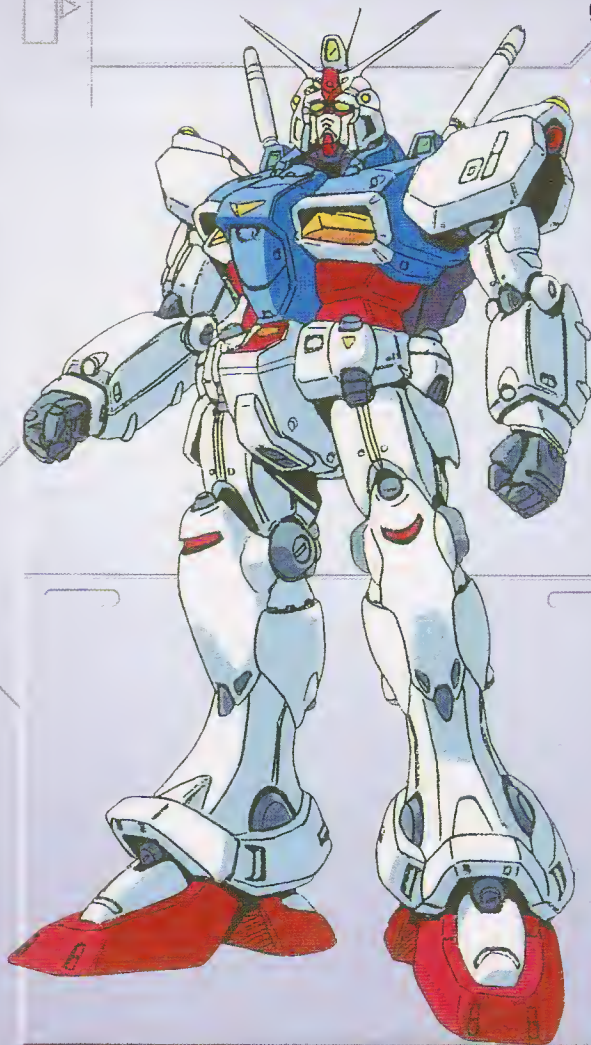


COCKPIT HATCH

## 機体解説

本機は、10月上旬に行われたRX計画本部と参謀本部の連絡会議においてその建造が決定されたという。こうして、連邦軍初のNT専用機の開発が開始されたのだが、驚くべきことにわずか2か月半で試作1号機であるアレックスは実戦参加にまで漕ぎ着けている。こんな常識破りの記録が生まれ得たのは、基本的な機体設計を終えてフレーム製造過程に進んでいたガンダム4号機の設計データと部品を流用できたためだと、多くの研究家が指摘している。さて、本機にはチョバム・アーマーが増加装甲として装備されており、非常に特徴的なシルエットを形成している。これによって重量は大幅に増したが、その運動性は決して損なわれなかった。





# ZEPHYRANTHES

[ RX-78GP01 ]



EARTH FEDERATION  
FORCE



# RX-78GP01

# MOBILE SUIT VARIATION

## ガンダム

### 試作1号機

# “ゼフィランサス”

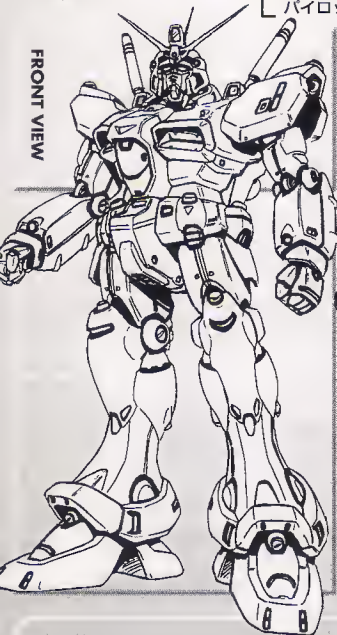
## 074



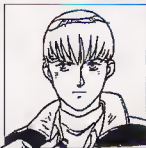
ちきゅうれんぽうぐん  
地球連邦軍

全高: 18.0m  
本体重量: 39.7t  
ジェネレータ出力: 1790kw  
主スラスター推力: 108000kg  
装甲素材: ルナチタニウム  
パイロット: コウ・ウラキ

FRONT VIEW



PILOT  
LI. URAKI

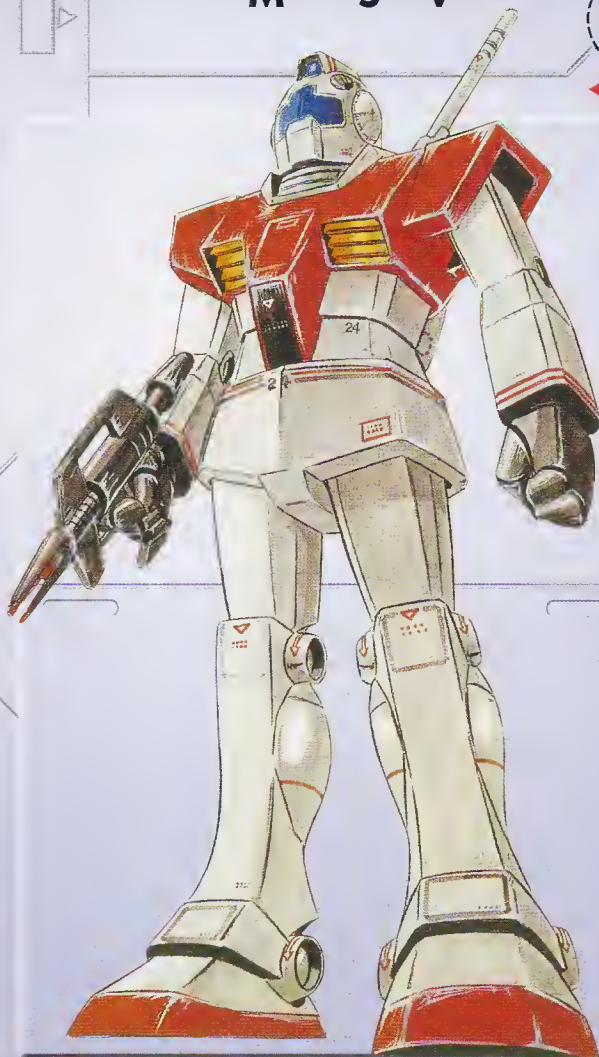


REAR VIEW

## 機体解説

本機は大戦終結後の0083年に行われたブラック・プロジェクト「ガンダム開発計画」によって建造された技術実証機である。このGP01は大戦中の名機RX-78の運動性能を再現すべく設計されており、1G環境下での戦闘能力は実に驚異的だ。設計的にも、コクピットには水平・イン・ボディ式機構を採用し、コア・ファイターとMSの推進器を兼用させるなどの新機軸も取り入れている。操縦性も良好で、たとえ搭乗者が初年兵であったとしても使い方によっては技量が勝る相手に勝利することも可能だという開発陣の意見も残っている。ただ技術実証機の性格ゆえか、整備にかかる手間と時間は実戦配備機以上に必要だという。

初出: 『機動戦士ガンダム 0083 スターダスト・メモリー』



**GM**

**RGM-79**



**EARTH FEDERATION  
FORCE**

## ジム(後期生産型)

075



地球連邦軍

全高: 18.0m

本体重量: 41.2t

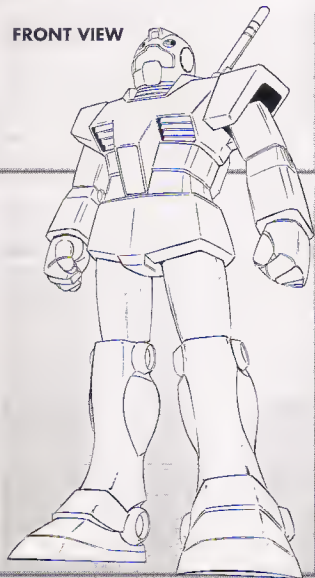
ジェネレータ出力: 1250kw

主スラスター推力: 55500kg

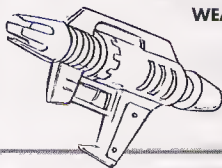
装甲素材: チタン系合金

(チタン・セラミック複合材)

FRONT VIEW



WEAPON



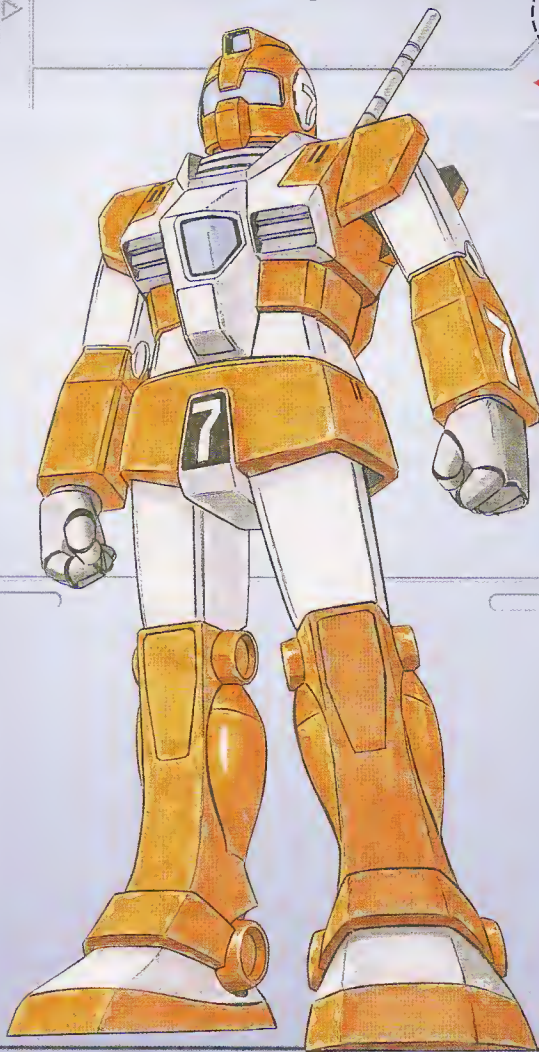
## BEAM-SPRAY-GUN

●本兵装は出力こそビームライフルよりも低いが、連射性能が高く制圧力に優れた兵装である。単機の戦闘力を偏重する傾向のあるジオン軍と異なり、連邦軍のMSは基本的に集団戦を得意としている。これは人的資源やドクトリンなど、それぞれの国の持つ複合要素が原因だろう。このことは、携行型光学兵装が一般化しても、速射性の高い実包兵装の開発・生産が進められたことから推測できる。

## 機体解説

本機は、ジャブローで生産された初期ロットの機体に若干の修正を施した、専門的には後期型と呼称されるRGM-79である。この機体は世界各地の軍工廠や各社工場で生産が行われ、終戦までに約288機が宇宙軍および陸軍に納入されている。つまり、一般的に馴染まれているRGM-79とは、本機のことなのだ。主武装はビームスプレーガンと呼ばれる、制圧射撃を得意とするビームライフル・BR-M79C-Iとビームサーベルの二つである。頭部にはガンダムと同様に機関砲が2門装備されているが、これはあくまでも牽制用でしかない。一見貧弱と思える戦闘力だが、本機は小隊単位以上の集団戦においてその真価を発揮するのである。





# TRAINER

[ TGM-79  
GM ]



EARTH FEDERATION  
FORCE

## ジム・トレーナー

076



地球連邦軍

全高：17.8m

本体重量：40.5t

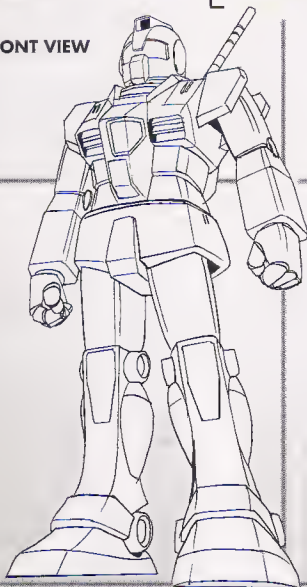
ジェネレータ出力：不明

主スラスター推力：不明

装甲素材：チタン系合金

(チタン・セラミック複合材)

FRONT VIEW



SHOULDER

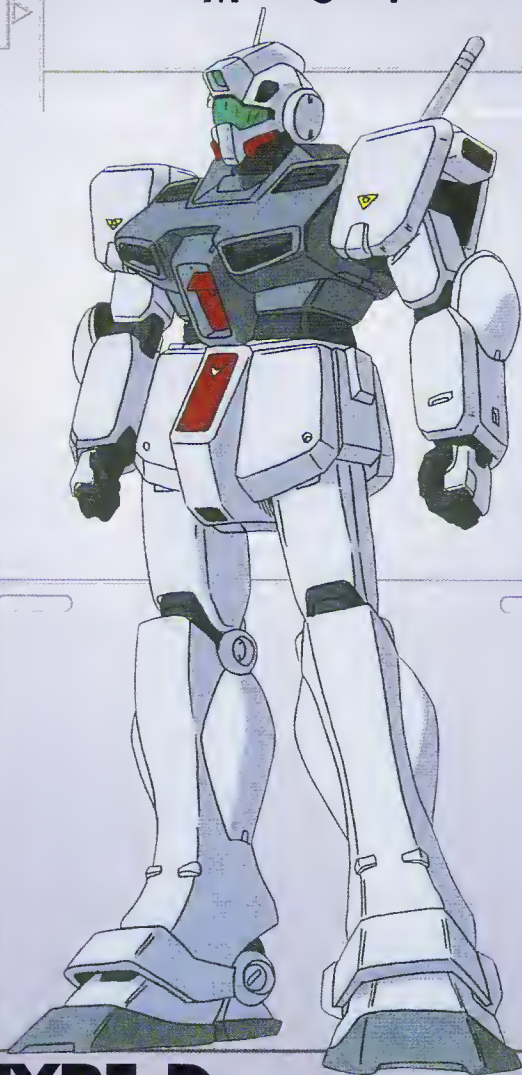


COCKPIT



## 機体解説

MSへの機種転換訓練用に製作された練習機。頭部機関砲が撤去され、通常コクピットの上部に教官用コクピットが増設されたほかは、構造的には量産機と大差ない。しかし重量バランスこそ同じだが、装甲板には低コストのものが使用されているため耐弾性が低く、実戦には用いることができない。一般作業に使われたという記録も散見するが、本機は前線に配備されたことはなく、実際は留守部隊が重機のように扱っただけのことらしい。ちなみにMSのパイロットに転換するものは、宇宙軍では戦闘機乗り、陸軍では（意外ではあるが）戦車乗りが多かったという。これは宇宙と地球の環境がいかに異なっているかを示す端的な例といえるだろう。



**TYPE-D**

**RGM-79D  
GM**



**EARTH FEDERATION  
FORCE**



## ジム (寒冷地仕様)

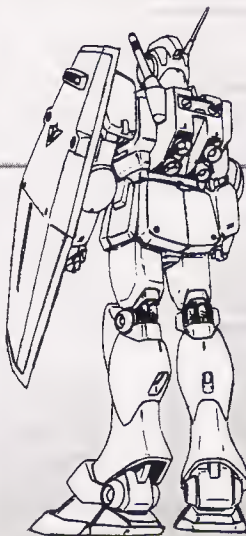
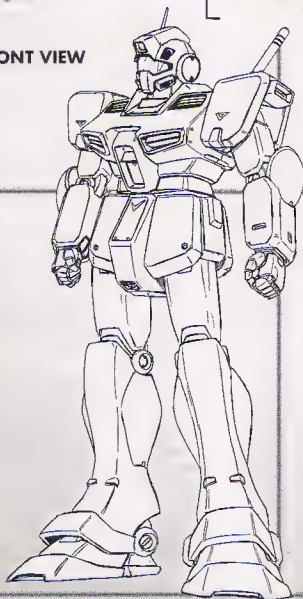
077



地球連邦軍

全高: 18.0m  
 本体重量: 44.7t  
 ジェネレータ出力: 1250kw  
 スラスター推力: 60000kg  
 装甲素材: チタン系合金  
 (チタン・セラミック複合材)

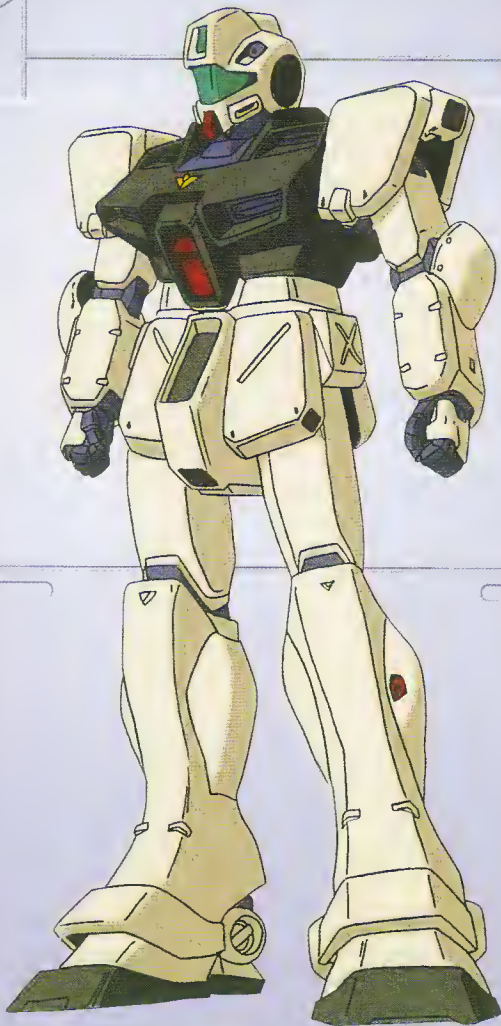
FRONT VIEW



REAR VIEW

## 機体解説

本機は寒冷地で運用されることを前提に生産配備された、RGM-79の派生型の一つ。G型の直接の原型機であり、そのため頭部および推進器を除いて各種装甲板は共通のものを使用している。背部の推進器は初期生産型を再設計したもので、推力に変化はないが設計自体が冗長性に優れている。このため、その改良型が戦後に生産されたC型に装備されたのである。本機は、連邦陸軍の保有していたジムの中でも最も遠距離通信能力に秀でており、連携作戦での運用に非常に適していた。複数機による戦闘単位でのMS運用が、連邦軍の特徴である。駆動部の氷結防止システムも性能は良好で、本機は大戦末期のヴァイコヌール基地攻防戦にも投入された。



# COMMAND

[ RGM-79G  
GM ]



EARTH FEDERATION  
FORCE

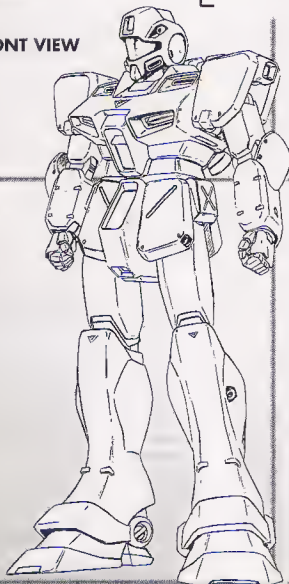
# ジム・コマンド(コロニー戦仕様) 078



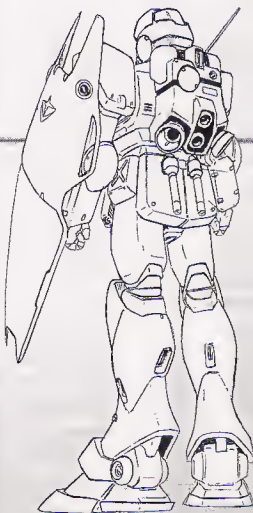
地球連邦軍

全高：18.0m  
 本体重量：43.5t  
 ジェネレータ出力：1390kw  
 主スラスター推力：67000kg  
 装甲素材：チタン系合金  
 (チタン・セラミック複合材)

FRONT VIEW



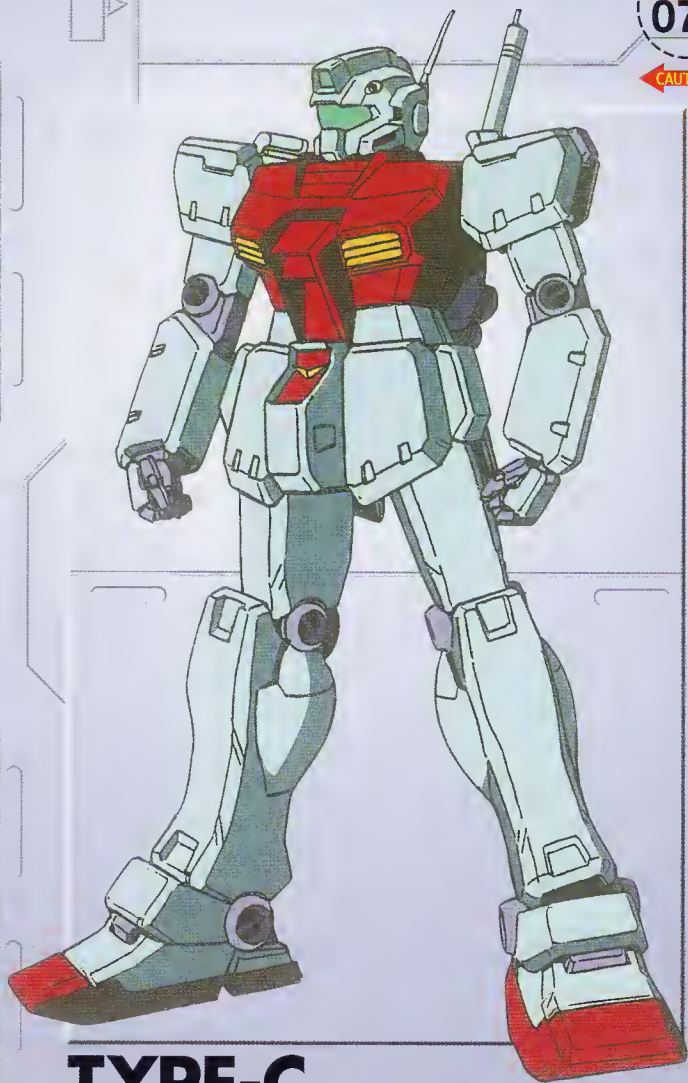
REAR VIEW



## 機体解説

戦後、短い期間ではあるがRMS-179ジムⅡとともに連邦軍の主力機だったRGM-79Cジム改の原型機が、このG型である。本機は主に重力下環境での治安任務を目的に開発されており、原型機であるD型とともにRGM-79の設計段階から枝分かれた、いわば兄弟機のようなものだ。このため、ジム自体の実戦投入が宇宙世紀0079年の11月下旬であったにも拘らず、本機とその宇宙戦仕様のGS型もわずかな差で実戦部隊へ配備が実施された。ただ、被弾経始を向上させた装甲形状の生産に手間がかかってしまい、大戦末期ということもあって生産機数は非常に少ない。主武装は光学兵器ではなく、実体弾機関砲である。





**TYPE-C**

**RGM-79C  
GM**



**EARTH FEDERATION  
FORCE**



地球連邦軍

全高：18.0m

本体重量：41.2t

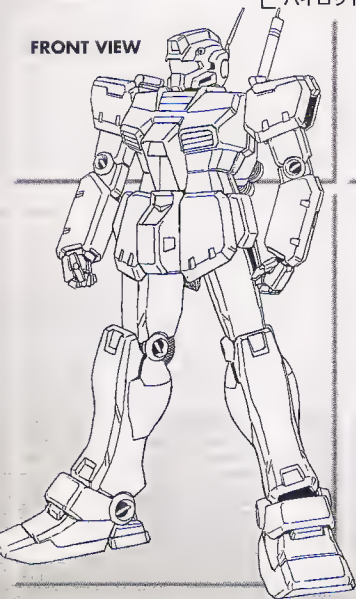
ジェネレータ出力：1250kw

主スラスター推力：57480kg

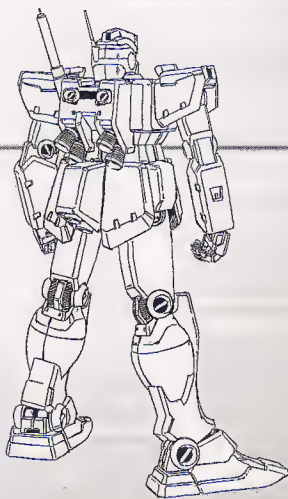
装甲素材：チタン系合金（チタン・セラミック複合材）

パイロット：サウス・バニング他

FRONT VIEW

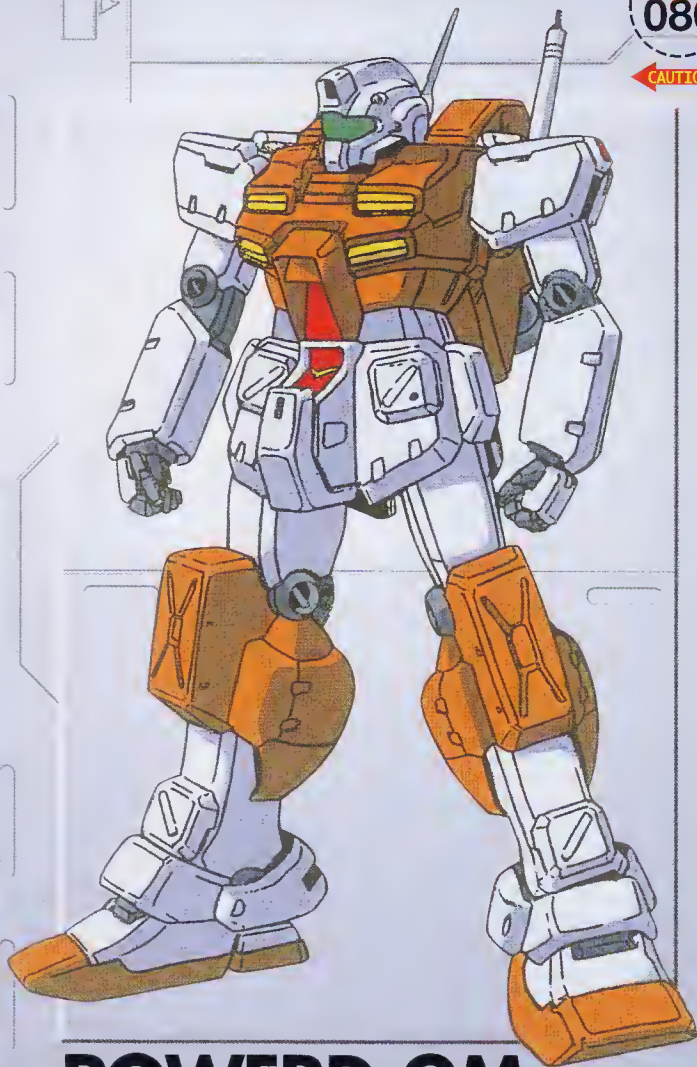


REAR VIEW



## 機体解説

本機は大戦末期に実戦配備されたG型系を原型機としている。ジオン共和国との停戦協定が締結され大戦は終結したが、降伏を良しとしないジオン軍部隊も数多く存在した。このため連邦軍（特に陸軍）は彼らの武装蜂起を警戒せざるを得なくなったのだが、戦争終結後、世論は軍にその縮小を求めている。世界的な軍縮の潮流に逆らうわけにもいかず、かといって安易な軍縮を行い、方が一残党軍が蜂起した場合、事態に対処できるかどうか、非常に問題だったのである。そこで軍部は一旦動員を解除し、戦時体制から平時体制に移行し多くの部隊を解隊とした。それによって浮いた予算でC型を生産・配備し、MS部隊の質の向上を図ったのである。



# POWERD-GM

[ RGM-79 ]



EARTH FEDERATION  
FORCE



## パワード・ジム

080



地球連邦軍

全高：18.0m

本体重量：46.6 t

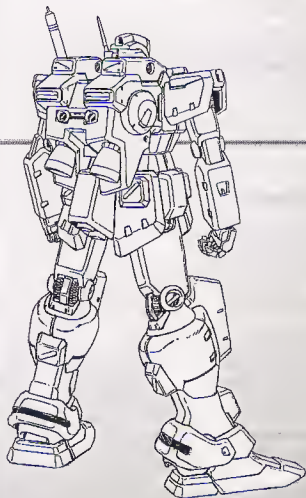
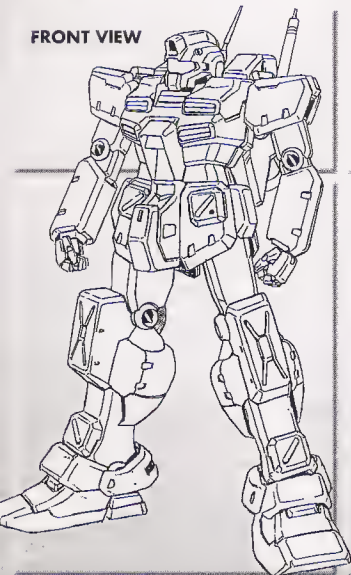
ジェネレータ出力：1650 kw

主スラスター推力：71480 kg

装甲素材：チタン系合金

(チタン・セラミック複合材)

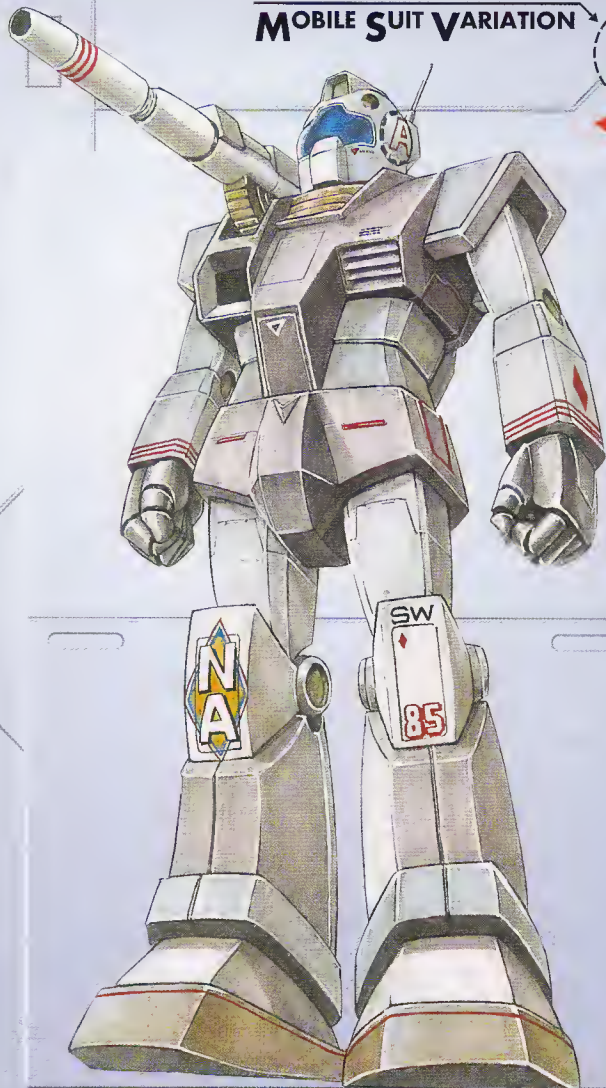
FRONT VIEW



REAR VIEW

## 機体解説

本機は新型推進器および関連機器開発に必要な運用データ収集のためにC型を改修した実験機である。そのため独立した型式番号を持っていない。製作された機体は豪州トリントン基地に駐留していた試験部隊に配備され、各種データの収集作業を行っていたと記録されている。しかし、機体自体は2機とも0083年に発生したGP02強奪事件時に残党軍MSによって撃破されてしまったという。この試験に関しては非公開であり、現在残っている写真や映像資料も残念ながらわずかなものしかない。これは試験記録を保管していた本部ビルが同事件において、砲撃によって完全に破壊されてしまったからだろう。結局開発は中止となり、資料も散逸してしまった。



# GM CANNON

[ RGC-80 ]



EARTH FEDERATION  
FORCE

# ジム・キャノン(北米戦域仕様) 081



ちきゅうれんぽうぐん  
地球連邦軍

全高: 17.8m

本体重量: 49.9t

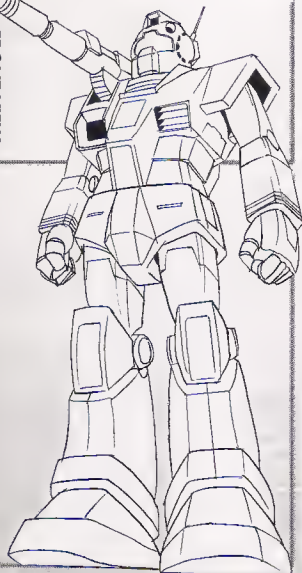
ジェネレータ出力: 976kw

主スラスター推力: 63500kg

装甲素材: チタン系合金

(チタン・セラミック複合材)

FRONT VIEW



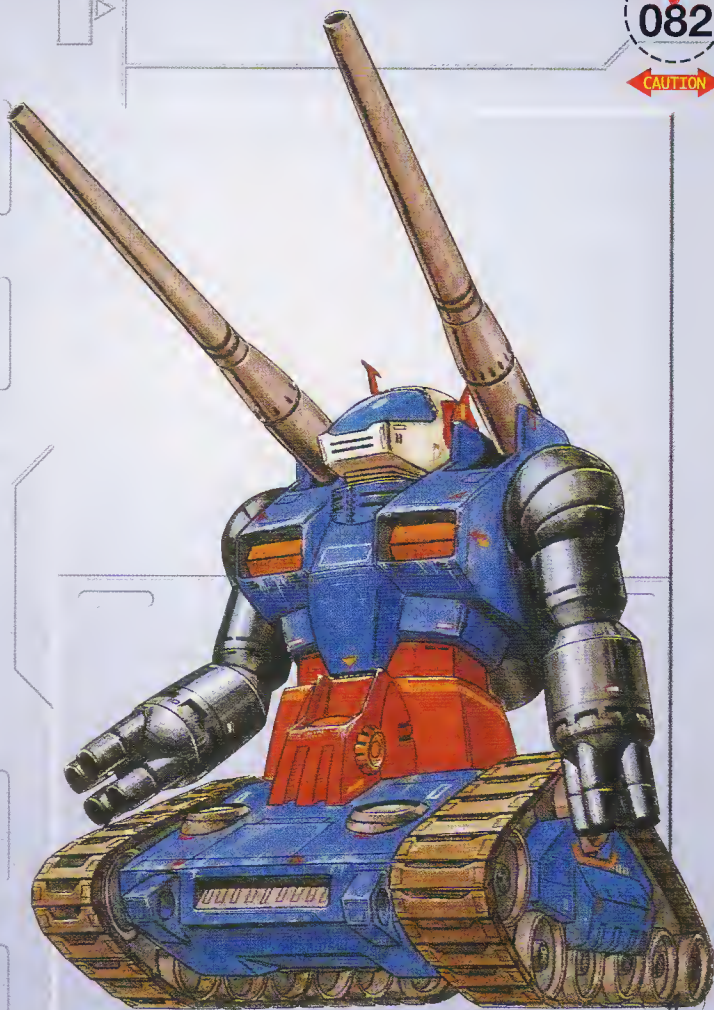
## MSと戦術理論

●どんなに時を経ても、いつまでも普遍性を失わないものがある。その一つが戦略や作戦、そして戦術だ。人類が数千年かけて積み上げてきたこれらの理論と技術は、時代の変遷に合わせて表面上の形を変えながらも、本質的な部分では決して変質することはない。未知のものであったMS戦術もその運用法が確立されるに従い、連綿と続く戦争術のジャンルの一つとして吸収されていくことだろう。

## 機体解説

砲戦MS・RX-77シリーズの量産機であるRGC-80が初めて配備されたのは、北アメリカ戦域である。オデッサ攻略戦で大勝した連邦陸軍は、続いて東欧に次ぐ公国軍地球派遣軍最大の拠点である北米カリフォルニアの攻略を狙った。本機はその攻略軍の虎の子であるMS部隊に、RG M-79とともに6機が配備されたのである。わずか1個大隊でしかなかったMS部隊だったが、装甲部隊や機械化歩兵部隊との諸兵科連合作戦によって大きな戦果を挙げることに成功した。本機は陸軍に34機(北アフリカに19機、北米に6機、ジャブローに9機)が回され、残りの24機が宇宙軍(ティアム艦隊に14機、レビル艦隊に10機)に配備された。





# GUNTANK

RX-75



EARTH FEDERATION  
FORCE



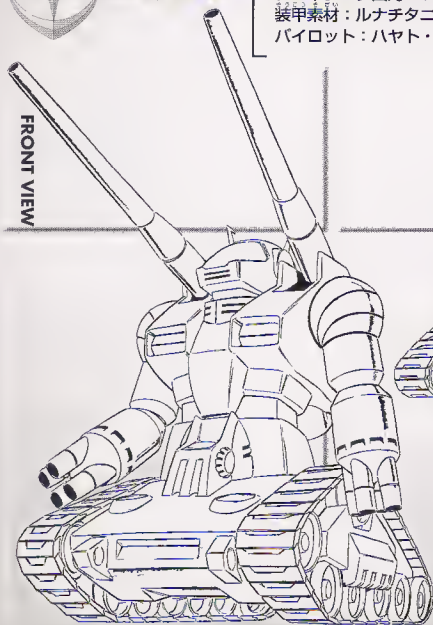
## ガンタンク

082

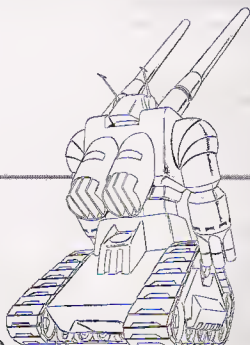


地球連邦軍

全高: 15.0m  
 本体重量: 56.0 t  
 ジェネレータ出力: 878 kw  
 装甲素材: ルナチタニウム  
 パイロット: ハヤト・コバヤシ他



FRONT VIEW



REAR VIEW

## 機体解説

ガンタンクはRX計画に従い、数機の増加試作機が製造された。しかしシャア・アズナブル少佐(当時)指揮する部隊によるサイド7への奇襲攻撃によって、たった1機とわずかな交換予備部品を残して全て破壊されてしまったと記録されている。その後、母艦である強襲揚陸艦ホワイベースに搬入され、第13独立部隊の重要な戦力の一つとして数多くの戦闘に参加した。両肩に装備した長い射程と安定した弾道性能を有する砲は、陸戦兵器としては大きな打撃力を持ち、マンビュレーターに備えられている武装と相まって高い戦闘力を機体に与えている。ただ、クローラーを移動装置に採用したため、運動性能はあまり高いとは評価できない。



# GUNTANK II

[ RMV-1 ]



EARTH FEDERATION  
FORCE

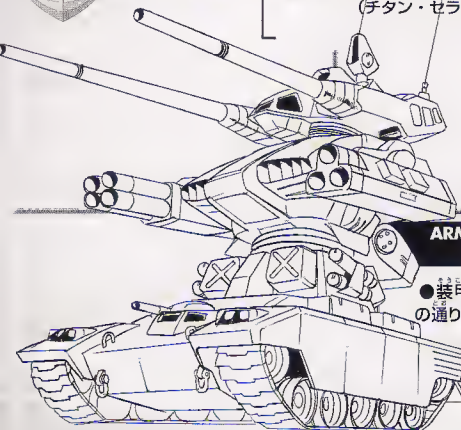
# ガンタンクII

083



ちせうれんぽうぐん  
地球連邦軍

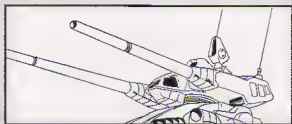
全高: 15.2m  
 本体重量: 98.4t  
 ジェネレータ出力: 211kw  
 装甲素材: チタン系合金  
 (チタン・セラミック複合材)



FRONT VIEW

## ARMORED-GUN-SYSTEM (装甲砲システム)

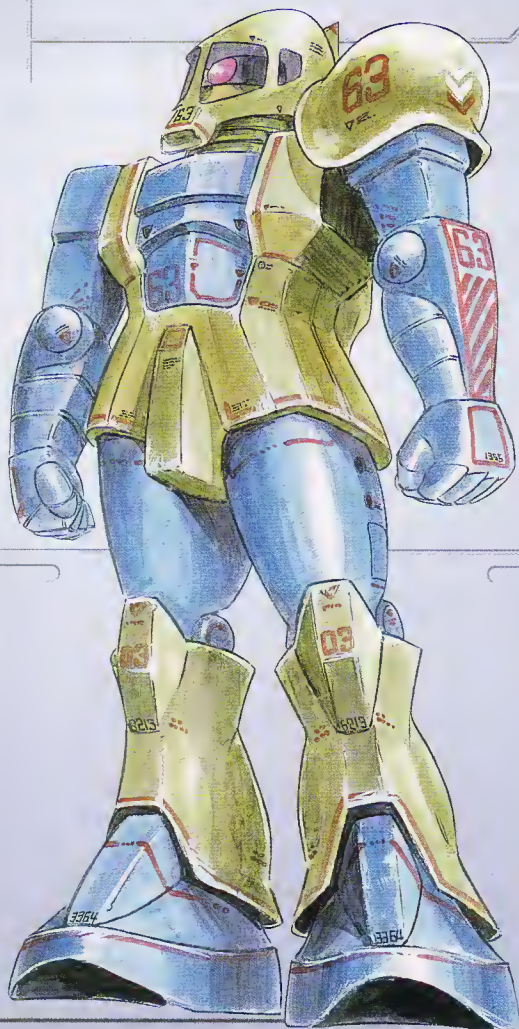
●装甲砲システムとはその名の通り、敵弾を防ぐための装甲が施された砲システムを指す。つまり歩兵の盾として敵火点からの火線を引き受け、なおかつ搭載砲によって味方部隊の突入掩護を行うことが運用思想の要諦なのだ。このシステムはかつて、突撃砲と呼ばれた(駆逐戦車・自走砲の運用法とは異なる)。AGSは旧世紀の後半、旧米陸軍で考案された名称である。



WEAPON

## 機体解説

本機は大戦終結後、RX-75を原型として開発された連邦陸軍の火力支援機である。原型機であるRX-75ガンタンクは、MSとしてはあまり高い評価を得られなかった。だが純然たる装甲戦闘車輛の一種として考えれば、非常に高性能な機体だと言えたのである。その本質を見抜いた陸軍は、ガンタンクにMSでなく装甲戦闘車輛としての評価を下し、その結果として、歩兵やMS部隊の突撃を支援するARMORED-GUN-SYSTEM(装甲を施された砲システム)の一種、RMV-1として量産化する計画を立案、これを議会に認めさせた。つまり、火力支援機としての運用および設計思想の確かさが実証されたのである。



# ZAKU I

MS-05



PRINCIPALITY OF  
ZEON



## ザクI (前期生産型)

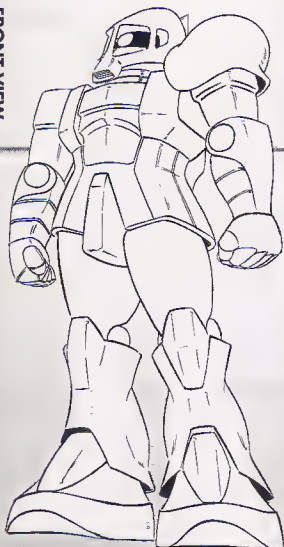
084



ジオン  
公国軍

全高: 17.5m  
 本体重量: 50.3 t  
 ジェネレータ出力: 899kw  
 主スラスター推力: 55000kg  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)

FRONT VIEW



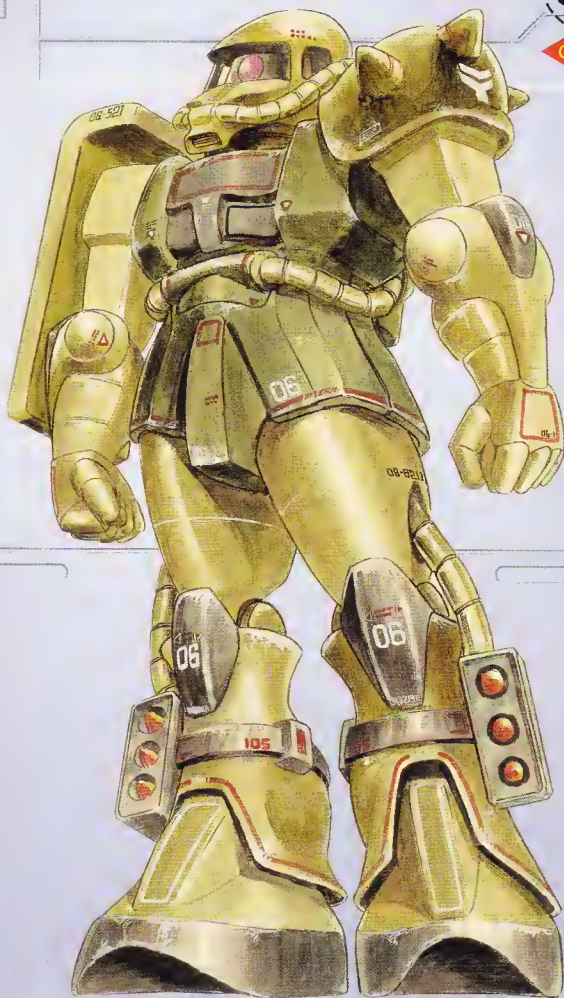
## 教導機動大隊

●ジオン公国軍は初の実戦用MSであるMS-051の採用に伴い、その運用法を確立するための部隊を創設した。それが教導機動大隊であり、部隊はMS推進派であるキシリア・ザビ大佐の指揮下に置かれたと記録されている。要員は、全軍から兵科の区別なく募集されたという。しかし有能な隊員を各部隊が喜んで手放すわけもなく、編成には様々な騒動があったらしい。

## 機体解説

本機は、MS-05の初期生産型である。機体が突撃機動軍に納入された後、運用および戦術研究、搭乗員の養成などを行うために機動教導大隊が編成された。本部隊の研究と錬成によって機体の問題点が洗い出され、さらなる改良機（B型）が量産機として実戦部隊に配備されることになる。以上の経緯からわかるように、本機とB型には若干の差異が存在する。最大のものとしては胸部の装甲形状（B型はA型と違い、完全な曲面で構成されている）であり、小さいものではコクピット内部機器のレイアウトなどである。大隊初期の名簿には、後に「黒い三連星」の渾名で連邦軍を震え上がらせるガイア、オルテガ、マッシュの名があった。

初出: 『機動戦士ガンダム』



# ZAKU II

MS-06J  
ZAKU II



PRINCIPALITY OF  
ZEON

MS-06J

MOBILE SUIT VARIATION

# 陸戦型ザクII

085



ジオン  
公国軍

全高：17.5m

本体重量：56.2t

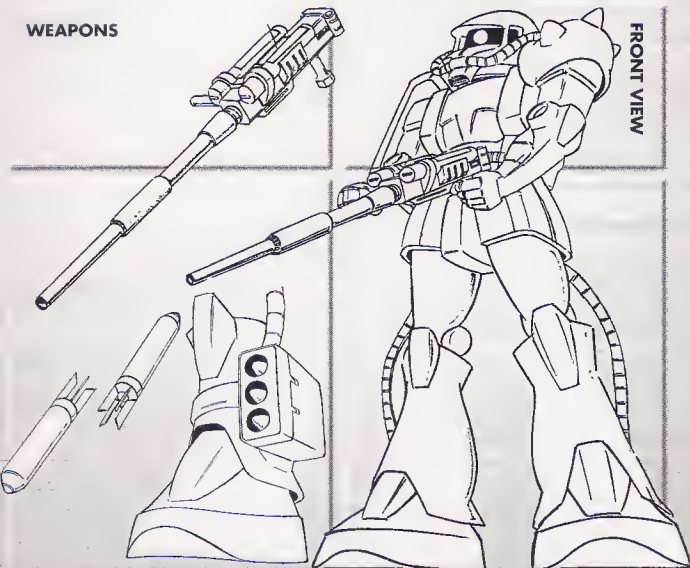
ジェネレータ出力：976kw

主スラスター推力：43300kg

装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

パイロット：コズン・グラハム他

## WEAPONS

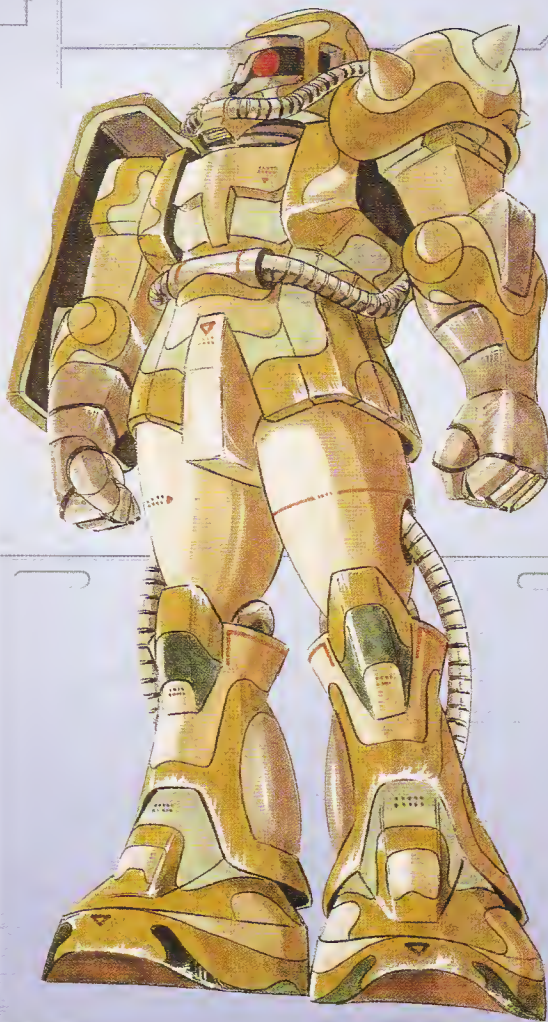


FRONT VIEW

## 機体解説

早期講和の機会を逸したジオン軍は、宇宙世紀0079年春に地球本土への侵攻を開始した。突撃機動軍は泥縄的ながら早急に地球方面軍を編成し、北米大陸や欧州に位置する地球連邦の中枢国家の撃破に乗り出す。作戦は見事に成功、ジオン軍は地球での地歩を手に入れたのである。この戦いでMSは再びその威力を発揮し、重力下戦における戦場の女王となった。この後、運用をより効率良く行うために軍部は、F型の改修機を考案した。それが地上戦に不必要な装備を削除した、陸戦型の名で知られるJ型である。姿勢制御用ロケットを取り除き、防塵用フィルターやラジエーターを装備した本機は稼働率を向上させることに成功したのであった。





# TYPE-J CAMOUFLAGE COLOR

MS-06J  
ZAKU II



PRINCIPALITY OF  
ZEON



## 陸戦型ザクII (迷彩塗装)

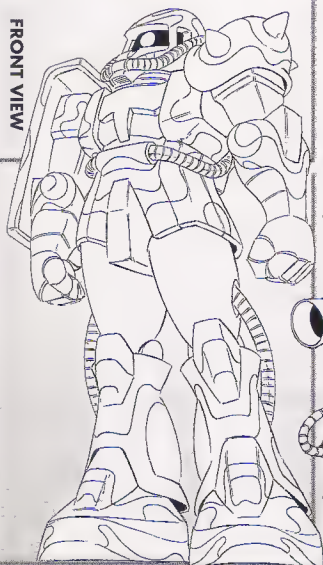
086



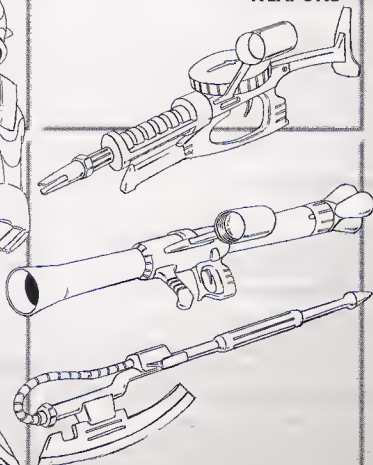
ジオン  
公国軍

全高：17.5m  
 本体重量：56.2t  
 ジェネレータ出力：976kw  
 主スラスター推力：43300kg  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

FRONT VIEW

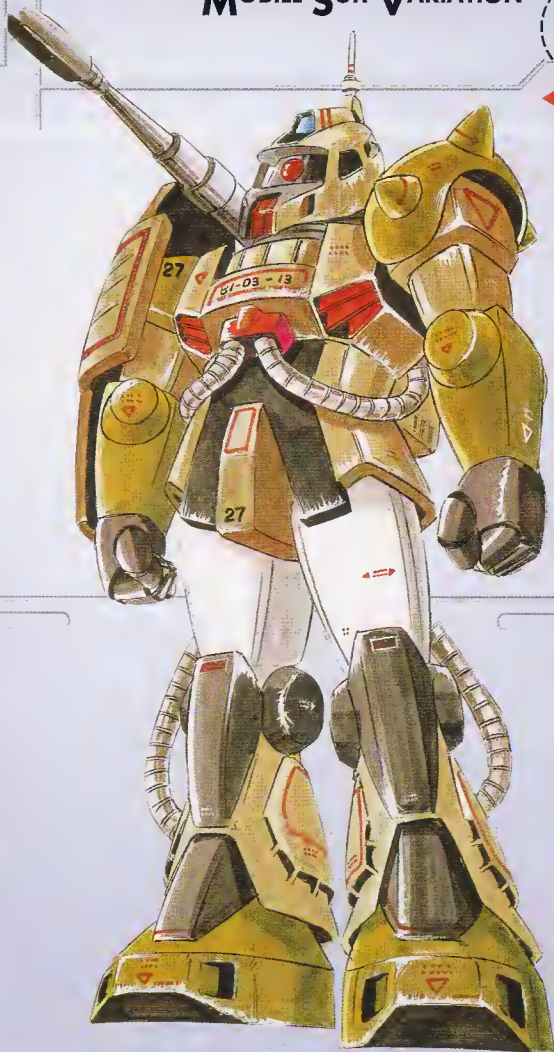


WEAPONS



## 機体解説

F型からJ型への基本的な改装は非常にスムーズに進んだ。これはMSが、もともと地上での運用を考慮に入れて設計されていたからだろう。つまり、コロニー内部における作戦運用である。この運用テキストには、戦前に機動教導大隊が作成した対装甲戦闘車両用戦術が記載されていた。ジオン軍は想定できるあらゆる戦術環境をシミュレートし、対応策を練っていたのだ。これなら、対MS戦など一切考慮していなかった連邦陸軍の装甲部隊を屈服させるなど、赤子の手をひねるよりも簡単なことただだろう。J型はこの後、陸戦の主役を機動性を大幅に高めたMS-09に譲り渡すが、大戦終結まで多くの戦場で活躍し戦友たちに親しまれたという。



# CANNON MODEL

MS-06K  
ZAKU II

PRINCIPALITY OF  
ZEON

## ザクキャノン

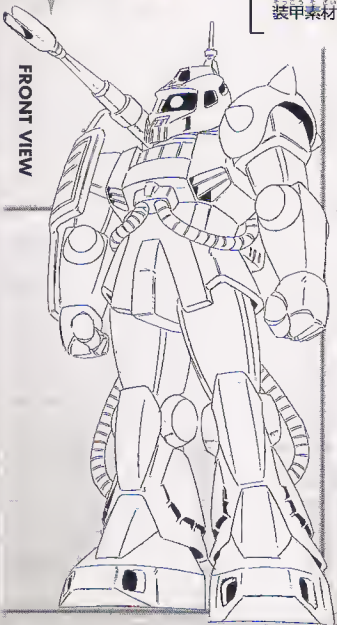
087



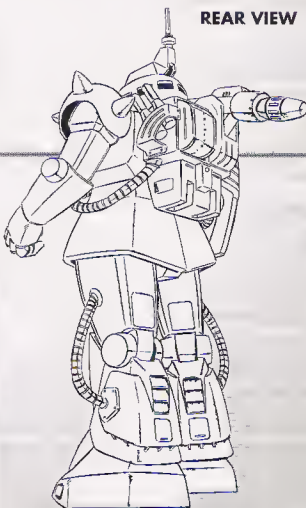
ジオン  
公国軍

全高：17.7m  
 本体重量：59.1t  
 ジェネレータ出力：976kw  
 主スラスター推力：41000kg  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

FRONT VIEW



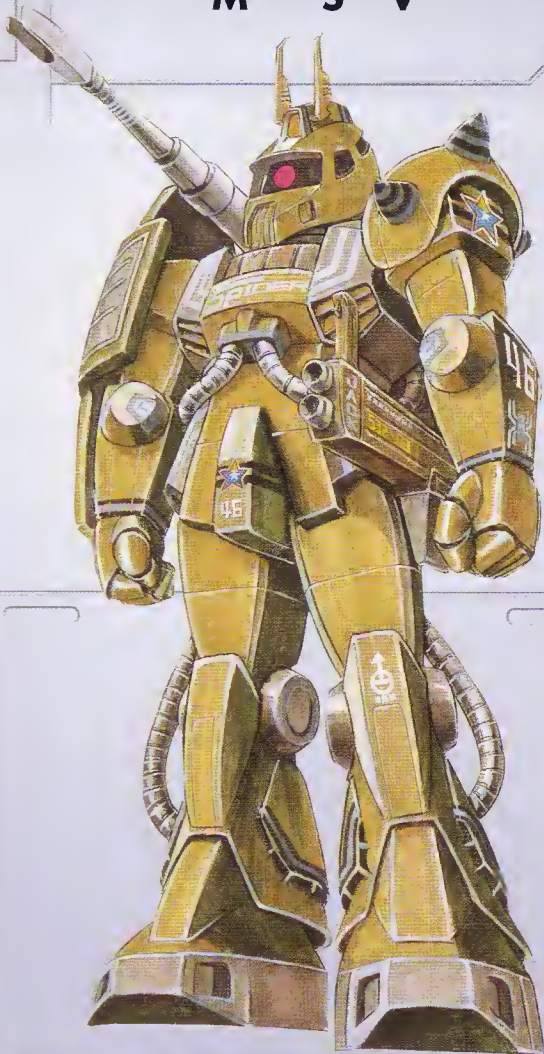
REAR VIEW



## 機体解説

ロケットを用いた跳躍による3次元機動を行うMSは、装甲車輻に対して無敵の強さを発揮した。しかし所詮は地上兵器、航空攻撃に対しては戦車などと同様に脆弱極まりないことに変わりはない。事実、攻撃機による被害も増大しはじめていた。対空兵器の随伴が必要とされたが、従来の対空車輻では機動戦を旨とするMSと作戦行動をとともにすることは不可能に近い。本機はこの問題を解決すべく立案されたのだが、RX計画とそれに連なるMS量産に関する情報が舞い込み、対空防衛よりも対MS戦を念頭に置いた設計に変更された。といっても、モノアイの全周式化、搭載火器の180ミリ両用滑腔砲への変更、脚部に補助推進器を追加したに止まった。





# CANNON MODEL

MS-06K  
ZAKU II



PRINCIPALITY OF  
ZEON



## ザクキャノン(ラビットタイプ) 088



ジオン  
こうこくぐん  
公国軍

全高: 17.7m

本体重量: 59.1t

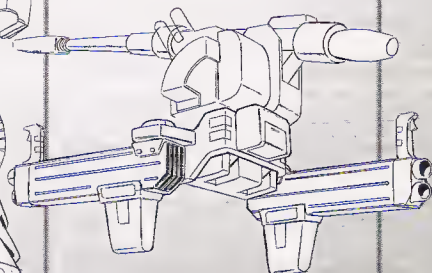
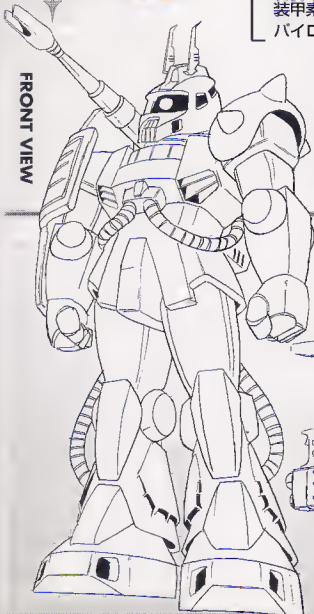
ジェネレータ出力: 976kw

主スラスター推力: 41000kg

装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)

パイロット: イアン・グレーデン他

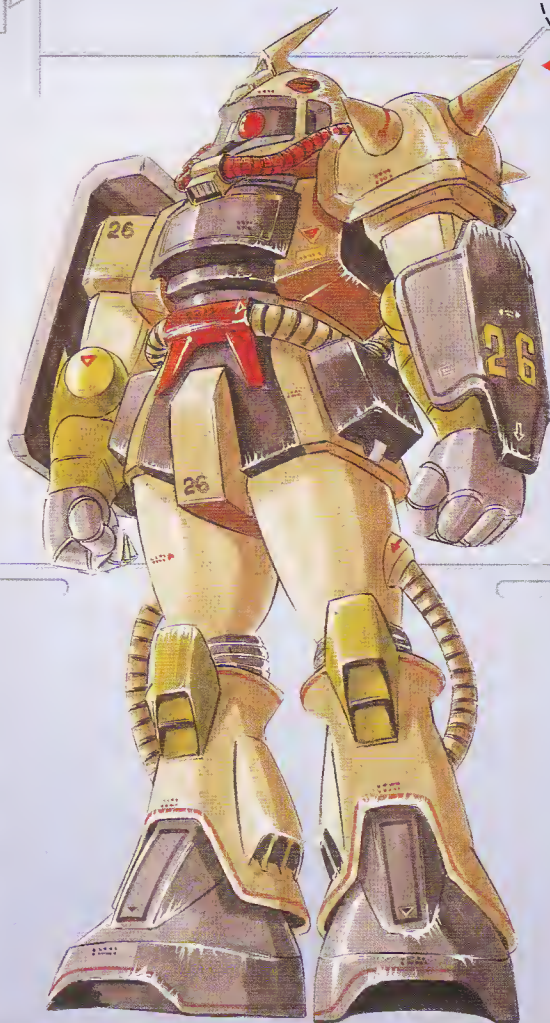
FRONT VIEW



CANNON PACK

## 機体解説

MS-06Kは終戦までに完成した試作機のうち、9機が北米での実戦に投入された。本機は頭部アンテナを2本に変更したもので、その外観から俗にラビット型と呼ばれている。パイロットはイアン・グレーデン中尉であり、彼はビッグ・ガンと呼ばれる連装式ロケット砲を装備することを好んだという。グレーデンはK型で最も戦果を挙げた将校であり、終戦までの戦果は、航空機34機、車両71両、MS2機だった。終戦後調査に当たった連邦軍情報部は、その卓越した能力から、彼がニュータイプの素養を持っていたのではないかと考えていたらしい。ケーブカナベラル基地で終戦を迎え、翌81年の10月に釈放されて共和国に復員を果たしている。



# DESERT MODEL

MS-06D  
ZAKU II

PRINCIPALITY OF  
ZEON

## ザク・デザートタイプ

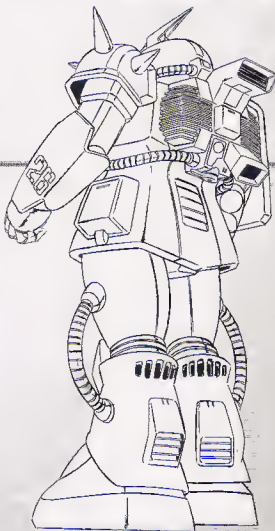
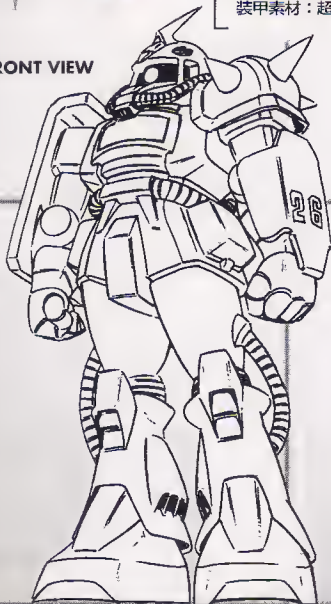
089



ジオン  
公国軍

全高：18.5m  
 本体重量：48.8 t  
 ジェネレータ出力：不明  
 主スラスター推力：不明  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

FRONT VIEW

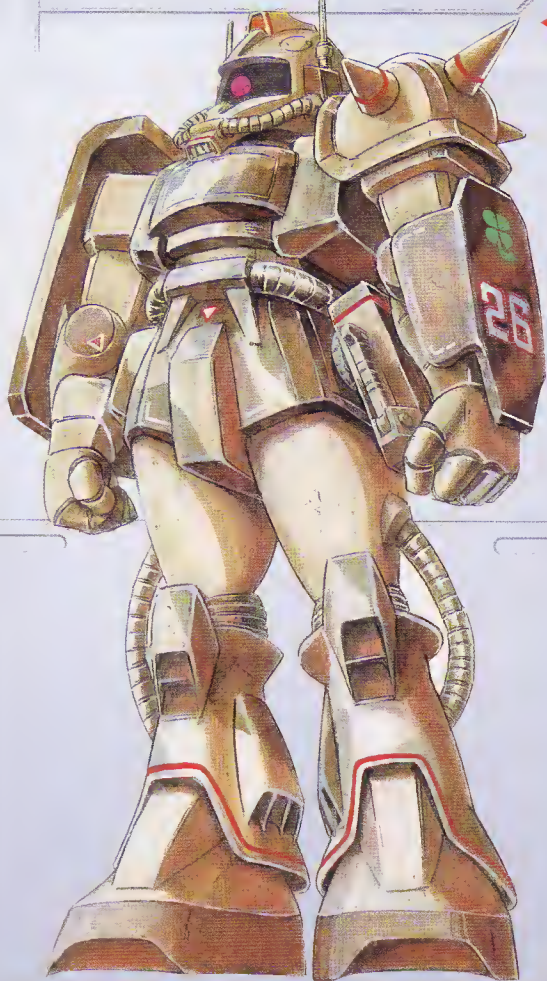


REAR VIEW

## 機体解説

地球本土侵攻後、その主兵であったザクIIには様々な改造が施された。それらの中で最も有名なのはJ型だが、前線からの要請がいちばん強かったのは、苛酷な地球の特殊環境、つまり熱帯や砂漠で運用が可能な局地戦機だったという。固定武装と運動性を強化した局地戦機（07型）の開発もすでに行われていたが、前線部隊は今日明白にでも機体を欲しがっていた。つまり戦略レベルで電撃戦を展開中の侵攻軍には、新規設計機の完成を待つ余裕はなかったのである。その結果、軽量化と出力の向上を図った、俗に砂漠戦仕様機と呼ばれるD型が生み出された。本機は増加装甲だけでなく、各種武装も充実しており、後に連邦軍将兵の恐怖の的となった。





# DESERT MODEL

MS-06D  
ZAKU II



PRINCIPALITY OF  
ZEON



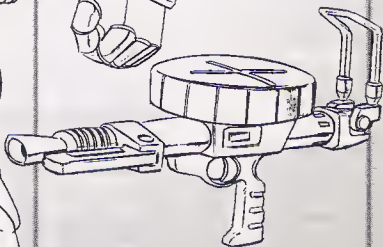
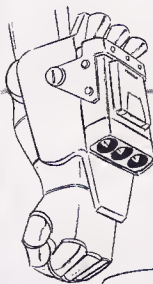
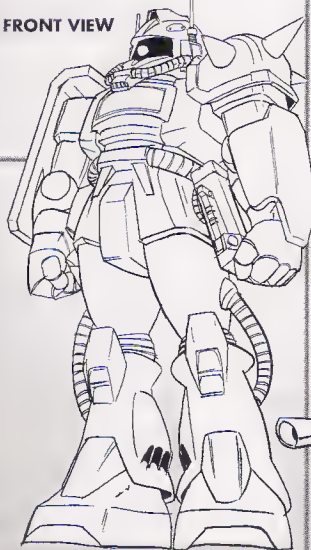
## ザク・デザートタイプ (カラカル隊) 090



ジオン  
公国軍

全高：18.5m  
 本体重量：48.8t  
 ジェネレータ出力：不明  
 主スラスター推力：不明  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）  
 パイロット：ロイ・グリンウッド他

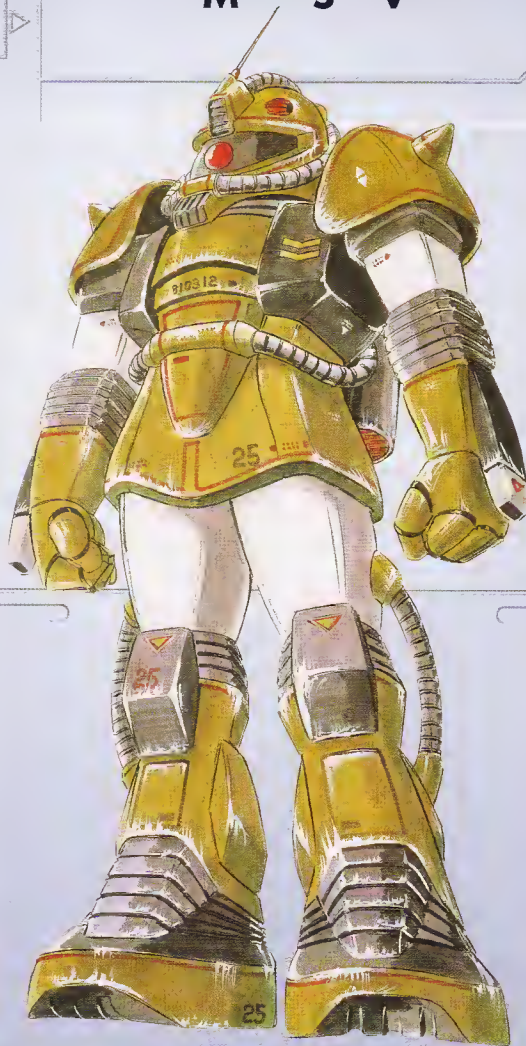
FRONT VIEW



WEAPONS

## 機体解説

D型には07型に先駆けて頭部に通信用アンテナが設けられた。試験部隊にはシングル型とダブル型の2機種が配備され、運用試験を行っていたという。試験の結果は上々であり、即座に2種類のD型が生産された。内訳は不明だが、生産工程の簡略化のため44機目からシングル・アンテナ型のみの生産となり、総計71機が配備されたと記録されている。試験部隊はコード名「カラカル」を与えられ、リビア砂漠からスエズ運河西岸を作戦地域として、機体の熟成を行った。そして奇襲作戦を得意とした彼らは、北アフリカ反攻を狙う連邦軍相手に試験部隊とは思えないほど大きな戦果を挙げる。部隊の活躍は、軍の士気向上に大きく貢献したという。



# MARINE MODEL

[ MS-06M  
ZAKU II ]

PRINCIPALITY OF  
ZEON

水<sup>すい</sup>中<sup>ちゆう</sup>戦<sup>せん</sup>型<sup>がた</sup>ザク<sup>ざく</sup>Ⅱ

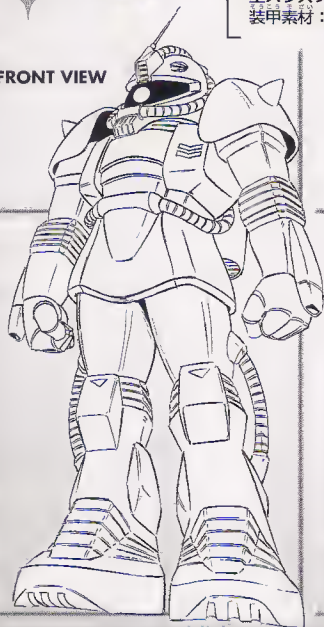
091



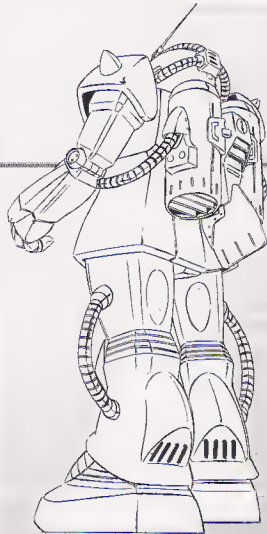
ジオン  
公国軍

全高<sup>せんこう</sup>: 17.5m  
 本体重量<sup>ほんたいじゆうりやう</sup>: 43.3t  
 ジェネレータ出力<sup>じねれーたでうりつ</sup>: 不明  
 主スラスター推力<sup>しゅすらすたーおうれい</sup>: 不明  
 装甲素材<sup>そうこうそざい</sup>: 超高張力鋼<sup>ちゆうかうちやうりきこう</sup> (超硬スチール合金<sup>ちゆうかうすちールがうごう)</sup>)

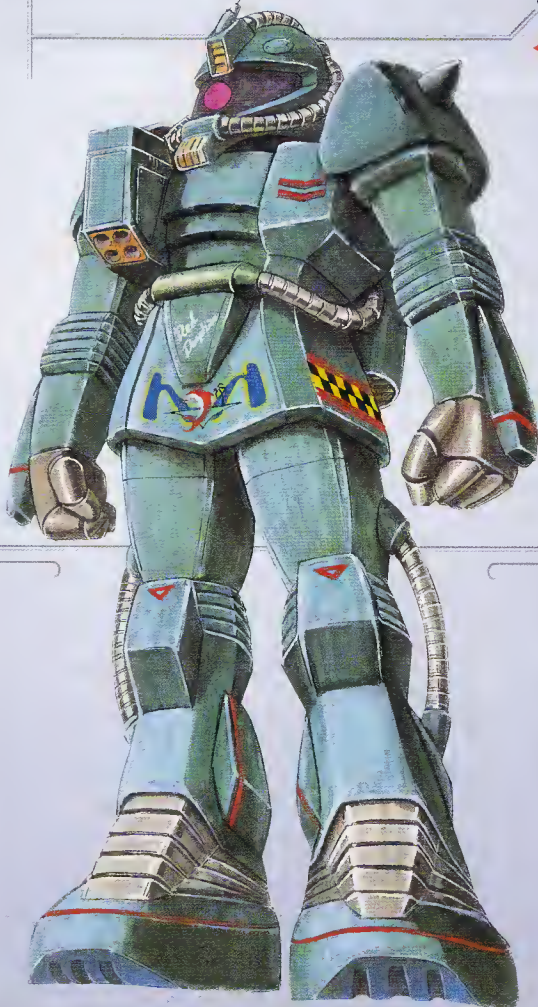
FRONT VIEW



REAR VIEW

機<sup>き</sup>体<sup>たい</sup>解<sup>かい</sup>説<sup>せつ</sup>

独立戦争緒戦においてジオン軍は大きな戦果を挙げたものの、所期の戦略目的である「戦争の早期講和」の達成には完全に失敗してしまった。再び連邦政府を交渉のテーブルに座らせるには、今まで以上の軍事的成果が必要であり、地球本土侵攻作戦はその実現のために実施されたのである。侵攻作戦の究極の決め手は、連邦軍統合参謀本部の位置する地球最大の拠点・南米ジャブロー基地の攻略作戦だった。水陸両用作戦に用いるためのMSの開発は、この作戦を主眼として開始される。ザクⅡは冗長性に優れ、様々な派生型を生み出したが、両用作戦機であるM型の開発は非常に難航した。結局M型は、新機材の実験機として誕生することになるのだった。



# MARINE MODEL

MS-06M  
ZAKU II



PRINCIPALITY OF  
ZEON



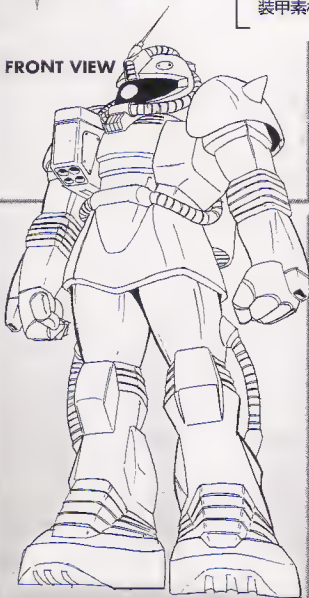
## 水中戦型ザクⅡ (レッドドルフィン隊) 092



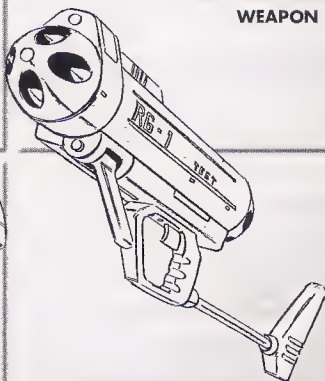
ジオン  
公国軍

全高：17.5m  
 本体重量：43.3t  
 ジェネレータ出力：不明  
 主スラスター推力：不明  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

FRONT VIEW

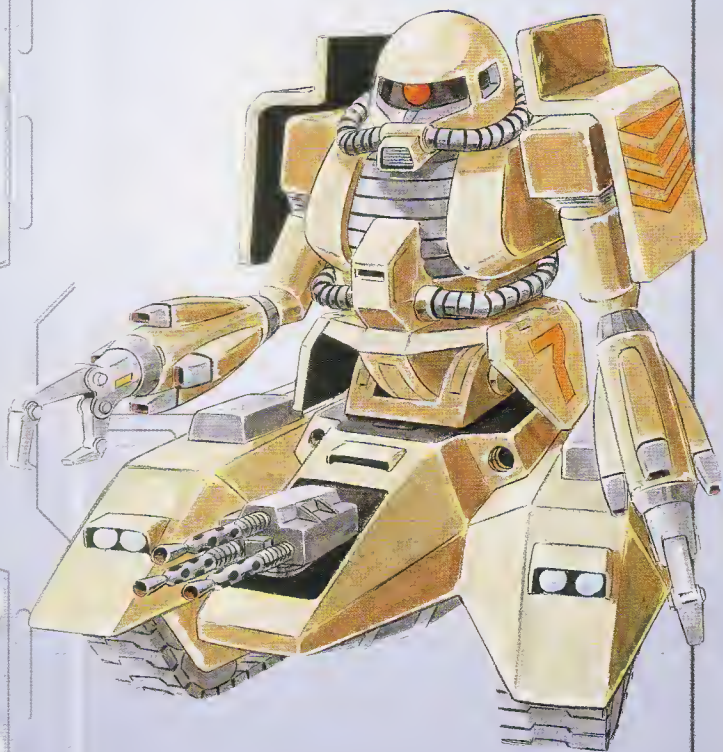


WEAPON



## 機体解説

M型の開発は防水加工が思うようにはかどらず、その結果、軍部は本計画をあっさりと放棄してしまう。しかし、本機は水中戦用兵装の実験機として用いられ、新設計の水陸両用MSの開発に貢献する。実験部隊「シーサーベント」での任務終了後、生産された7機のM型は倉庫で眠りにつく。だが大戦後期、両用作戦MSの稼働機が定数割れたことにより、M型は実戦機として戦場に投入されることになった。本機最後の参加作戦は、自軍の北アフリカへの撤退を掩護するために地中海で行われた陽動上陸作戦である。潜水艦戦力最後の全力出撃といわれる本作戦だが、M型がどのような戦果を挙げたかは、まったく記録に残っていない。



# ZAKUTANK

MS-06V



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## ザクタンク

093



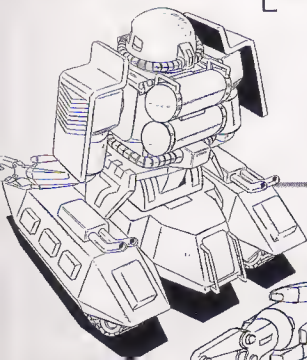
ジオン  
こうこくぐん  
公国軍

全高：14.7m

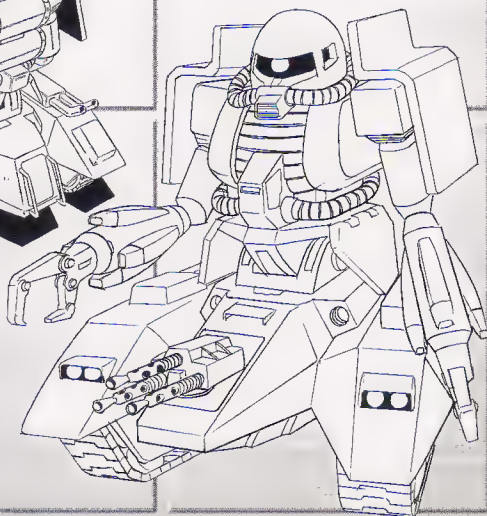
本体重量：53.6t

ジェネレータ出力：不明

装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）



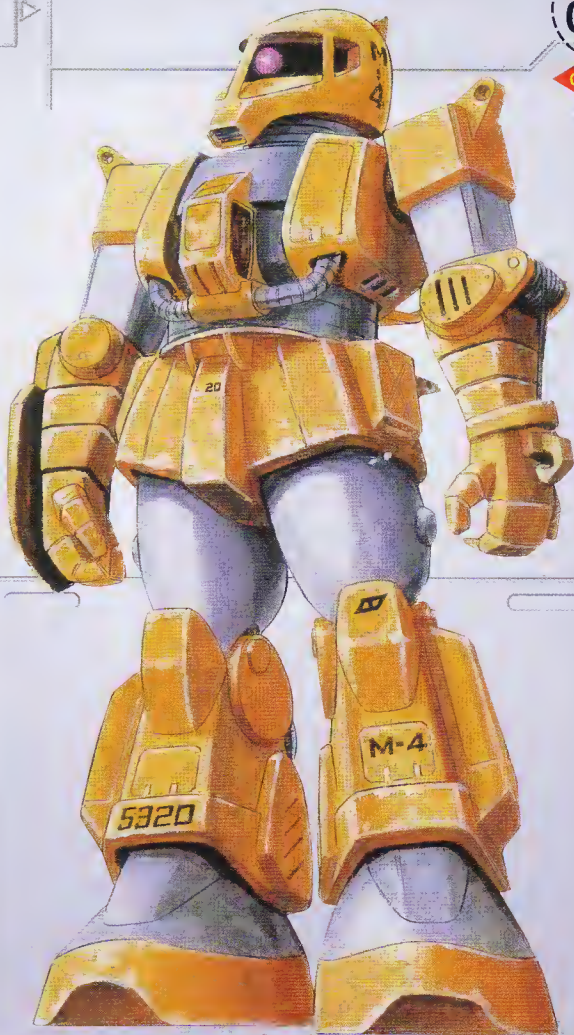
REAR VIEW



FRONT VIEW

## 機体解説

地球本土侵攻後、野戦の規模が大きくなるにつれ、ジオン軍は兵站部隊や工兵隊の充実化の必要性を感じるようになった。宇宙国家の軍隊であるジオン軍では、宇宙が主であって陸は従である。つまりジオン軍の戦争支援システムはあくまでも宇宙戦のために整備されてきたものであり、地球規模の地上戦を戦い抜くにはまったくの力不足だったのだ。その力不足を補うために生まれたのが、廃品MSを改造した本機V型だ。本機は軍部の計画によって建造されたものではなく、アフリカ戦線の現地部隊が作り上げた機体である。だがこのMS再利用コンセプトは各地の部隊から注目を受け、その結果数多くの作業機が建造されたのであった。



# WORKING MODEL

MS-06W  
ZAKU II



PRINCIPALITY OF  
ZEON



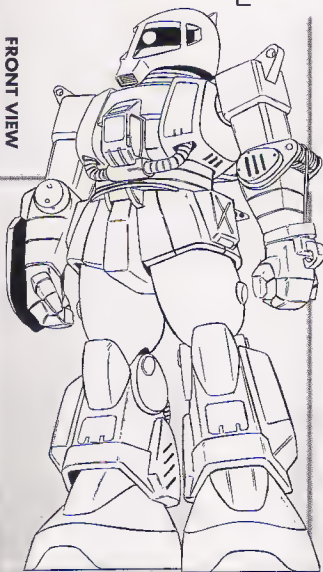
# 一般作業型ザク

094

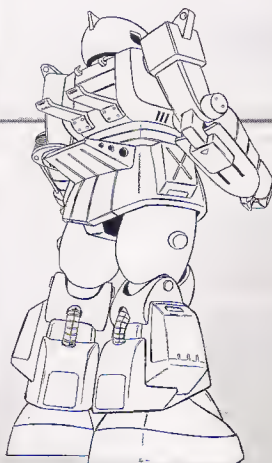
ジオン  
公国軍

全高: 17.7m  
 本体重量: 51.8t  
 ジェネレータ出力: 不明  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)

FRONT VIEW



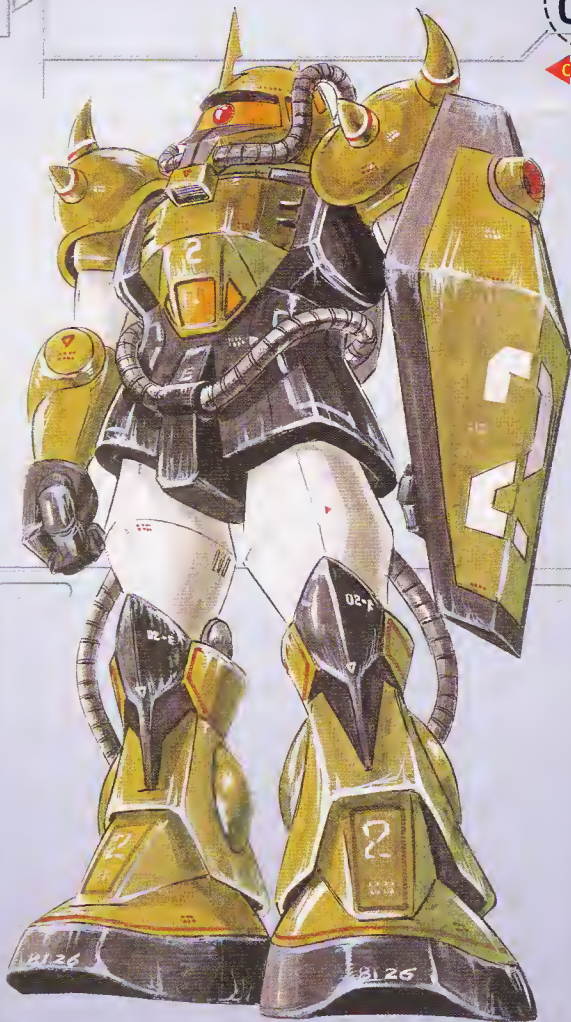
REAR VIEW



## 機体解説

本機はW型と呼ばれているが、これは軍の制式番号ではない。大戦中期にアジア西部の部隊で建造された、一般作業用の現地改造機に便宜的に与えられたものである。戦後、連邦軍に接收された機体のほとんどが、O5型やO6型の部品を使ったものだったといわれている。中にはO7型の部品を流用した機体もあったらしい。本機は塹壕構築や擱坐した車輛やMSの回収、大荷物の運搬などを目的に建造されており、歩兵や工兵たちから非常に親しまれていたと伝えられている。実際、身一つで敵と対峙する歩兵には、その鋼鉄の巨体は頼もしく見えただろうと察するのは難しくない。こうして本機は、各地の部隊で終戦まで活躍するのである。

初出: 『機動戦士ガンダム MSV』



# PROTO TYPE GOUF

[ YMS-07 ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## プロトタイプ・グフ

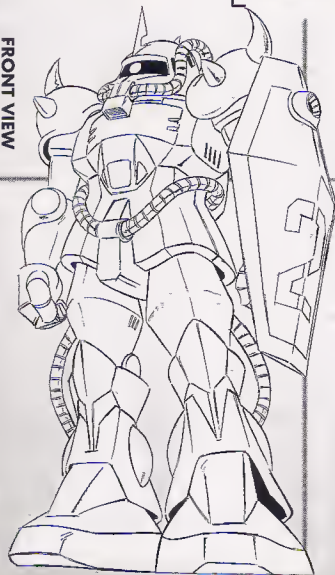
095



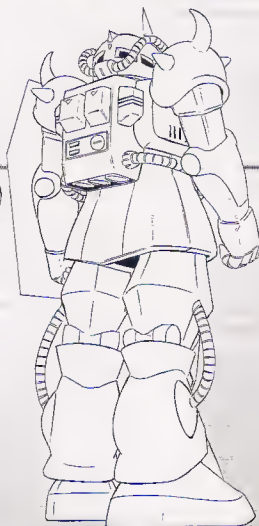
ジオン  
公国軍

全高：18.2m  
 本体重量：58.2t  
 ジェネレータ出力：不明  
 主スラスター推力：不明  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

FRONT VIEW



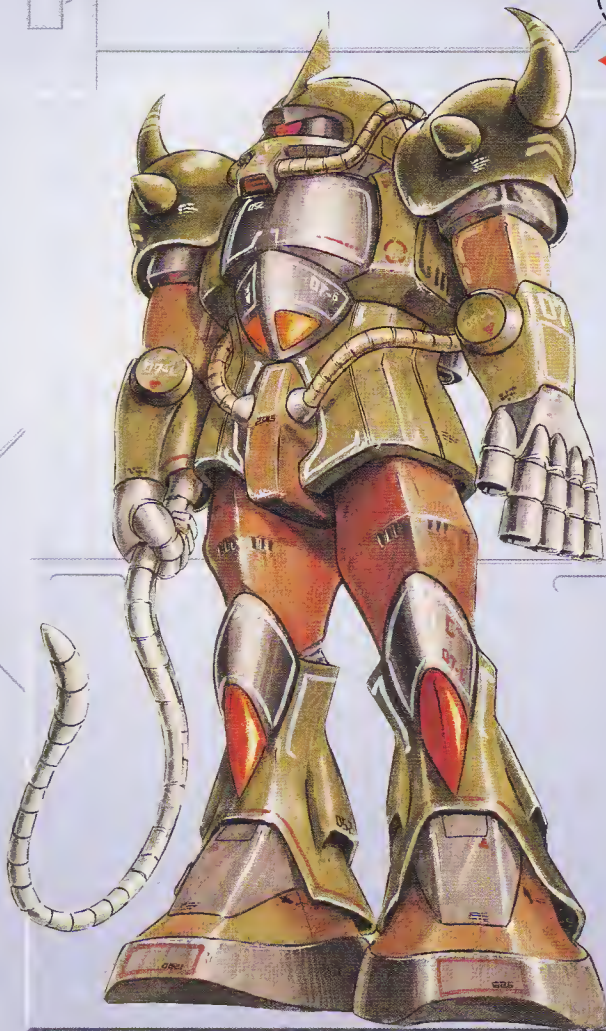
REAR VIEW



## 機体解説

本来MSとは宇宙戦用兵器であり、地球の環境下での運用効率はあまり芳しいものではない。地球侵攻後、ジオン軍は地上戦に不必要な装備を削り、ソフトウェアを換装したJ型を開発したが、所詮はその場しのぎの策でしかないことは誰の目にも明白だった。事実、陸戦用新設計機の開発はJ型の生産開始とほぼ同時に始まっている。新規設計機はYMS-07と08の2案が用意され、競作という形を採っていた。本機YMS-07は06型の拡大設計案といわれ、実際多くの部品を共有している。驚くべきなのは、本機はザク以上の装甲を持ちながら、徹底した部品の軽量化と冷却機能の充実によって、在来機以上の運動性能を持ったということだろう。





**GOUF**

**MS-07B**



**PRINCIPALITY OF  
ZEON**

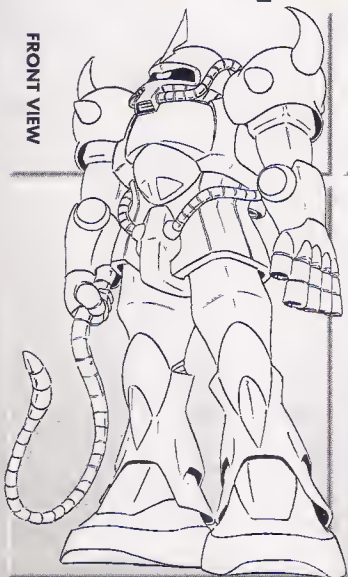




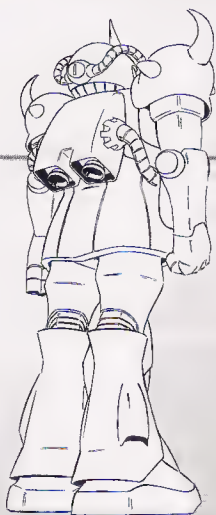
ジオン  
公国軍

全高：18.2m  
 本体重量：58.2t  
 ジェネレータ出力：1034kw  
 主スラスター推力：40700kg  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）  
 パイロット：ランバ・ラル他

FRONT VIEW

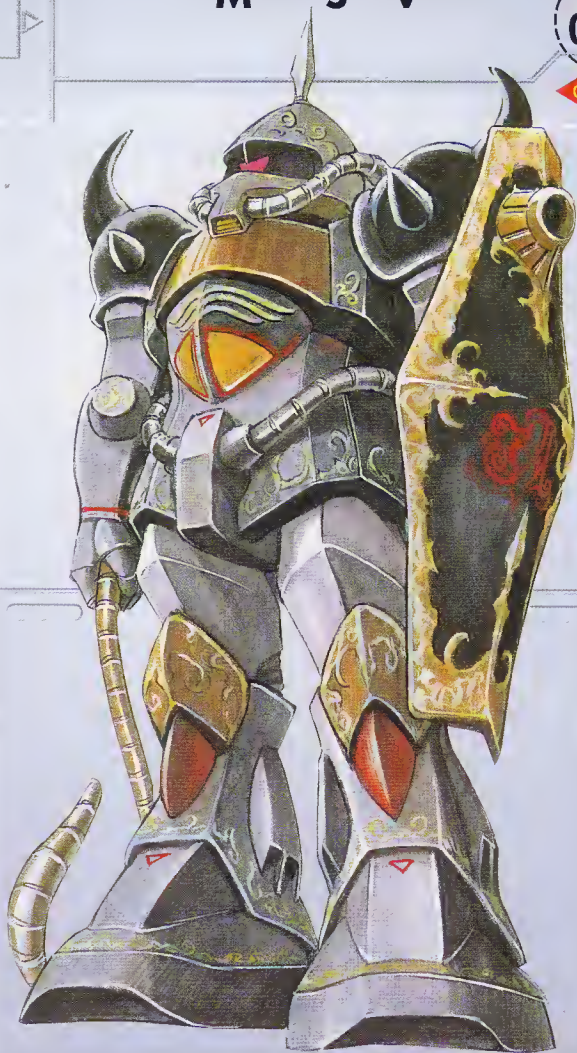


REAR VIEW



## 機体解説

本機は、腕部に75ミリ機関砲やヒートロッドを装備したYMS-07 3号機の装甲形状に手直しを加えて量産化したものである。こうして陸戦主力機はザクからグフへと交代を始めたのだが、部隊配備後に様々な問題点が浮上してきた。その一つは腕部機関砲について、である。この機関砲は曲射砲身を採用しており、非常に柔軟性に富んだ運用が可能だと実験部隊では結論した。が、外装式武装に馴れていたパイロットたちにとって、この新機軸は単に扱いづらいものでしかなかったのである。結局この装備は、一部の技量の高いパイロットのみが使いこなせるだけで、多くの部隊は機関砲を取り外した機体を使うようになっていったという。



# CUSTOMIZED MODEL

[ MS-07B  
GOUF ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## グフ (マ・クベ専用機)

097



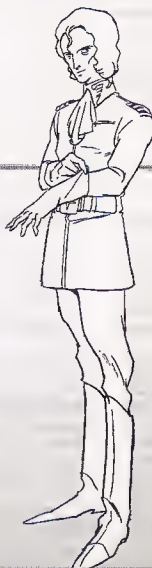
ジオン  
公国軍

全高：18.2m  
 本体重量：58.8t  
 ジェネレータ出力：不明  
 主スラスター推力：不明  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）  
 パイロット：マ・クベ

FRONT VIEW



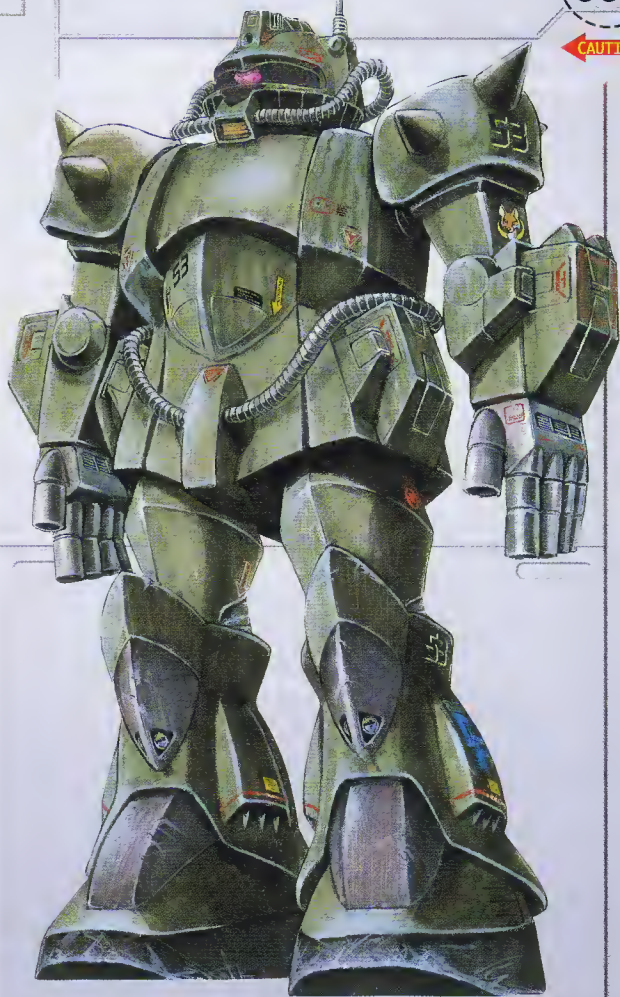
PILOT



## 機体解説

ザクⅡと同様、グフにも将校が独自に改造を施した機体が存在する。本機はザビ家長女キシリア少将の懐刀として知られる、マ・クベ大佐の乗機であり、カスタム機としては最も有名だと思われる。頭部にスピアヘッド状の装飾を持ち（アンテナとしての機能はない）、装甲各部にエングレーブが施されているのが最大の特徴となっている。しかしこれはあくまでも儀仗用の意味合いが強く、実際残されている記録では、性能および武装面において量産型との差異はなかったとされている。逆に言えば、本機は実戦機としての能力は充分に有していたと言えるだろう。だが結局、オデッサの防衛戦に参加せず、性能を発揮することはなかった。





# HEAVY ARMS CUSTOMIZED MODEL

MS-07C-3  
GOUF

PRINCIPALITY OF  
ZEON



## グフ重装型

098



ジオン  
公国軍

全高：17.7m

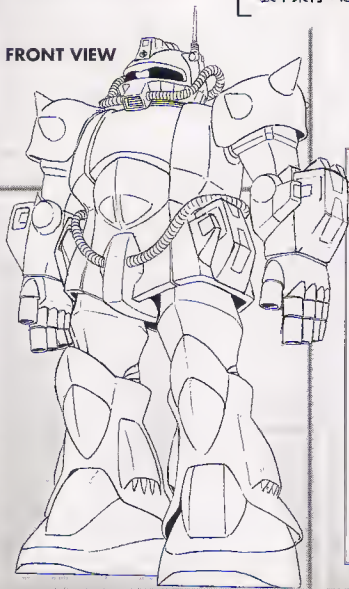
本体重量：64.2t

ジェネレータ出力：不明

主スラスター推力：不明

装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

FRONT VIEW

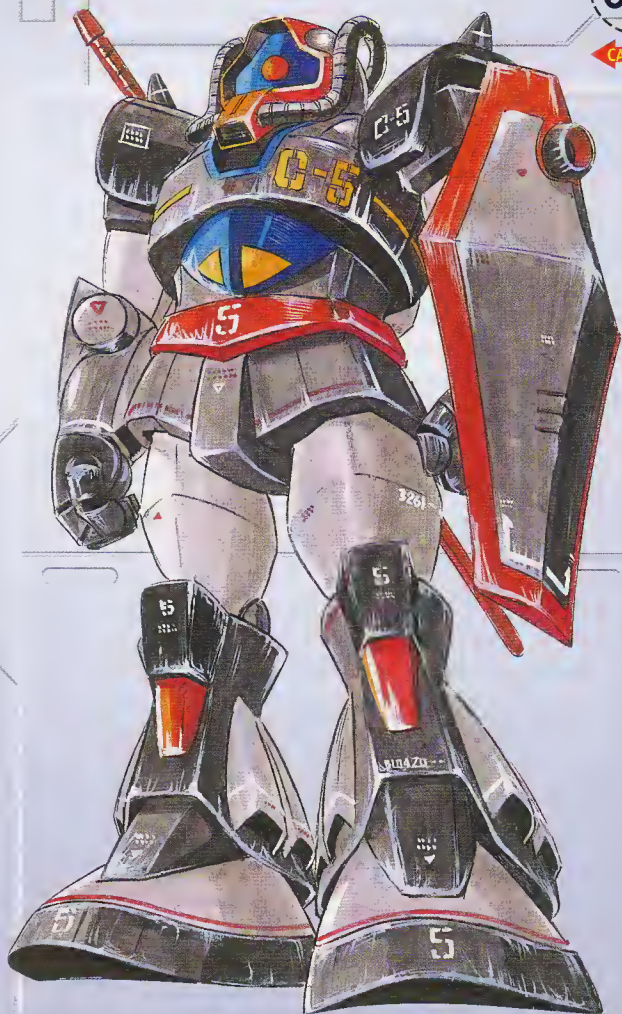


## 直協砲兵

●歩兵部隊に対する直接支援や敵攻撃の阻止、進行線上に存在する障害物や火点をはじめとする陣地設備の破壊を任務とする砲兵を直接協同砲兵（直協砲兵）という。直接支援砲兵とは、戦闘時において歩兵の攻撃を支援する砲兵を指す言葉である。しかし現場ではこれらの厳密な区別は行われず、総じて直協砲兵と呼称する場合が多い。戦争が機械化される以前は野砲や歩兵砲が用いられたが、旧世紀後半に勃発した第二次世界大戦以降は戦車などの車体を利用し、機動力を持った突撃砲・自走砲などがその任にあたったという。

## 機体解説

本機は歩兵支援任務のために火力の増強に主眼を置き、改修が施された機体である。両腕に85ミリ自動砲を10門装備し、防盾を廃止するかわりに装甲を強化した。この機体は従来機のような機動兵器と違い、「機動力を持つ装甲砲」というコンセプトのもとに開発されているため、多少の運動性の低下は問題ではなかったのである。つまり、本機は対装甲戦ではなく、歩兵部隊に対する直接支援、阻止、障害物や陣地などの破壊を任務とする直接支援砲兵として配備されたのである。歩兵大隊に優先配備された本機は、主にヨーロッパ方面での作戦に従事したと記録されている。だがその詳細を記した小隊日誌は、戦後の混乱で喪失してしまったという。



# EXPERIMENT MODEL

MS-07C-5  
GOUF



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## グフ試作実験機

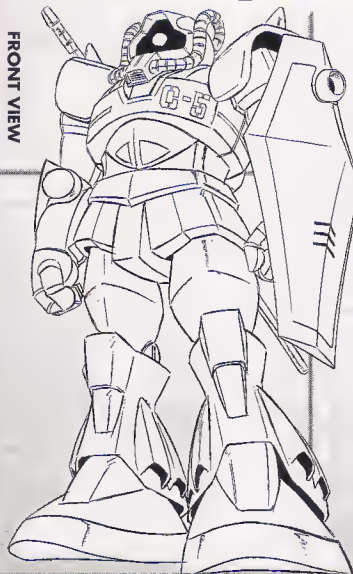
099



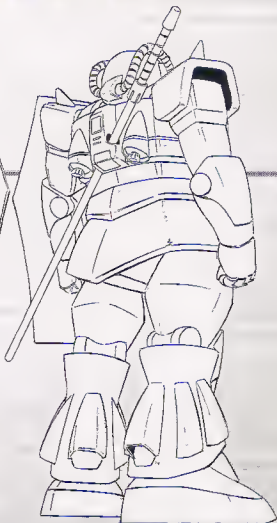
ジオン  
公国軍

全高 18.7m  
 本体重量: 57.4t  
 ジェネレータ出力: 不明  
 主スラスター推力: 不明  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)

FRONT VIEW



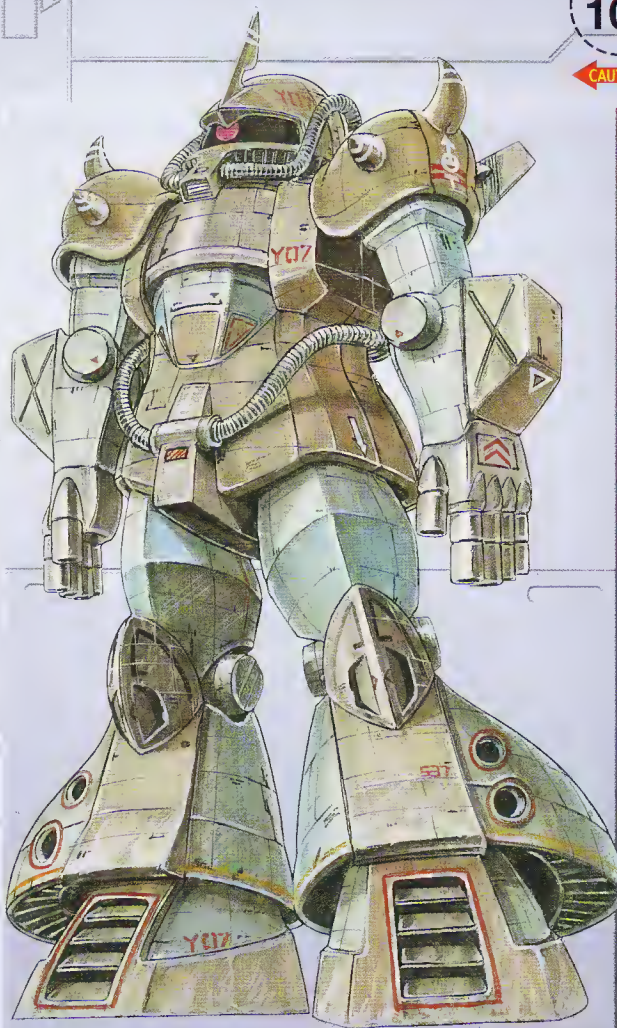
REAR VIEW



## 機体解説

本機はマイナーチェンジシリーズとして知られるC型系の中でも、最も異色の機体である。腕のヒートロッドと内蔵機関砲を撤去し、07型の特徴だった固定武装を廃したのだ。実はこれは07型をライセンス生産していたツィマッド社が、開発中の局地戦機用機の実験機としてB型を改修した機体であり、軍によって便宜的にC-5の型番を授けられたのである。テストされた新機材は新型ターレットとそれに連なる関連機器および電子機材、そして装甲形状と脚部推進器であった。テストは北米の試験場で行われ、収集データはすぐさま本国に送られて09型の開発にフィードバックされた。本機の生産は1機のみで、実戦参加の記録はない。





# FLYING TEST MODEL

[ MS-07H  
GOUF ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON



# グフ (飛行試験型 1号機)

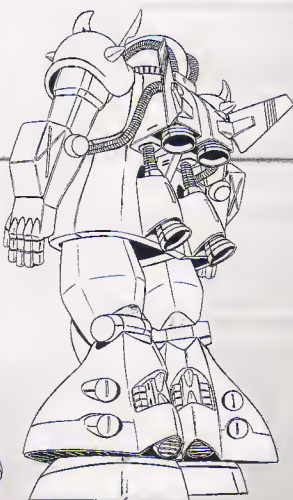
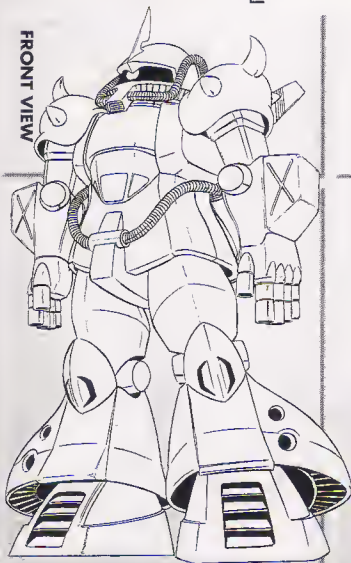
100



ジオン  
公国軍

全高: 18.8m  
 本体重量: 63.9t  
 ジェネレータ出力: 不明  
 主スラスター推力: 不明  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)

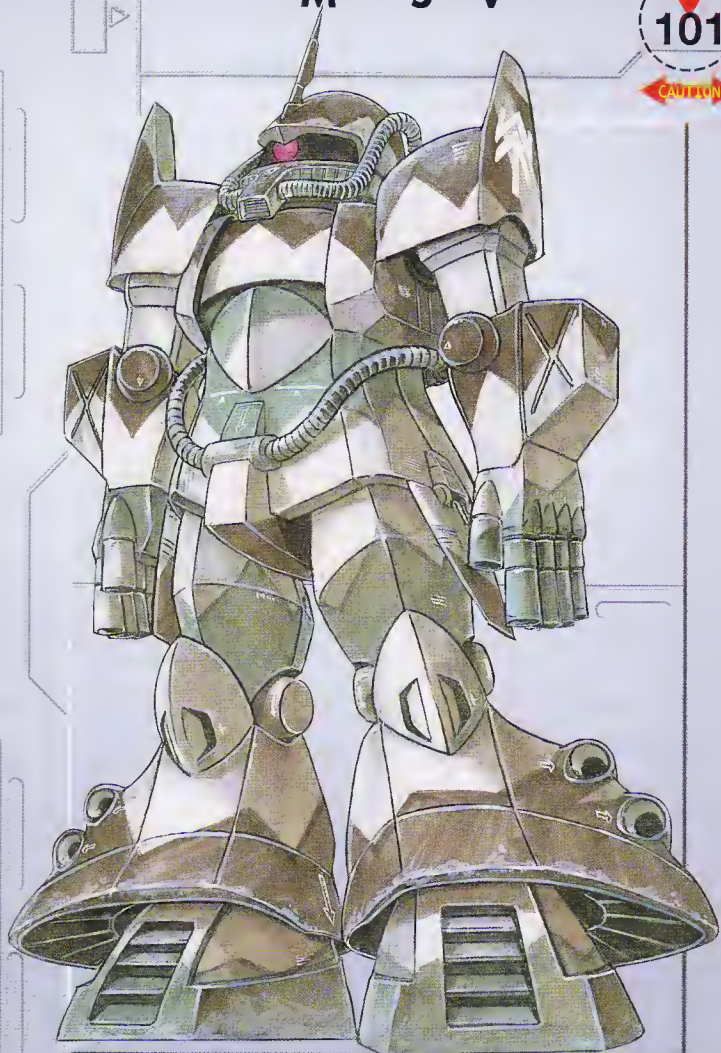
FRONT VIEW



REAR VIEW

## 機体解説

ジオン軍の地球侵攻後の最大の頭痛のタネとなっていたのは、いうまでもなく戦力の中核たるMSの機動性の低下である。戦力強度において脆弱なジオン軍は、戦略レベルにおいて戦線を構築せずに、あくまでも作戦レベルの機動戦闘を連邦軍に挑む必要性があった。宇宙ではそれをMS部隊によって実現したが、重力下では肝心のMSの機動性は低く、作戦遂行に大きな悪影響を及ぼし始めていたのである。アイザック・ウーヤミック大佐はこの事態を憂慮し、軍部に無謀ともいえるMSの飛行可能化計画を上申した。こうして開発されたのが、07型を改修した飛行試験機 (H型) である。機体は4機製作されたが、計画はやがて中止となってしまう。



# FLYING TEST MODEL

MS-07H-4  
GOUF



PRINCIPALITY OF  
ZEON

# グフ (飛行試験型4号機)

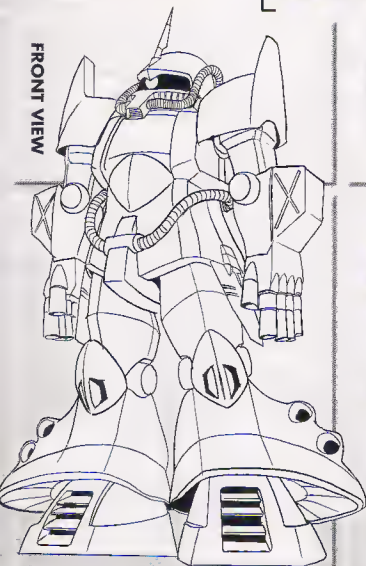
101



ジオン  
公国軍

全高: 18.8m  
 本体重量: 63.9t  
 ジェネレータ出力: 不明  
 主スラスター推力: 不明  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)

FRONT VIEW



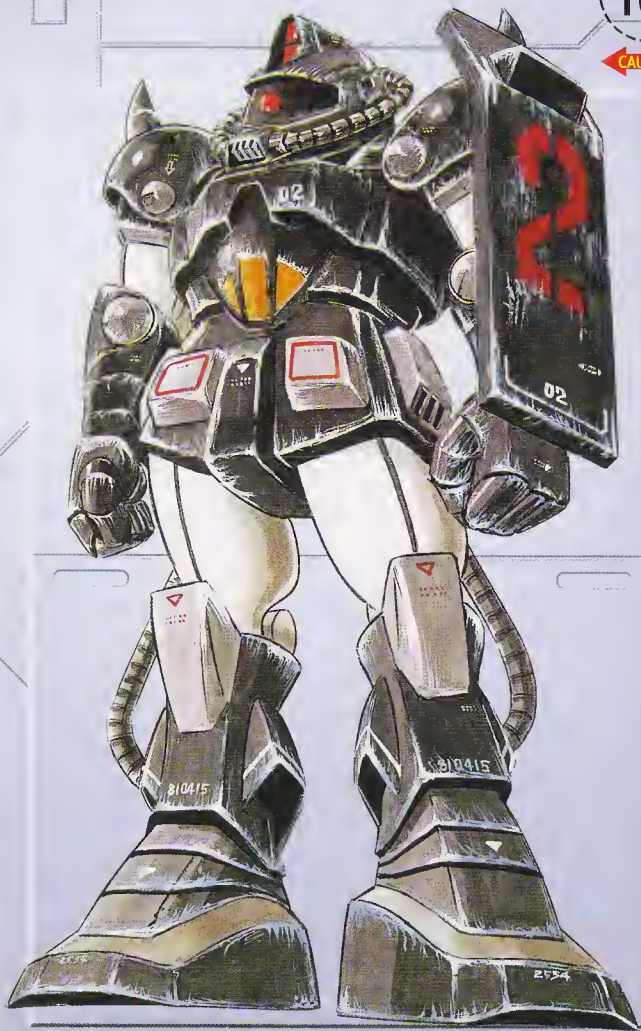
## MSと戦術理論

●ジオン公国軍の戦闘指揮官たちは、MSを中核とした兵力による機動作戦を得意とした。「機動」とは敵との交戦前後もしくは交戦中に軍隊が行う、機略(その場に合った適切な謀りごと)的運動を意味する。つまりジオン軍は、自軍の部隊を一定の場所に固定せずに状況に応じて自在に展開させる作戦を基本としていたのだ。敵の主兵力が迫れば引き、高い運動性を用いて弱体な側背に回り込み打撃を加える。敵がこれに対応し戦力の重点を自軍に向けたら、再び部隊を移動させて攻撃を避け、さらなる攻撃を側背に加える。このような機動力を有効に生かす作戦を行ったからこそ、ジオン軍は数倍の兵力を擁する地球連邦軍と互角の戦いを続けられたのだろう。

## 機体解説

北米に送られた4機の試験機は、わずか4週間の内に合計38回の試験飛行を行った。しかし実状は惨憺たるもので、離陸試験から航行試験に移るまでの間、なんと十数回に及ぶトラブルが発生したのである。計画期間後の検討で軍部は研究の縮小化を決定、3号機と4号機のみが研究班に残された。ウーヤミック大佐は精力的に研究と改良を進め、滞空時間と運動性能の問題を、ホバーエンジンをジオン製のものから地球製に換装することで解決した。だがこのエンジンは、出力の点では問題はなかったが調整が非常に難しく、整備兵を泣かせたという。同機は試験を続けたものの10日め、機体が空中爆発を起こし喪失、計画は完全に頓挫してしまう。





# HIGH MANEUVER PROTO MODEL

[ YMS-08A ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON



## 高機動型試作機

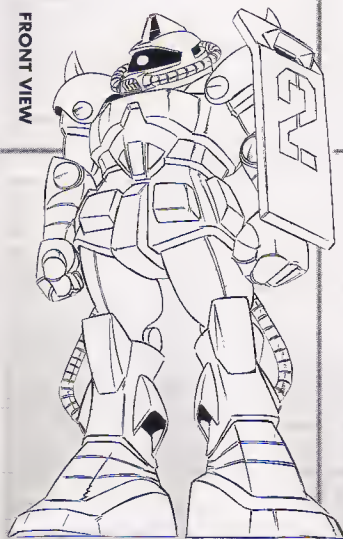
102



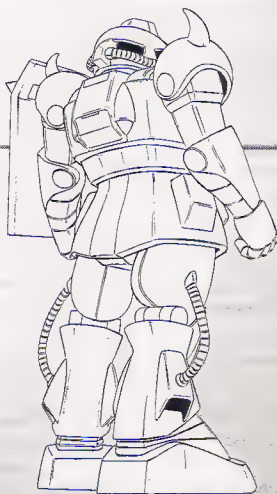
ジオン  
公国軍

全高：17.7m  
 本体重量：55.7t  
 ジェネレータ出力：不明  
 主スラスター推力：不明  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

FRONT VIEW

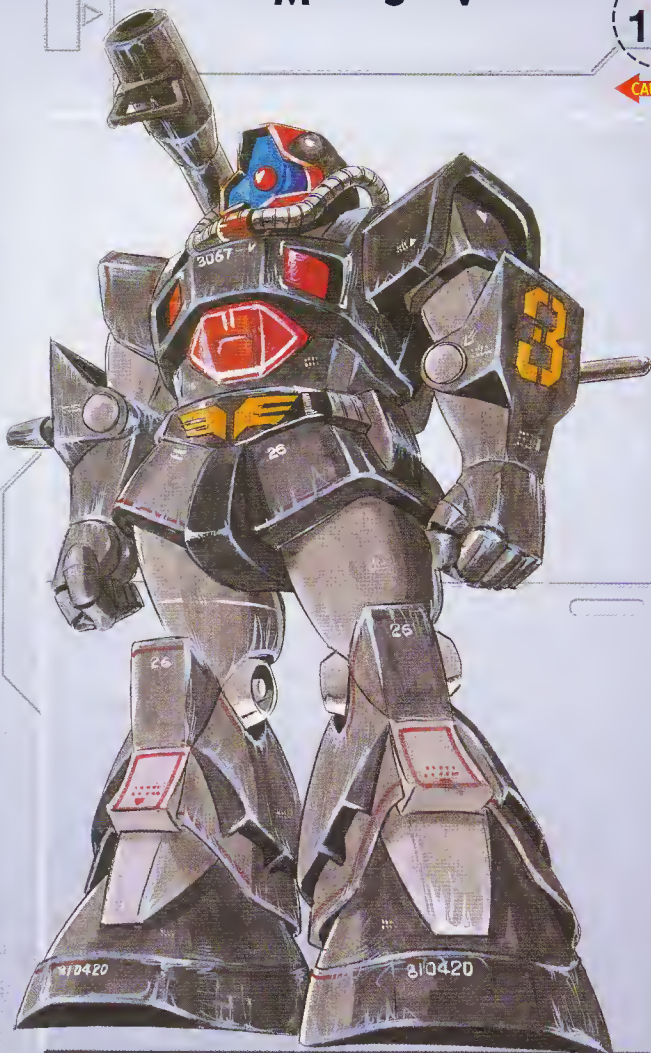


REAR VIEW



## 機体解説

本格的な陸戦用MSの開発にあたって、YMS-07と競作の形で設計が進められたのが、このYMS-08Aである。開発は後に09型を製作し、一躍その名を知られることになるツィマッド社が行った。脚部に大推力ロケットモーターを装備しており、計画初期段階ではJ型を上回るジャンプが可能とされていたらしい。しかしこのロケットは燃焼効率が非常に低く、ツィマッド社の売り込み文句は画餅に終わってしまった。結局、この計画は社上層部と軍部の判断により中止とされ、次期陸戦用MSはジオニック社のYMS-07案へと一本化されることになる。本計画は失敗に終わったが、ここで培われた技術はやがて09型で結実するのである。



# PROTO MODEL

[ YMS-09  
DOM ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## プロトタイプ・ドム

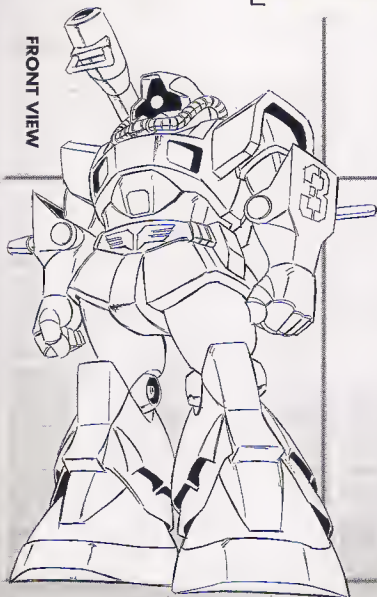
103



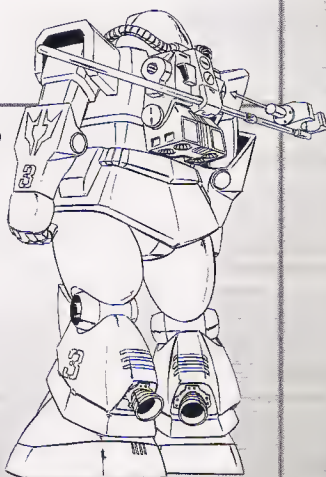
ジオン  
公国軍

全高：18.6m  
 本体重量：60.8t  
 ジェネレータ出力：不明  
 主スラスター推力：不明  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

FRONT VIEW



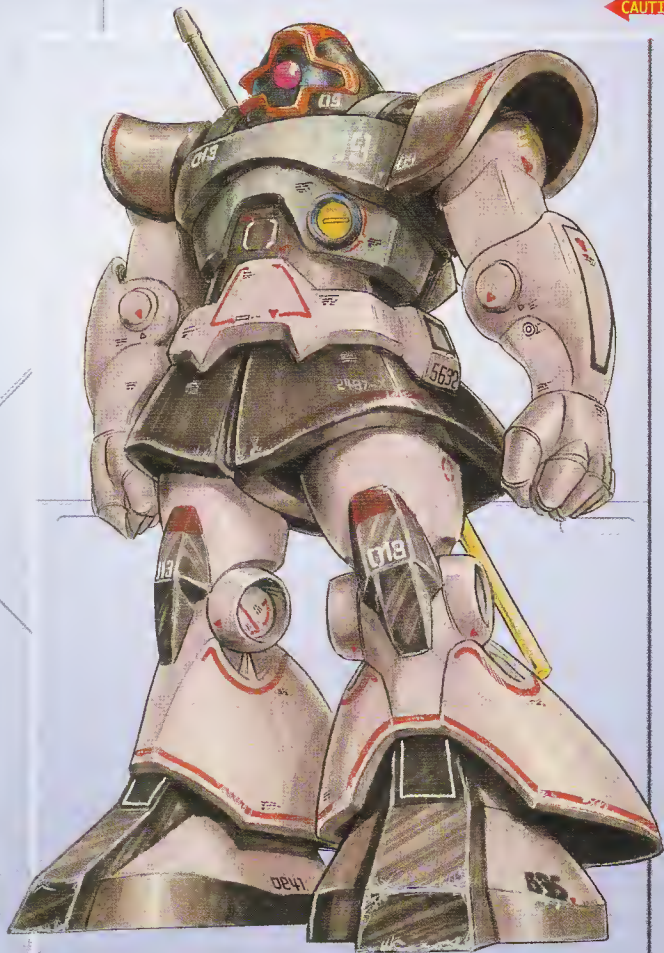
REAR VIEW



## 機体解説

MS-07の実戦化により、ジオン軍の地球上での作戦能力はわずかながらも向上の兆しを見せていた。しかし最大の難題であるMSの移動力向上問題の根本的解決には至っておらず、車や各社の技術者の苦闘はなおも続いていく。この問題を突破したのは、07C-5設計の経験を持つツィマッド社だった。彼らはC-5で培った脚部推進器に関する技術と理論を発展させ、ホバーとロケットの併用による移動方法を見事に完成させたのである。基礎技術に関する問題点をクリアした同社の開発班は、驚異的な速度で設計を終了し、実機の製作にうつった。完成した2機の試作機は直ちに地球に移送され各種試験に使用、数週間後には採用が決定されたという。





# DOM

[ MS-09 ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

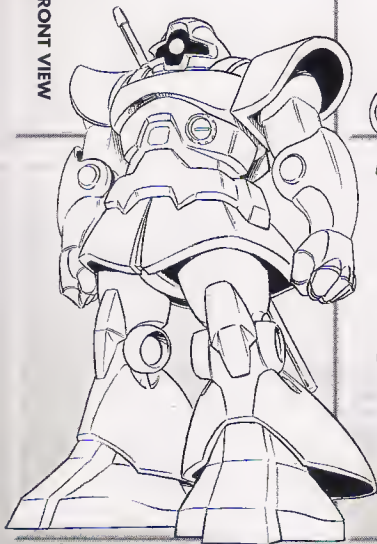




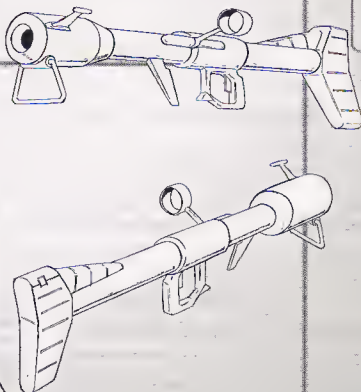
ジオン  
公国軍

全高: 18.6m  
 本体重量: 62.6t  
 ジェネレータ出力: 1269kw  
 主スラスター推力: 58200kg  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)  
 パイロット: ガイア他

FRONT VIEW



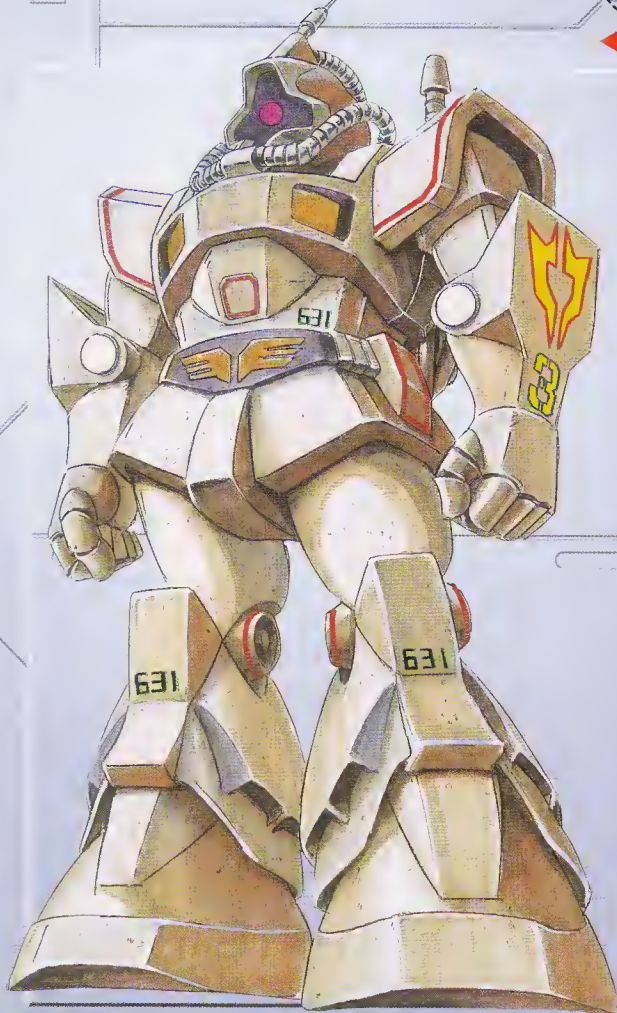
WEAPON



## 機体解説

本機は07型に次いで実戦投入された陸戦用MSである。脚部にホバークラフト装置が内蔵されており、当時のMSとしては非常に高い移動力を備えていた。装備としてはジャイアント・バズと呼ばれる大型ロケット弾発射筒やヒートサーベル、敵の光学機器を幻惑する拡散ビーム照射器などがある。本機は限定された作戦域での運用を前提とした局地戦機として設計されたが、性能の高さからグフに替わる主力として扱われることが多かったという。カラーリングはあの「黒い三連星」にちなんだものだという説があるが実際には以前から配色は決定されており、事情を知らない当時のメディアによる憶測がいつのまにか定説になったと語る研究者も少なくない。

初出: 『機動戦士ガンダム』



# TROPICAL TEST MODEL

[ YMS-09D  
DOM ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## ドム・トロピカルテストタイプ

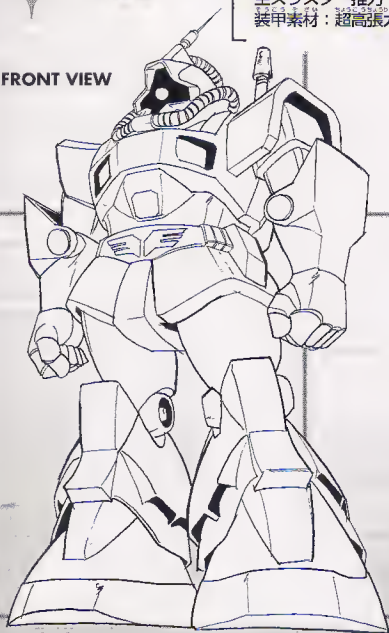
105



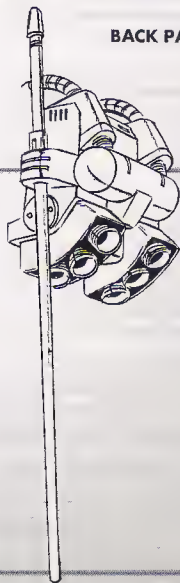
ジオン  
公国軍

全高：18.5m  
 本体重量：65.1t  
 ジェネレータ出力：不明  
 主スラスター推力：不明  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）

FRONT VIEW

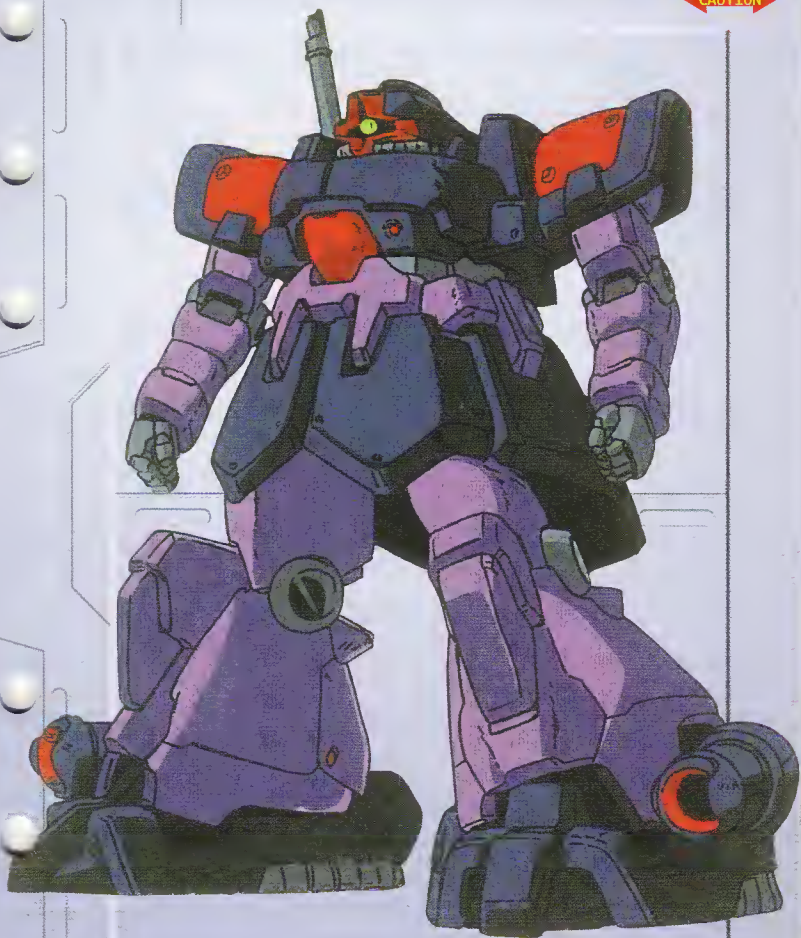


BACK PACK



## 機体解説

実戦に投入されたドムは充分な戦果を挙げたが、高温下での戦闘では機械トラブルが続発し、その性能が存分に発揮されたとは言い難かった。現地部隊からの改善要求も数多く提出され、二つの改修計画が始まった。本機はその一つである、機体を全面改修する計画に基づき建造された。しかし計画は地球方面軍内部で立案・処理されていたため、軍部の正式な承認は得ていない。D型というのも戦後にメディアが与えた俗称である。増加試作機はカリフォルニア工廠である程度生産され、実戦にも参加したと記録されている。機体はカラカル部隊にも配属となり、中でもロイ・グリンウッド少佐機「サンダーキャット」はニュースによって有名となった。



# TROPEN

[MS-09F/TROP  
DOM]



PRINCIPALITY OF  
ZEON



## ドム・トローペン

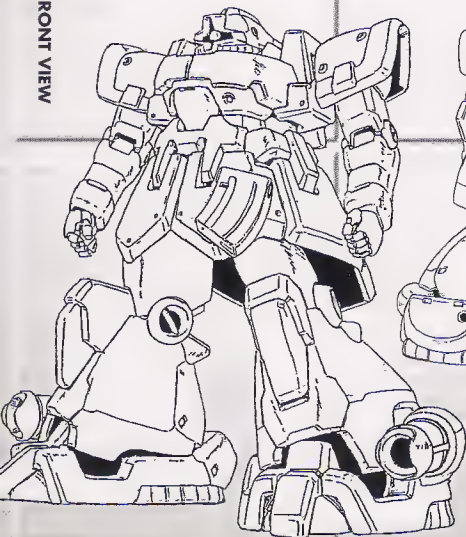
106



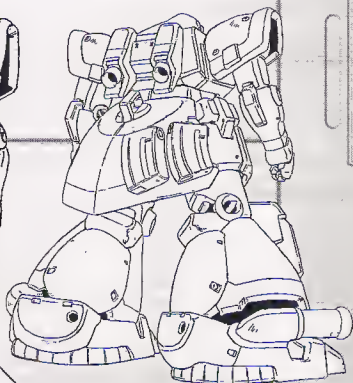
ジオン  
こうくぐん  
公国軍

全高：18.5m  
 本体重量：44.8t  
 ジェネレータ出力：1199kw  
 主スラスター推力：47200kg  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）  
 パイロット：アダムスキー他

FRONT VIEW

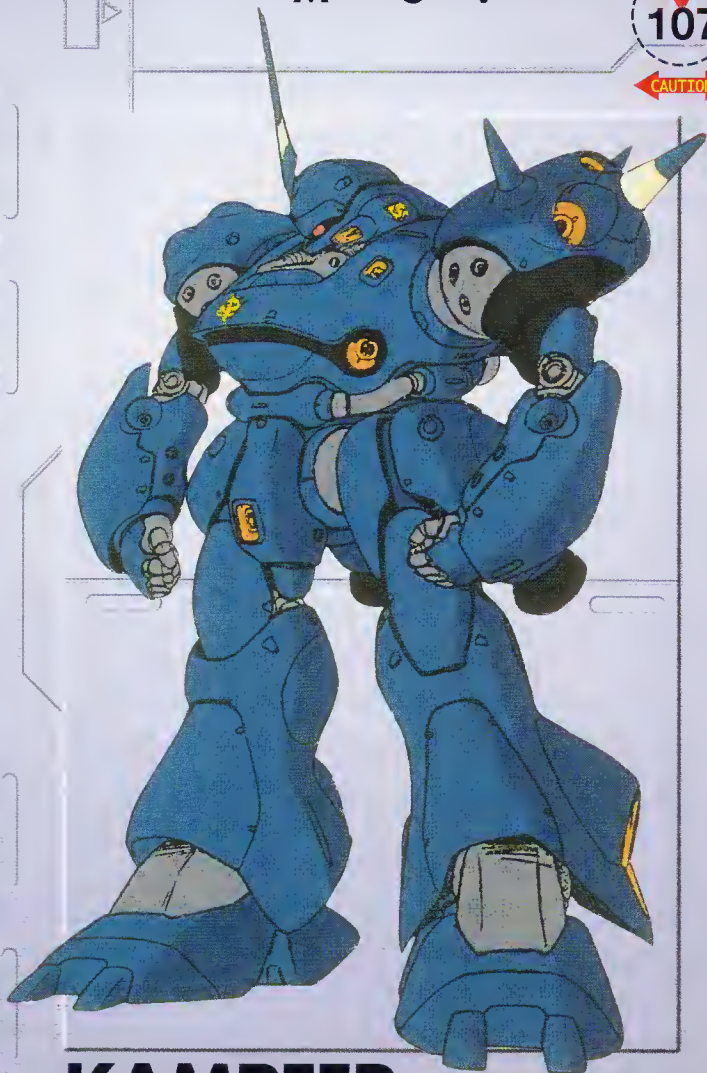


REAR VIEW



## 機体解説

本機は大戦末期の混乱状態の中で生産されたため、その詳細について知ることは非常に困難である。原型機であるF型についても同様で、いかなる機体がトローペンと呼称されていたかは正確には断定できない。確かに戦後の一時期、ザビ家に協力した事実を葬るために、史料として非常に重要な価値を持つ様々な書類を消し去る者が多かった。さらに混乱に拍車をかけたのが、戦後大量に製作された映画やドキュメントである。これらには十分な調査を行ったものは皆無であり、根拠の無い俗説やとんでもない誤りが、事実のように描かれていた。多くの人が「質はジオンが勝っていた。連邦は量だけだ」というが、果たしてそれは真実なのだろうか？



# KÄMPFER

MS-18E



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## ケンプファー

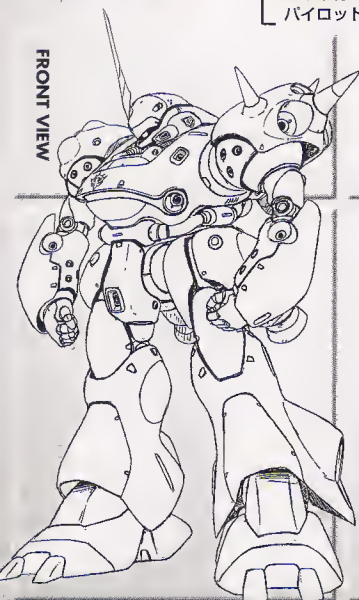
107



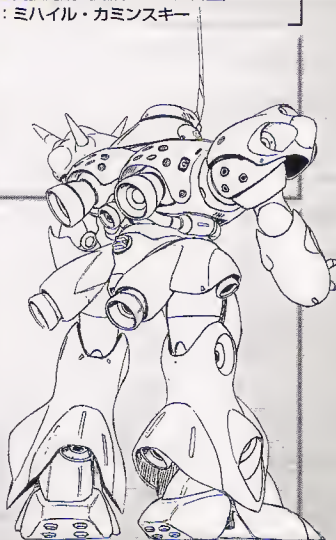
ジオン  
公国軍

全高：17.7m  
 本体重量：43.5t  
 ジェネレータ出力：1550kw  
 主スラスター推力：159000kg  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）  
 パイロット：ミハイル・カミンスキー

FRONT VIEW



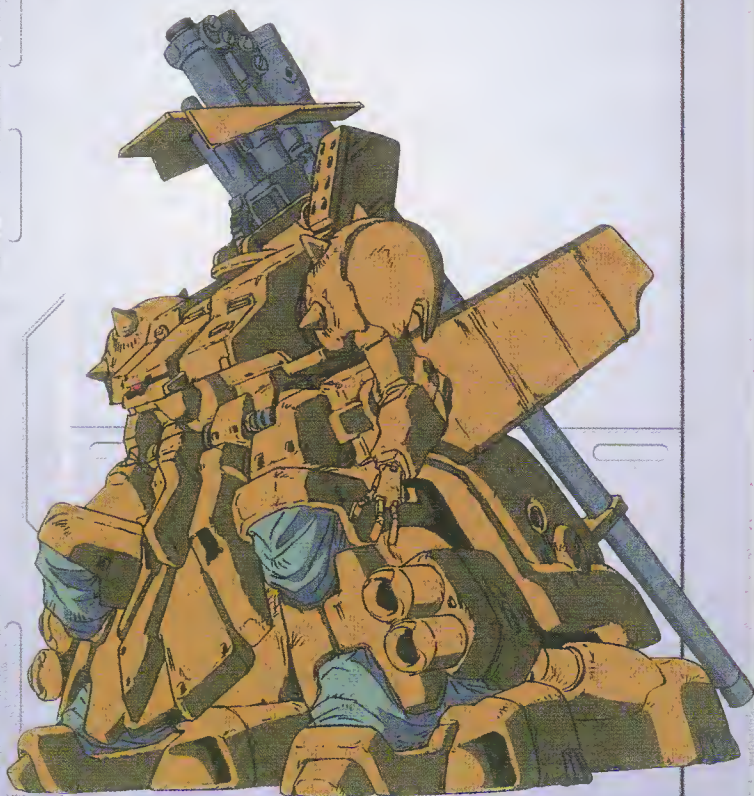
REAR VIEW



## 機体解説

MSは運動戦においてこそ、その真価を発揮する。膠着した陣地戦では、いかにMSといえども戦車砲などの絶好の的になってしまうのがオチだ。事実ジオン敗戦の起点となったオデッサ戦では、数多くのMSが陣地防衛命令によって動きを拘束され、連邦軍の空襲や戦車部隊による猛攻で無為に撃破されてしまったのである。ジオン軍将校はMSの特性をよく理解しており、彼らの要望が強襲用MSを生み出したのだ。本機は徹底した高速化と軽量化に努め、09型以上の運動性能を獲得することに成功した。ただ軍側の記録が散逸しているため、完成した試作機の具体的な機数などについての詳細を知することは現在では非常に困難である。





**XAMEL**

**YMS-16M**

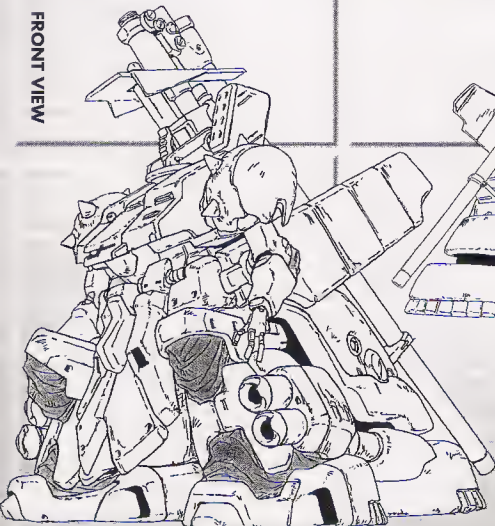
**PRINCIPALITY OF  
ZEON**



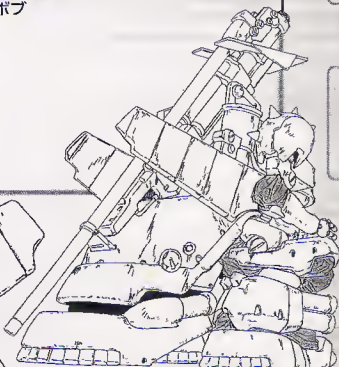
ジオン  
公国軍

全高：27.0m  
 本体重量：75.0t  
 ジェネレータ出力：1080kw  
 主スラスター推力：61800kg  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）  
 パイロット：ポブ

FRONT VIEW

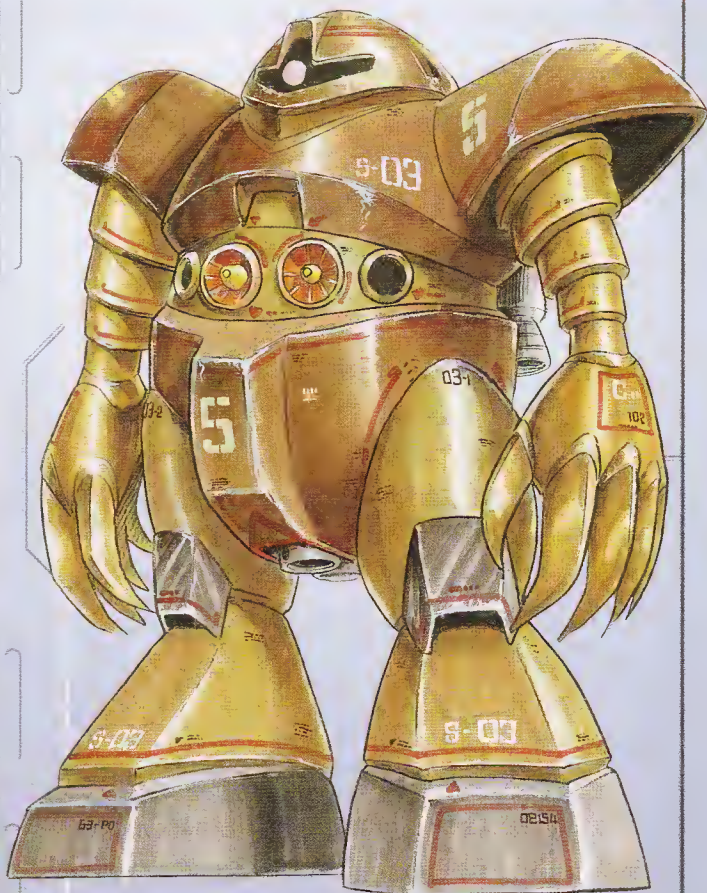


REAR VIEW



## 機体解説

680ミリという、驚異的な大口徑砲を主武装として搭載したこの機体は、MSではなく自走式野砲と呼んだ方が正しく兵器としての姿を表しているといえるだろう。このザメルは強固な陣地を破碎したり、進撃してくる敵の足を止めることを第一義として開発されており、運動戦には対応していなかった。ジオン軍が圧倒的な兵力差を持つ連邦軍に勝利するには、作戦的にも戦術的にも運動戦に持ち込まなくてはならない。だからこそ彼らは、MSの移動能力を高めていったのだ。これに反する運用思想を背景に持つザメルは、まさにジオン軍が戦争に敗けている状況を示していたといっても過言ではないだろう。本機は後にGPO2A強奪作戦に参加する。



**GOGG**

[ **MSM-03** ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON



## ゴッグ

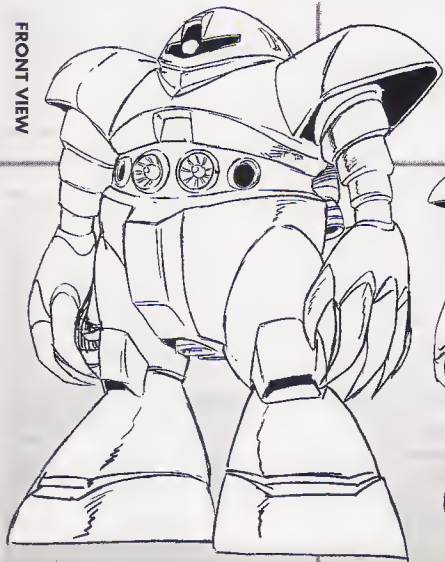
109



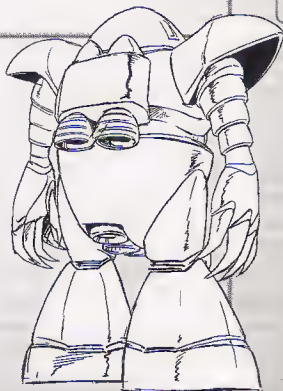
ジオン  
こうこくぐん  
公国軍

全高: 18.3m 本体重量: 82.4t  
 ジェネレータ出力: 1740kw  
 主スラスター推力: 121000kg  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)  
 チタン・セラミック複合材  
 パイロット: コーカ・ラサ他

FRONT VIEW



REAR VIEW



## 機体解説

本機はジオン軍初の、実戦投入された水陸両用MSである。MS-06M (後にMSM-01に呼称変更) による各種新機材の試験データを参考にし、開発が行われた。開発班には多くのアースノイド技術者が参加していたという。水中という、捉え方次第では宇宙以上に厳しい環境下で運用される機体の開発には、やはりアースノイドの持つノウハウが不可欠だったのだろう。水中用兵器の開発と要員の養成は、一般に考えられている以上に困難を伴うのである。水陸両用機にしる潜水艦にしる、一朝一夕で建造できるものではないのだ。こうして完成したゴッグは、各地で行われた上陸侵攻作戦において、多大なる戦果をジオンにもたらしたのだった。

MOBILE SUIT VARIATION

110

COLLECTION



**HYGOGG**

MSM-03C



PRINCIPALITY OF  
ZEON

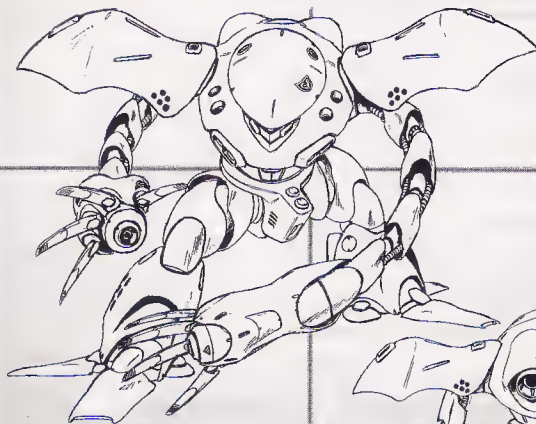
## ハイゴッグ

110

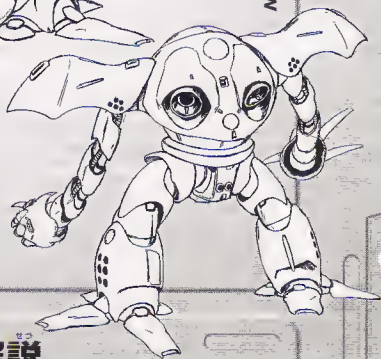


ジオン  
こうこくぐん  
公国軍

全高: 15.4m 本体重量: 54.5t  
 ジェネレータ出力: 2735kw  
 主スラスター推力: 86000kg  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)  
 チタン・セラミック複合材  
 パイロット: アンディ・ストロース他



FRONT VIEW

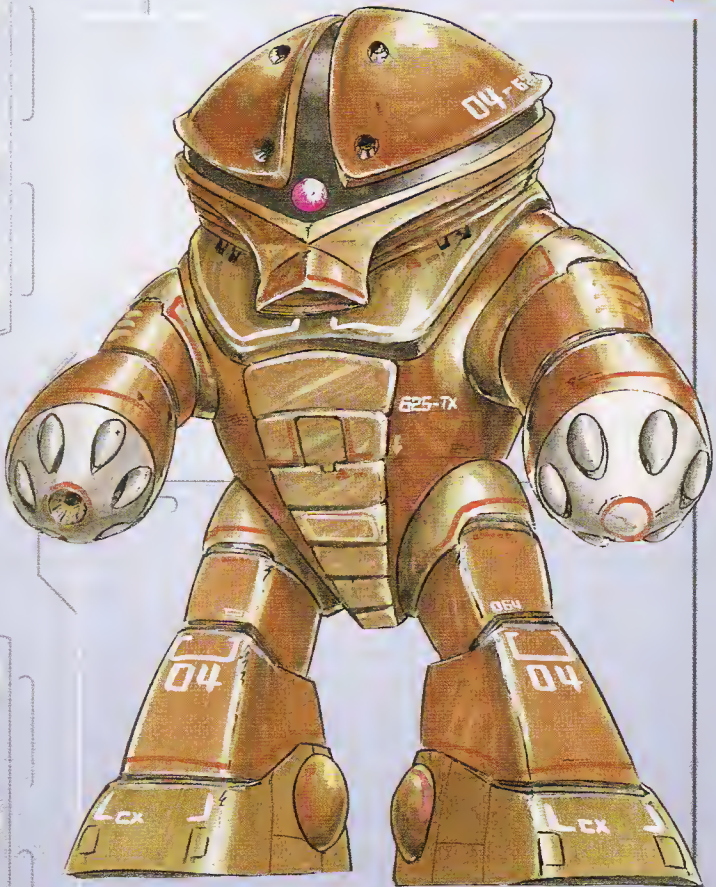


REAR VIEW

## 機体解説

本機は水陸両用戦型MSゴッグの改設計機である。とはいうものの、大戦後期に実施された統合整備計画によって生み出されたため、この機体はゴッグとはまったく異なる印象を与える。実際、機体設計はゼロベースから行われたため、共通するものは運用および設計思想くらいだと言えた。この機体最大の特徴は、旧型機を大きく凌駕する陸上での運動性能にあったと評されている。そして高出力ビームガンを両手に装備し、戦闘力の向上を図った。この兵装は自由自在に動き回る腕部や巨大な格闘戦用クローと相まって、連邦軍の主力MS・RGM-79を圧倒したという。しかし本機の配備は大きく遅れ、限られた戦場でしか運用されなかった。





# AGGUY

MSM-04



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## アッガイ

111

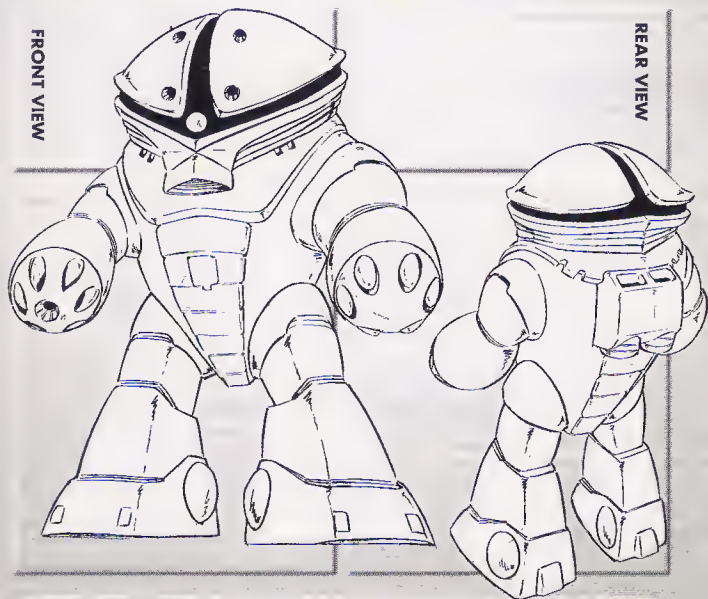


ジオン  
公国軍

全高：19.2m  
 本体重量：91.6t  
 ジェネレータ出力：1870kw  
 主スラスター推力：109600kg  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）  
 パイロット：イワノフ他

FRONT VIEW

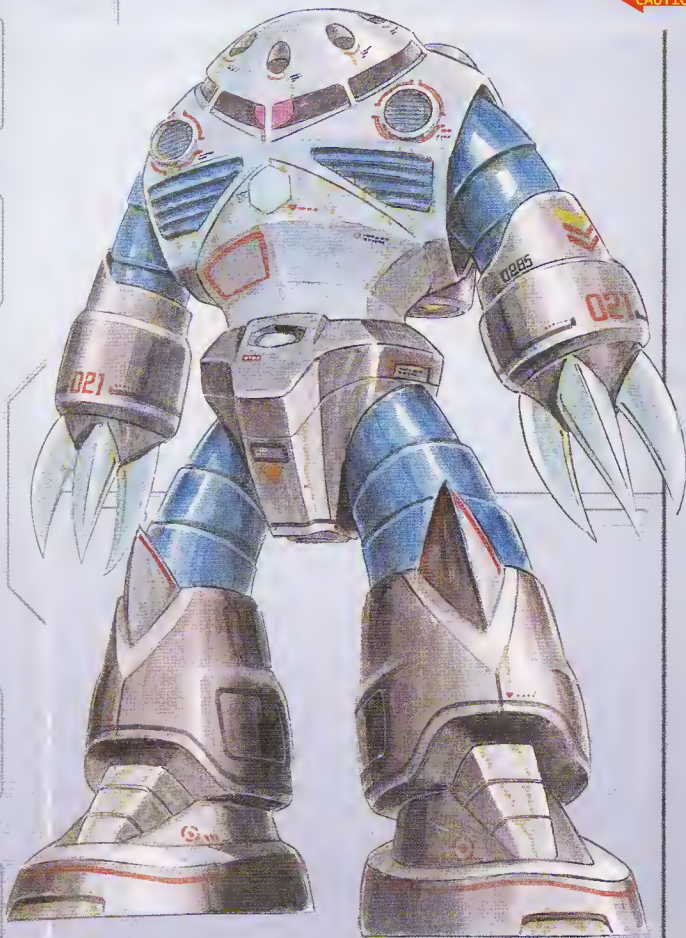
REAR VIEW



## 機体解説

本機に使用されている部品には06型からの流用が多く、オペレーションシステムもMS-06Mのものがベースとなっている。このためズゴックの次に開発が始まったにも拘らず、実戦配備はアッガイの方が早かった。本機は索敵機能を重視した、水中部隊用の偵察MSとしての側面も持っており、参加した作戦は多岐に亘ったという。特に有名なのが、大戦後期に行われた、南米ジャブロー基地への潜入破壊工作だろう。この作戦は「赤い彗星」の名で知られるシャア・アズナブル大佐（当時）が指揮を執っていたという。作戦は結局、連邦軍守備隊の知るところとなり失敗に終わるが、潜入行動には見事に成功しており、アッガイの能力の高さを証明した。

初出：『機動戦士ガンダム』



# Z'GOK

[ MSM-07 ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON



## ズゴック

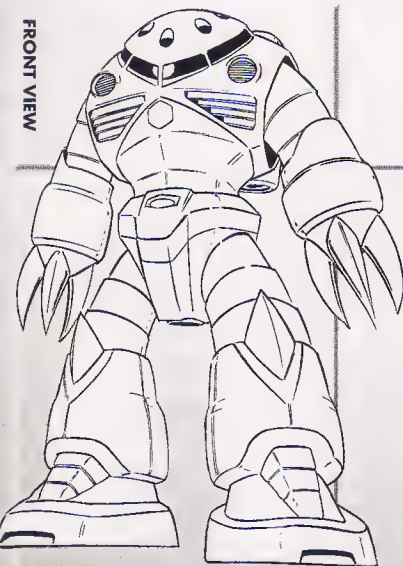
112



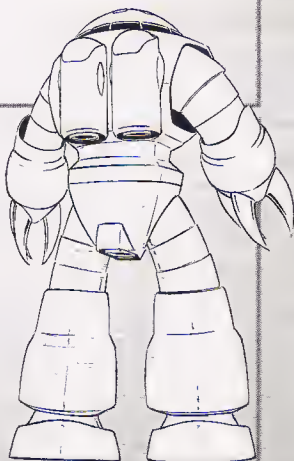
ジオン  
公国軍

全高: 18.4m 本体重量: 65.1t  
 ジェネレータ出力: 2480kw  
 主スラスター推力: 83000kg  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)  
 チタン・セラミック複合材  
 パイロット: カラハ他

FRONT VIEW

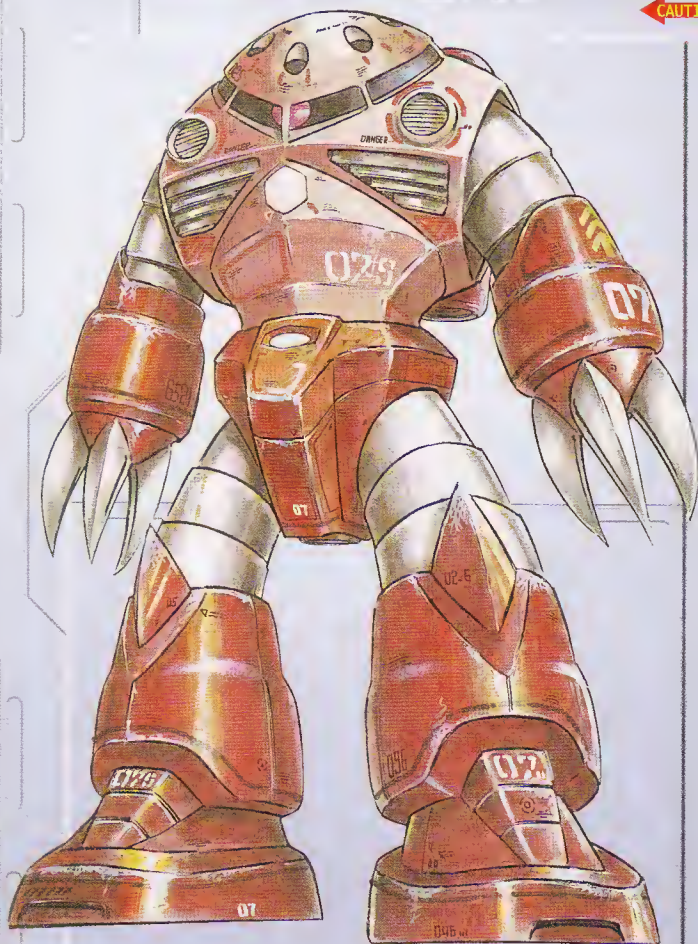


REAR VIEW



## 機体解説

本機の開発はゴックに次いで開始されたが、その実戦データに基づく設計変更を行ったために完成が遅れてしまった。陸上での運動性および格闘性能の向上、火力の充実などが設計変更の内訳で、これが原因で工期が大幅に遅れてしまったのである。だがその甲斐あって、ロールアウトした機体は両用作戦機としては驚異的な性能を示し、パイロットによっては陸戦型ザク以上の戦果を挙げている。さらに本機は、在来機のゴックでは無理だった対空戦闘や、力不足だった水上・航空搜索も充分に行えるよう設計されている。水陸両用作戦型MSは、ここに一定の成果を挙げたと評価できるだろう。本機は水中部隊に、歓びをもって迎え入れられたという。



# TYPE-S

[ MSM-07S  
Z'GOK ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## ズゴック (後期生産型)

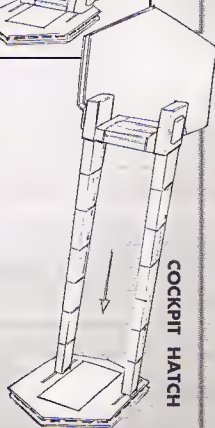
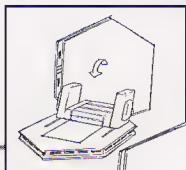
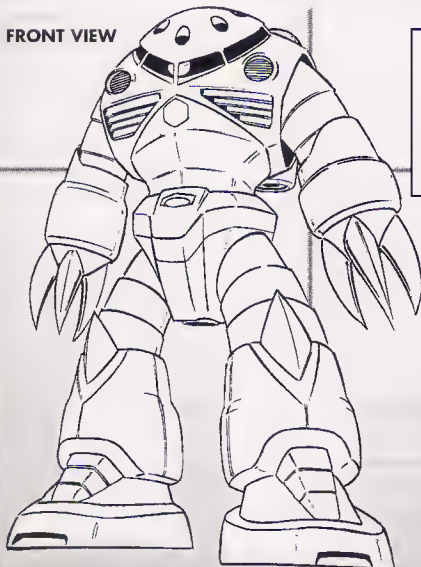
113



ジオン  
公国軍

全高: 18.4m 本体重量: 65.1t  
 ジェネレータ出力: 2480kw  
 主スラスター推力: 83000kg  
 装甲素材: 超高張力鋼 (超硬スチール合金)  
 チタン・セラミック複合材  
 パイロット: シャア・アズナブル他

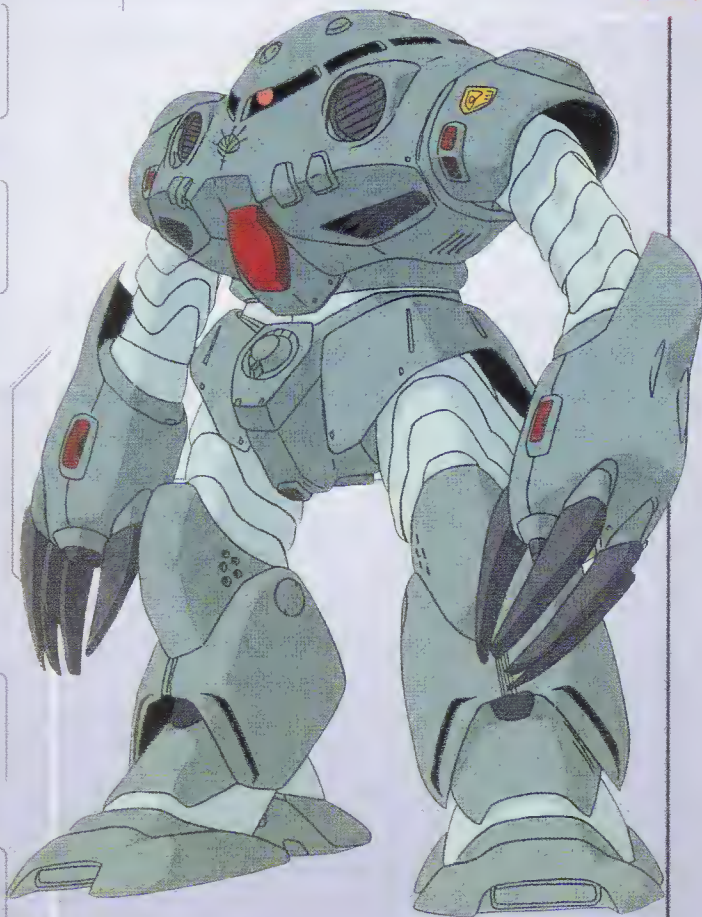
FRONT VIEW



## 機体解説

ズゴックは実戦参加とともに大きな実績を挙げたが、同時にいくつかの問題点を残した。大量生産以前に行われた試験部隊による運用評価は、融合炉と発電機構の効率化とそれに伴う作戦行動時間の延長、装甲材質の変更によるサヴァイバビリティ (生残性) 向上の必要性を示していたのである。改良は即座に行われ、本機はスエズ運河占領作戦を始めとして多くの両用作戦に参加し、多大な戦果を挙げた。だが大戦後期、連邦軍は新型対潜哨戒機を投入、静粛性の低い (核動力艦は大きな音を発生させる性質を持つ) 潜水艦や水陸両用MSの帰還率は跳ね上がっていった。やがて地中海での撤退陽動作戦を最後に、部隊は稼働不能状態に陥るのであった。





# TYPE-E

[ MSM-07E  
Z'GOK ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

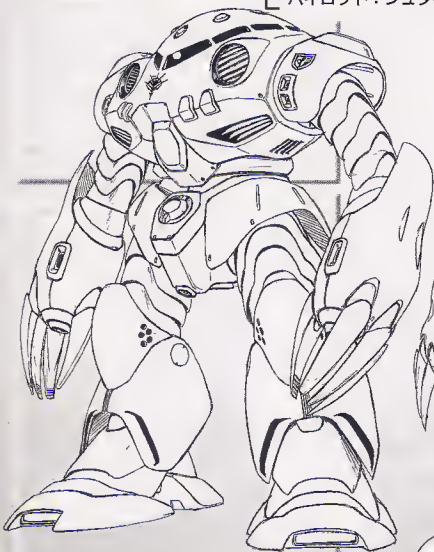
## ズゴックE型

114

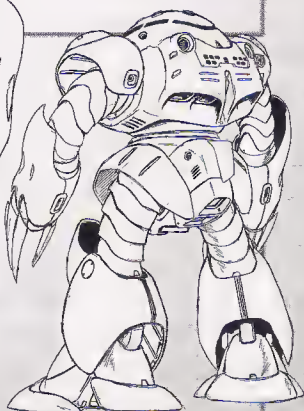


ジオン  
公国軍

全高：18.4m  
 本体重量：65.1t  
 ジェネレータ出力：2570kw  
 主スラスター推力：112000kg  
 装甲素材：チタン・セラミック複合材  
 パイロット：シュタイナー



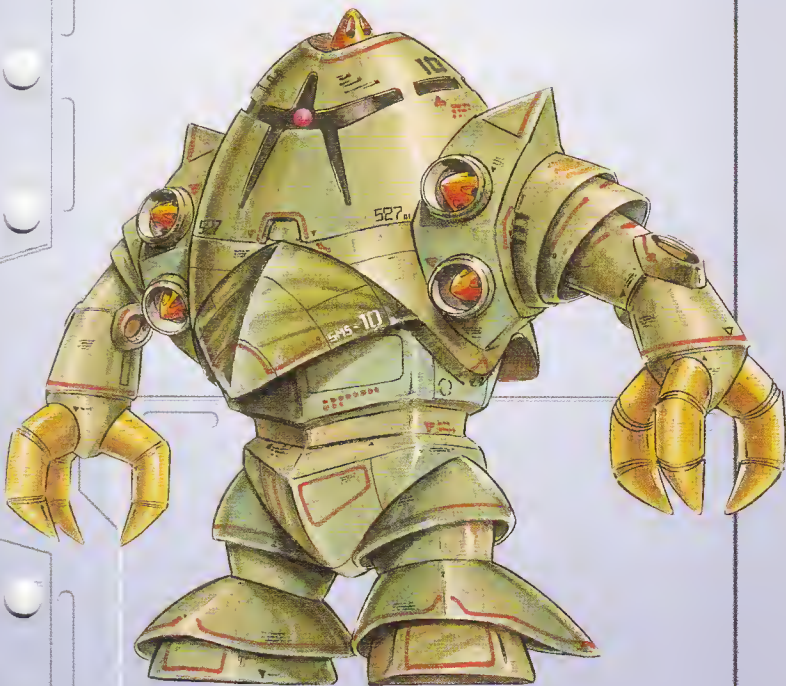
FRONT VIEW



REAR VIEW

## 機体解説

本機は非効率的なジオンのMS生産システムを改めるために実施された、統合整備計画によって開発された。腕部は伸縮収納式に変更され、コクピットはハイゴッグと同じく、計画に沿って規格統一されたものを使用している。各部関節に使用されている駆動部のユニットも、整備性と追従性にいま一つ難があったため、新しいものに変更されている。これにより機体の陸上での運動性がさらに向上され、S型以上の素早い動きが可能となったのである。事実、驚くべきことに06J型との模擬戦では、圧倒的な勝利を得ている。ズゴックのパイロットが教導団教官級の腕だったとしても、これは本機の性能の高さを証明することには変わりはないだろう。



**ZOCK**

**MSM-10**



**PRINCIPALITY OF  
ZEON**



## ゾック

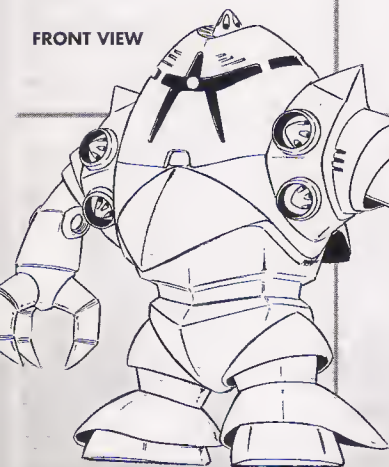
115



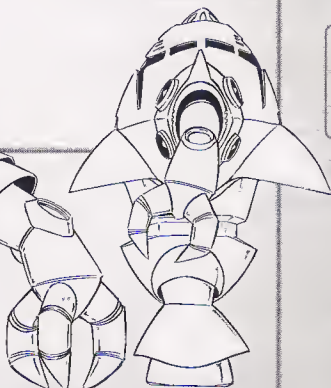
ジオン  
公国軍

全高：23.9m 本体重量：167.6t  
 ジェネレータ出力：3849kw  
 主スラスター推力：253000kg  
 装甲素材：超高張力鋼（超硬スチール合金）  
 チタン・セラミック複合材  
 パイロット：ボラフスキニフ

FRONT VIEW



SIDE VIEW



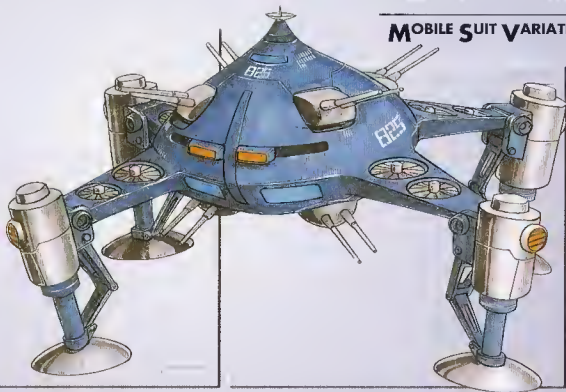
## 機体解説

本機は水陸両用作戦用として開発された。形状は過渡期的ものらしく冒險的だが、その運用思想はしごく真つ当なものだ。両用作戦最大の問題は、兵が直接敵の砲火にさらされるという状況である。戦前においては電子戦が可能だったため、こんなことは考えられなかった。しかしミノフスキー粒子の登場で作戦形態は劇的に変化し、兵を支援する浮き砲台が不可欠な要素になってしまったのである。この要求を満たすべく開発されたのが、ゾックである。本機の主任務は浮き砲台として敵の陣地を攻撃し、上陸作戦を容易ならしめることなのだ。砲台に機動力は必要ない。だからこの機体には充分な移動力がなく、歩行装置も簡易的なものを採用したのである。

MOBILE SUIT VARIATION

116

CANNON



**ADZAM**

MAX-03



PRINCIPALITY OF  
ZEON

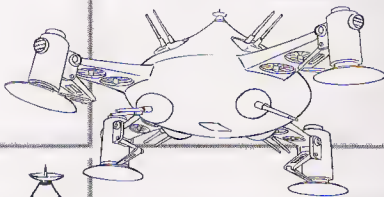
## アッザム

116



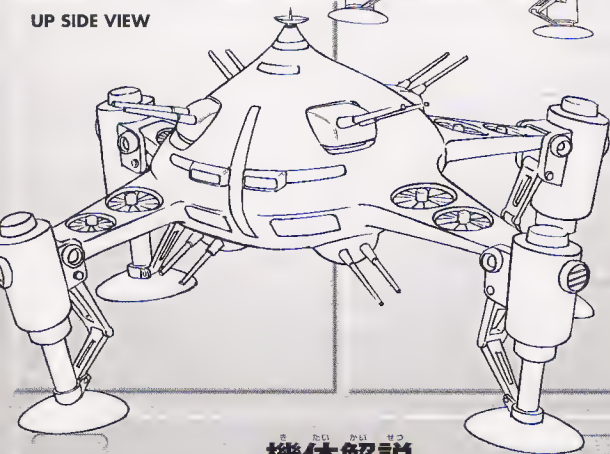
ジオン  
公国軍

全高：24m  
 本体重量：不明  
 ジェネレータ出力：不明  
 主推力：不明  
 装甲素材：不明  
 パイロット：マ・クベ、キシリア・ザビ



BOTTOM VIEW

UP SIDE VIEW



## 機体解説

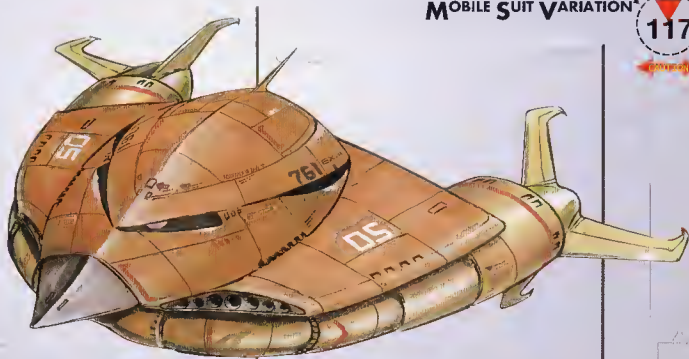
本機は史上初のMAであるが、確固とした戦術・運用思想の裏付けを持たなかったために中途半端な機体になってしまっている。メガ粒子砲を機体の上下に4基ずつ備えているが、ミノフスキークラフト装置を装備したために十分な出力を確保することができず、発射回数には大きな制限が課されていたのである。さらに主兵装・電撃兵器「アッザム・リーダー」も、敵に接近する必要があるが、飛行能力確保のために機体には十分な装甲は施されておらず、反対に敵機に撃破される危険性があった。以上のことからわかるように、本機の扱い方は非常に難しく、あくまでも実験兵器を脱するものではない。なお機体は、2機が試作されたに止まった。



MOBILE SUIT VARIATION

117

CAUTION



**GRUBLO**

[ MAM-07 ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## グラブロ

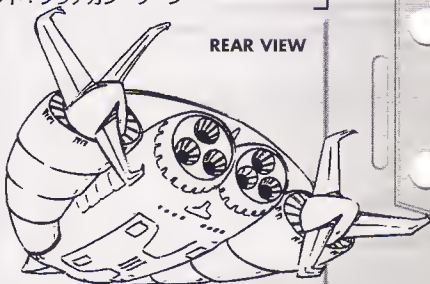
117



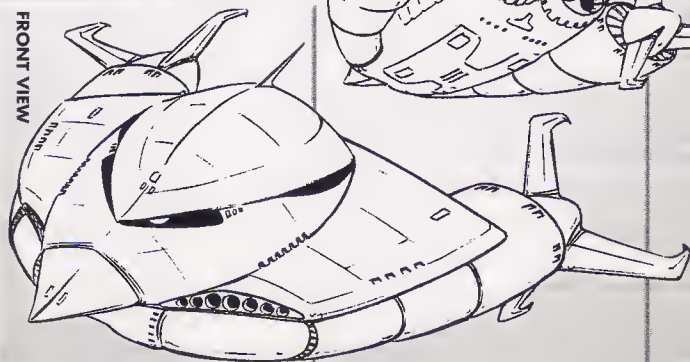
ジオン  
公国軍

全高：40.2m  
 本体重量：793.7t  
 ジェネレータ出力：11000kw  
 主スラスター推力：不明  
 装甲素材：不明  
 パイロット：フラナガン・ブーン

REAR VIEW



FRONT VIEW



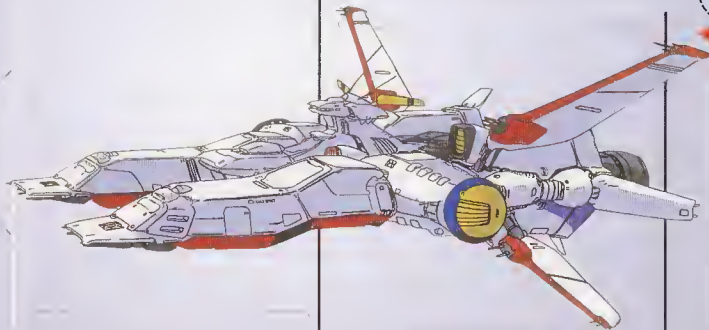
## 機体解説

水中戦用MAの開発は、水陸両用戦MSの開発と並行して進められていた。ジオン軍は、目標船団を護衛する艦艇と対潜哨戒機による強固な防衛網を突破し、攻撃を敢行し得る水中戦兵器を欲していた。北米は陥落し、欧州方面の連邦軍は孤立したものの、南米大陸からの兵站を担う海上交通線は健在であり、欧州の生命線になっていたのだ。ジオンが戦争に勝利するためにはこの生命線を破壊し、連邦欧州軍の体力を削ぎ落とすことが必要だったのである。それがグラブロに与えられた任務の一つなのだ。本機は量産には至らなかったものの、わずかに製作された試作機が大西洋において実戦に参加、連邦海軍艦艇に対して戦果をあげることに成功した。

MOBILE SUIT VARIATION

118

CAUTION



ALBION

PEGASUS CLASS  
LMSD

#1MSD=LANDING  
MOBILE SUIT DECK



EARTH FEDERATION  
FORCE

# アルビオン

(艦籍番号: LMSD-78)

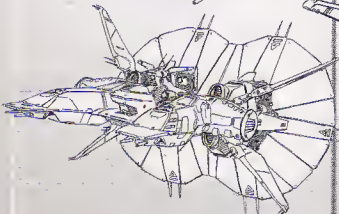
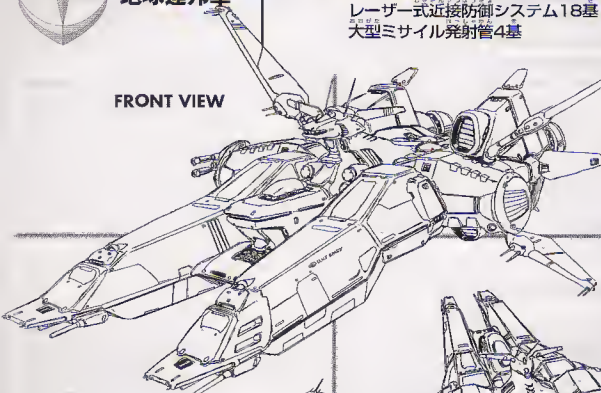
118



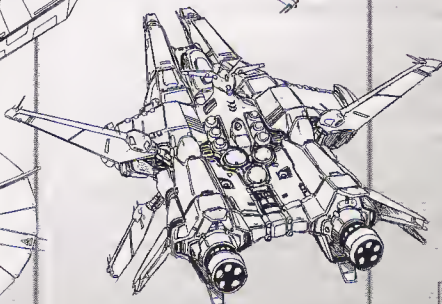
地球連邦軍

主兵装: 連装式偏向型メガ粒子主砲2基  
連装式通常型メガ粒子副砲2基  
レーザー式近接防御システム18基  
大型ミサイル発射管4基

FRONT VIEW



LASER ROCKET SYSTEM



REAR VIEW

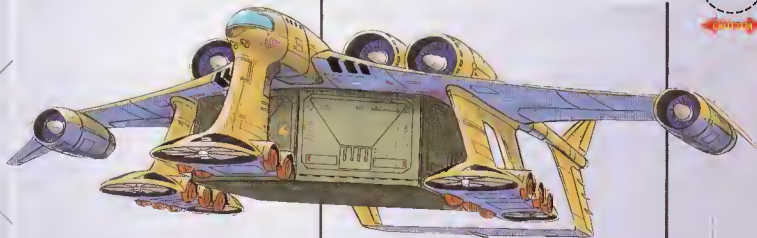
## 艦解説

本来ペガサス級強襲揚陸艦は宇宙空母 (SCV) として計画され、対議会工作のために宇宙戦艦 (SBB) へ一時的に呼称変更を行っていた。その後「ザクショック」の影響を受けて設計の変更が行われ、新たにMS搭載強襲揚陸艦 (LMSD) として建造が開始されたという。この紆余曲折が、本級の艦種表記の混乱原因であることは間違いない。さて本艦アルビオンの建造自体は戦時中に始まったものの、戦争終結と戦後の軍縮ブームの影響を受けて竣工は大幅に遅れてしまった。しかしそのため、本艦には姉妹艦ともいべき6番艦スタリオンとともに多くの新機軸が盛り込まれ、在来と同級艦の能力を大幅に上回る機能を持つに至ったのである。



MOBILE SUIT VARIATION

119



**MEDEA**

[TRANSPORT  
PLANE]



EARTH FEDERATION  
FORCE

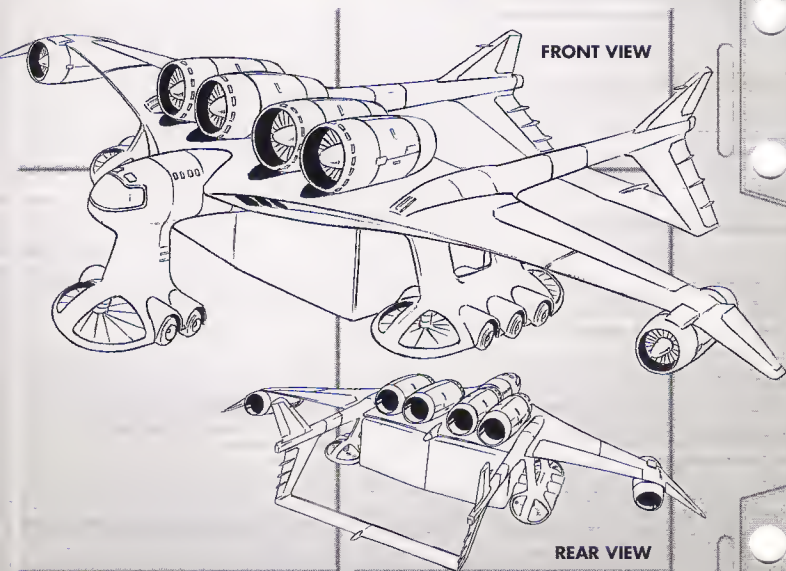
# メディア輸送機

119



ちきゅうれんぽうぐん  
地球連邦軍

ガスタービン式ジェットエンジン  
(主機4基・補助2基) 装備  
垂直離着陸用ローター5基



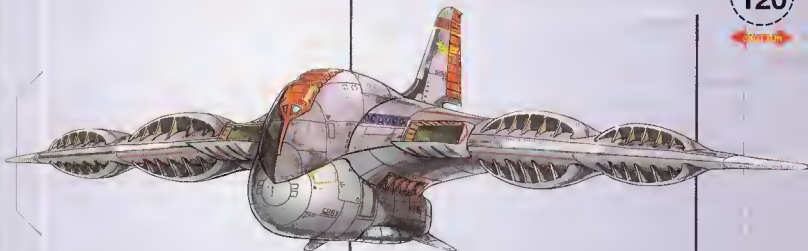
## 機体解説

本機は、地球で屈指の航空機メーカーとして知られるメディア社の製作した、大型輸送機である。戦前・戦中・戦後を通して活躍、多くの派生型の原型にもなり連邦軍将兵たちから最も頼りにされた航空機だと評せられている。機体腹部には着脱可能な大型コンテナを装備しており、さらに大出力エンジン6基と5基のローターを併用することで、巨体に似合わない運動性を確保している。この機体を運用していたのは主に宇宙軍隷下にある輸送コマンドであった。ちなみにこの時代の宇宙軍は旧軍制の残滓として、変則的だが輸送コマンドをその編制に加えていた。これが空軍や陸軍との任務担当領域問題に関する軋轢の原因の一つになっていたという。

MOBILE SUIT VARIATION

120

CAUTION



**GAW**

**FLYING  
CARRIER**



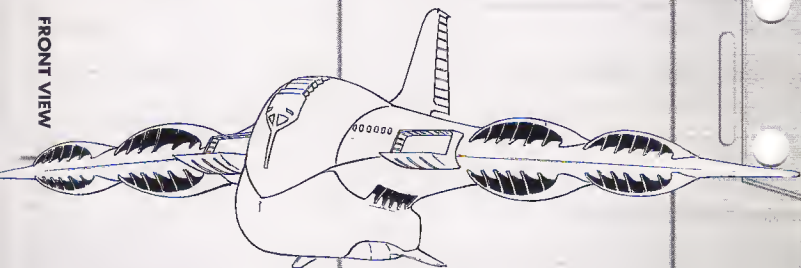
**PRINCIPALITY OF  
ZEON**



ジオン  
公国軍

主兵装：連装式偏向型メガ粒子主砲2基  
実体弾式機銃座多数

FRONT VIEW



REAR VIEW



## 機体解説

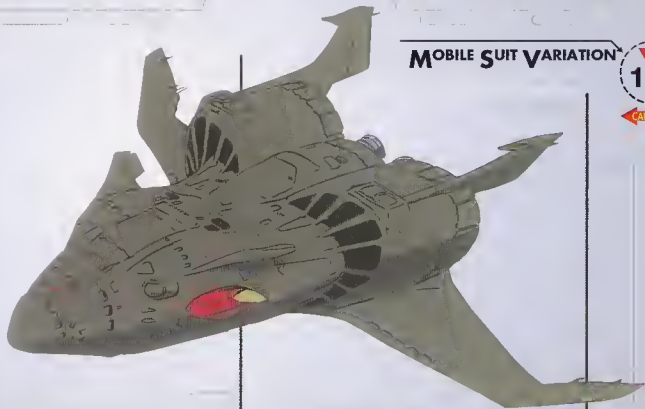
旧世紀において航空作戦は、電子技術の驚異的な発達によってその頂点を極めた。20世紀前半に生まれた制空概念は航空優勢という流動的な要素を含む概念に変化し、制空戦闘機も航空支配戦闘機に進化していったのである。宇宙世紀を迎えてもその様相に変化はなかったが、ミノフスキー粒子の登場が全てを変えた。制空概念が復活し、航空兵力の集中運用思想が作戦と戦術を再び支配したのだ。飛行空母であるガウは、この概念を具現化させた兵器だといえる。必要なら常に高々度空域に留まり、作戦に応じて戦闘攻撃機やMSを発進させたり空爆を行う。ガウとその搭載機により編成された航空打撃戦力は、まさに地球連邦にとって恐怖の的であった。



MOBILE SUIT VARIATION

121

CAUTION



**KERGUELEN**

[ ZANZIBAR CLASS  
MANEUVER CRUISER ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

# ケルゲレン

(艦籍番号：CCM-84)

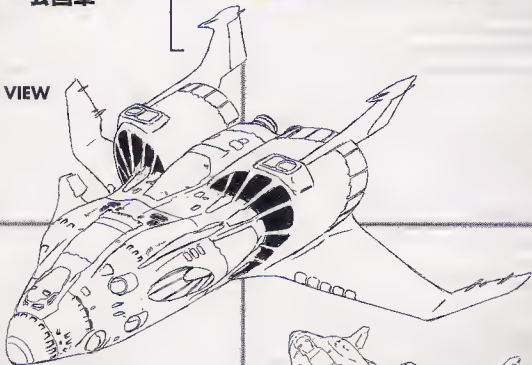
121



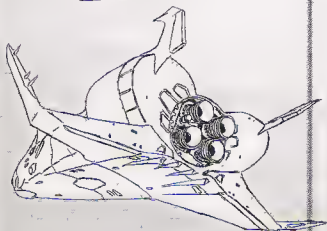
ジオン  
公国軍

主兵装：連装式偏向型メガ粒子砲6基

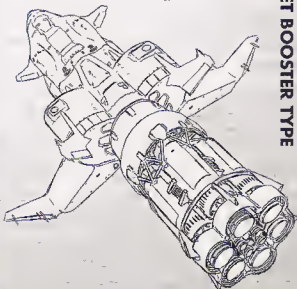
FRONT VIEW



ROCKET BOOSTER TYPE



REAR VIEW



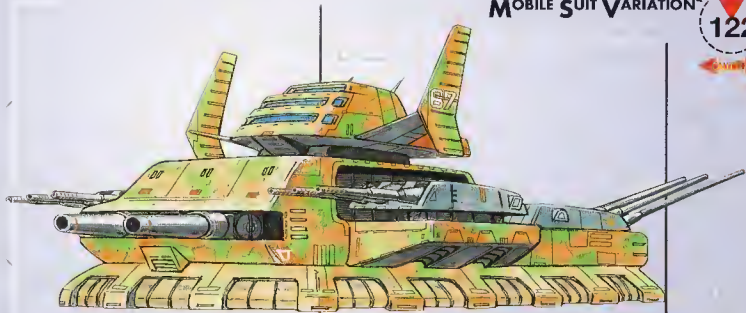
## 艦解説

開戦に先立ちジオン公国軍参謀本部作戦課は、総帥府の戦争方針である「迅速な敵軍の無力化による早期講和達成」を実現すべく、作戦研究を始めた。地球本土侵攻作戦は講和締結に失敗した場合の、いわば保険として策定されたのである。結局、講和に失敗したジオン軍は本土侵攻を実施するのだが、この着上陸作戦で大きな役割を果たしたのがケルゲレンなどの機動巡洋艦であった。HLLV（ヘヴィ・リフト・ランチ・ヴィークル：大重量物輸送往還艇）着床前に上陸地点に侵入、素早くMS部隊を展開して後続部隊の安全を確保したのだ。降下部隊が最も脆弱となる着床時を守ることこそ、本級の本分なのである。

MOBILE SUIT VARIATION

122

EXTRA



**BIG-TRAY**

COMBAT  
CRAFT

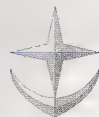


EARTH FEDERATION  
FORCE

## 大型陸戦艇

## ビッグ・トレー

122



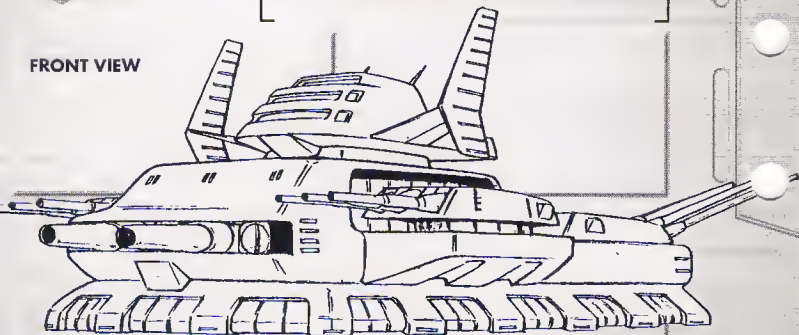
地球連邦軍

主兵装：連装式大型攻城砲

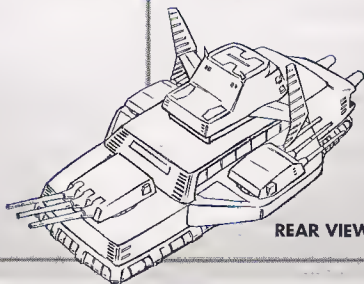
3連装式主砲3基

※ただし本級は個体ごとの装備の違いが多く、まったく異なる武装を持つ艇も存在する。

FRONT VIEW



REAR VIEW



## 艇解説

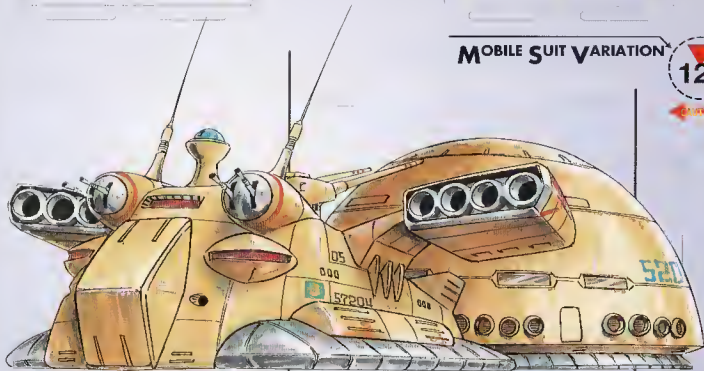
本艇（実質的には艦というべきサイズだが）は地球連邦陸軍の用いる移動司令部として知られている。堅牢な敵陣地などを破碎するために巨大な砲をいくつも搭載しており、非常に特徴的な外観を持つ。ビッグ・トレーは戦前、拠点の構築やその維持が困難である中央アジアやアフリカの砂漠といった広大な土地に長期間、部隊を駐留させるために開発された。それゆえ艇内には戦略原潜なみの機能が備えられており、随伴する各種車輛のための修理設備も有していたのだ。陸戦艇の車長（奇妙な話だが、艇長ではなく、運用する陸軍の慣例から車長と呼ばれた）には大佐が任じられ、旅団本部（旅団管理大隊）として用いられることが多かったという。



MOBILE SUIT VARIATION

123

CAUTION



**GALLOP**

**COMBAT  
CRAFT**



**PRINCIPALITY OF  
ZEON**

# ギャロップ

123

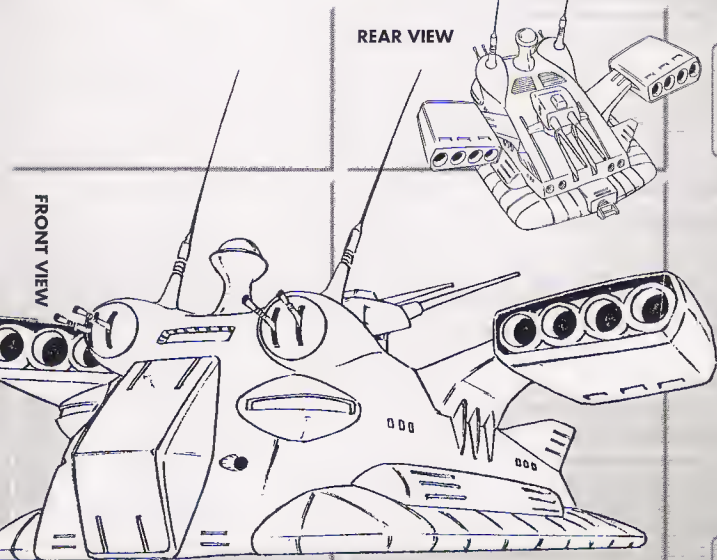


ジオン  
こうこくぐん  
公国軍

主兵装：連装式機関砲2基  
連装式実体弾砲1基

REAR VIEW

FRONT VIEW

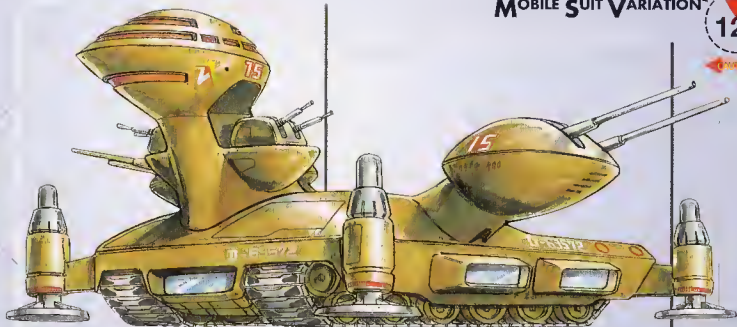


## 艇解説

本艇は予想される本土侵攻作戦に備えてジオン軍が開発した、中隊規模で用いる陸戦艇である。運用思想は、連邦軍の採用したビッグ・トレーと全く同様のものであり、特筆すべきことはない。ただジオン軍らしくハードよりもソフトによる打撃力を重視しており、あくまでもMSや戦車などを用いた運動戦の支援を行うことが、本艇の任務とされている。ジオン軍は「機動戦を戦の主体とし、霧兵をもって大兵にあたらん」とをバトルドクトリンとしており、ギャロップは陸戦においてそれを遂行するために生まれた兵器だと評価できるだろう。大戦中は主にアフリカ大陸に配備され、数多くの戦場で連邦軍との激戦を戦い抜いたという。

MOBILE SUIT VARIATION

124



**DOBDAY**

[ **COMMAND  
POST** ]



**PRINCIPALITY OF  
ZEON**

# 大型陸戦艇 ダブデ

MOBILE SUIT VARIATION

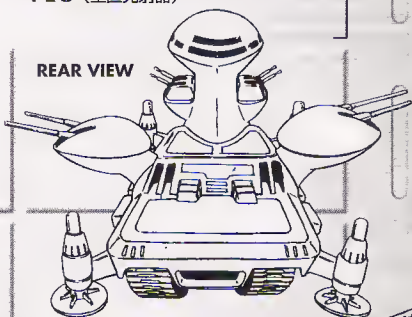
124



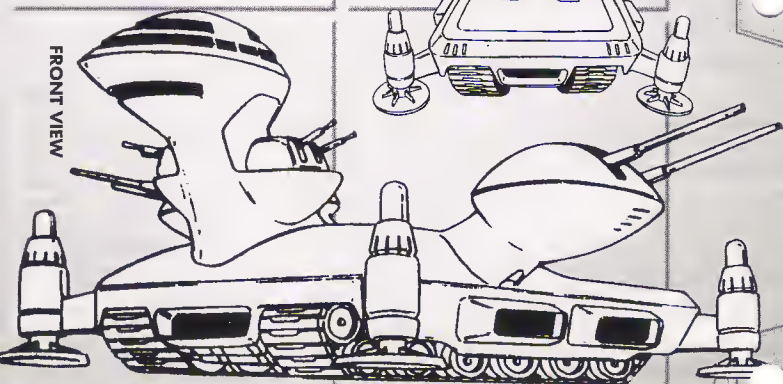
ジオン  
公国軍

主兵装：連装式実体弾砲2基  
連装式機関砲2基  
VLS（垂直発射器）

REAR VIEW



FRONT VIEW



## 艇解説

ダブデは艇といいつつも、移動装置にはクローラーを採用した変わり種である。実はこの兵器は純粋なジオン製ではなく、ロシアの兵器開発局が製造中だったコマンドポストのシャーシなどを流用した混血兵器だったのだ。ジオン軍は本土侵攻作戦によって、東欧以東をその勢力下に収めた。その結果、占領した国家で開発中だった兵器を利用することが可能となり、ジオン本国の生産体制と軍の戦力負担はいくらか軽減されたといわれている。光学兵装よりも実体弾兵装を重視した設計が、ダブデ最大の特徴である。ロシアは古来、大砲の製造に長けており、本艇搭載の大型砲の製作も彼らロシア人技術者の協力があってこそ可能だったといわれている。

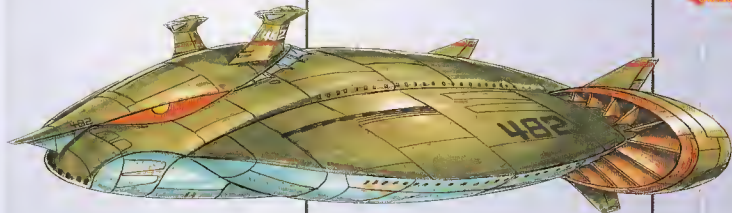
初出：『機動戦士ガンダム』



MOBILE SUIT VARIATION

125

CAUTION



**SUBMARINE**

[MAD-ANGLER  
CALSS]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## マッド・アングラー級潜水艦

125



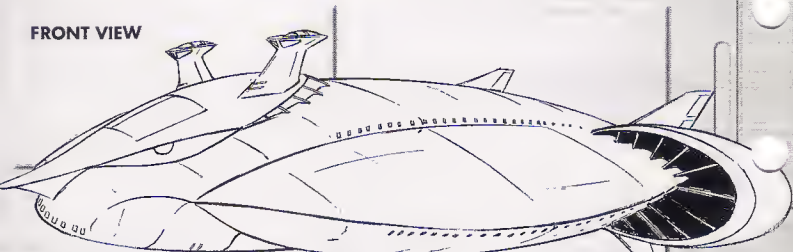
ジオン  
公国軍

主兵装：対空ミサイル用VLS（垂直発射器）

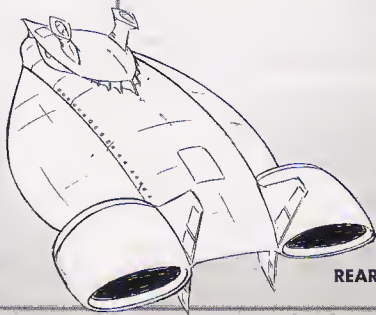
魚雷発射管4基

※艦によってはVLSを撤去し、大型機動兵器の格納庫に改造していた。

FRONT VIEW



REAR VIEW

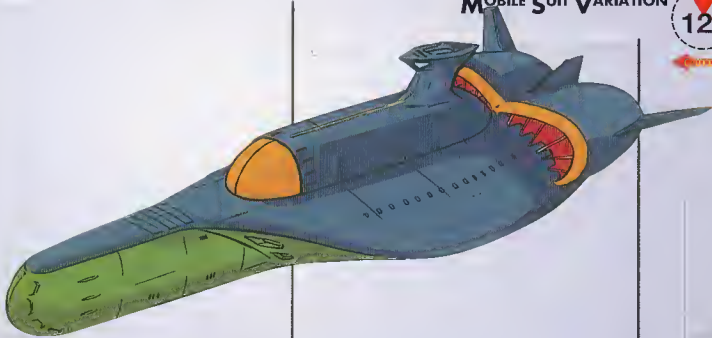


## 艦解説

マッド・アングラー級潜水艦は本来、地球連邦海軍の戦車などの揚陸機能を持つ大型潜水艦として運用されていた。ジオン軍は地球侵攻後にこれらの艦を接収、MS搭載潜水艦として改修を施したのである。無論連邦海軍は本級の放棄時、自沈させて敵の手に渡ることを阻止しようとしていた。しかし深度の浅い湾内での自沈だったため、サルベージによる再利用をジオンに許すという失敗を犯してしまう。ジオン軍のものとなった本級はその後、大西洋や北海を中心として作戦海域で猛威を振るった。連邦軍対潜部隊はMSを使ったジオンの新戦術に翻弄されてしまい、経験則の蓄積による対抗手段の確立までに被った損害は、決して少なくはなかったという。

MOBILE SUIT VARIATION

126



**SUBMARINE**

**U-CON  
CLASS**



**PRINCIPALITY OF  
ZEON**

## ユーコン級潜水艦

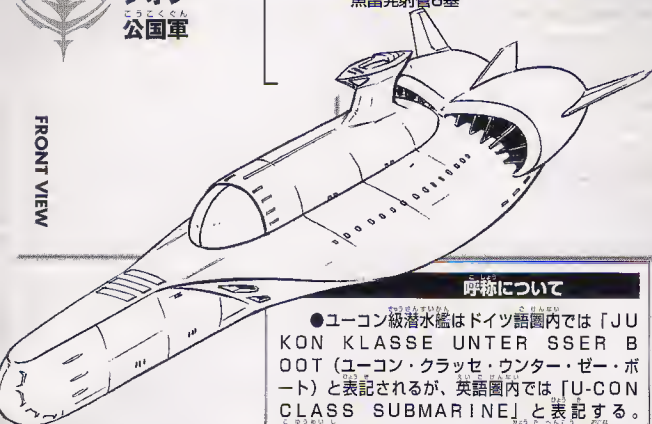
126



ジオン  
公国軍

主兵装：対空ミサイル用VLS（垂直発射器）  
魚雷発射管6基

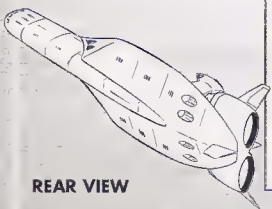
FRONT VIEW



## 呼称について

●ユーコン級潜水艦はドイツ語圏内では「JUKON KLASSE UNTERSSEROBOT」（ユーコン・クラッセ・ウンター・ゼー・ボート）と表記されるが、英語圏内では「U-CON CLASS SUBMARINE」と表記する。固有名詞である「JUKON」の表記変更が行われるのは非常に珍しい。本来ならば英語圏内でも同じ表記にし、「ジュコン」と発音することになったはずだ。実は欧州と北米間で行われた名称の申し送りは電話連絡のみで、北米側係官がスペルの確認をせず発音から、表記が「U-CON」だと判断してしまったのが真相らしい。軍もお役所の一つ、一度受理したことはほとんど変更不可能で、本艦には二通りの表記が与えられたのである。

REAR VIEW



## 機体解説

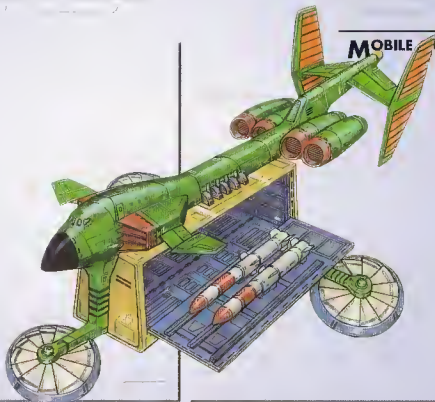
本級はマッド・アングラー級と同じく、元は連邦海軍の開発した潜水艦であり、同様の経緯でジオン軍の手中に落ちたのであった。海軍という軍種の維持・運用には経験と技術の蓄積が必要で、一朝一夕に習得できるものではない。ジオン軍はこの問題を、宇宙出身者の司令官および艦長の副官に、海軍勤務歴のある地球出身者を当てることによってクリアしようと考えた。彼らの多くはジオンの占領下に置かれた地域の出身であったり、ジオンに共鳴して連邦軍から亡命した海軍軍人だったという。この策は成功し、本級はそれら優秀な軍人に用いられて連邦の艦船を数多く沈めていった。現在、終戦までに就役したユーコン級は24隻との記録が残っている。



MOBILE SUIT VARIATION

127

CAUTION



**GUNPERRY**

[TRANSPORT  
PLANE]



EARTH FEDERATION  
FORCE

## ガンペリー輸送機

127



地球連邦軍

ガスタービン式ジェットエンジン4基装備  
 垂直離着陸用ローター3基  
 主武装：対艦ミサイル4基搭載

FRONT VIEW

REAR VIEW

## 機体解説

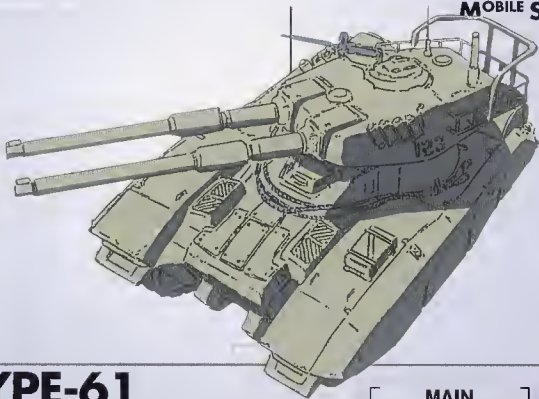
MSは陸戦兵器としては非常に重く、既存の輸送機構での輸送は不可能だと、RX計画の初期から予想されていた。メディアならば分解せずに搭載可能だったが、兵站任務で手一杯であり、MS部隊に回せる余剰分などはないというのが実情だったという。これではMSの展開能力は戦車以下でしかなく、運動戦の前提である「戦場への迅速な展開」などは看板倒れに終わってしまう。そこでV作戦の一環として開発されたのが、戦術レベルでのMSの輸送と回収を主任務とした本機なのである。本機は中割れ式のカーゴを採用することで、実戦装備のMSを即座に目的地に降下させる能力を有した。しかし実戦参加した機体は非常に少ない。

初出：『機動戦士ガンダム』

MOBILE SUIT VARIATION

128

CUTION



**TYPE-61**

[ MAIN  
BATTLE TANK ]



EARTH FEDERATION  
FORCE

# 61式主力戦車

128



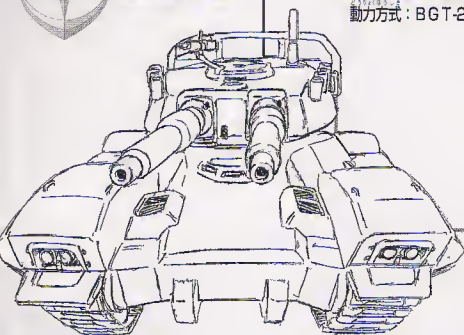
地球連邦軍

主兵装：連装式滑腔砲

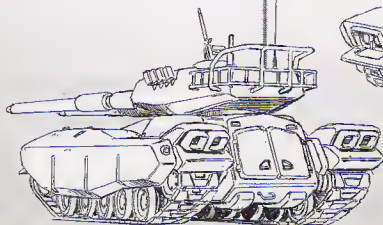
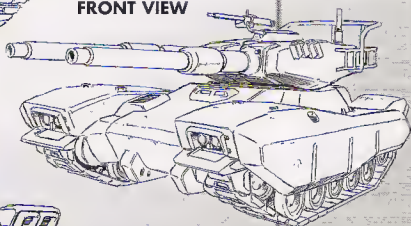
スモークディスチャージャー8基

車載型重機関銃1丁

動力方式：BGT-2500ガスタービン式エンジン



FRONT VIEW



REAR VIEW

## 車輜解説

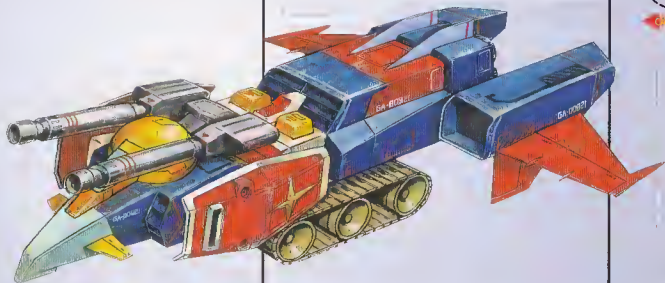
61式戦車はRGM-79採用以前、陸軍部隊の中核を成した装甲戦闘車輜である。開戦時点においてすでに採用から18年を経ていたが、兵器開発のサイクルから考えれば、別段に旧式というわけではない。ベトロニクスは旧世紀の時点で進化の頂点を極めており、搭載された火器管制システムは時速60キロ状態で走行間射撃を可能とした。演習における命中精度は非常に高く、陸軍がMSに対して充分に対抗出来ると考えても無理からぬことだったのである。だがミノフスキー粒子による車輜間連絡の途絶や、MS特有の3次元機動というまさに想像を絶した戦術環境に直面した戦車部隊は、有効な反撃手段を講ずることも出来ずに撃破されていった。



MOBILE SUIT VARIATION

129

OPTION



**G-ARMOR**

**FIGHTER  
ATTACKER**



**EARTH FEDERATION  
FORCE**

# Gアーマー

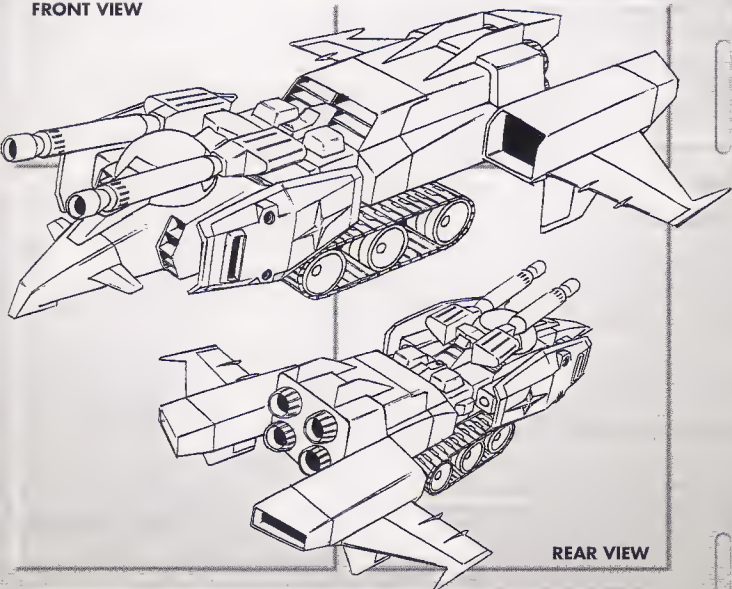
129



ちきゅうれんぽうぐん  
地球連邦軍

主兵装：連装式メガ粒子砲1基  
ミサイル発射管2基  
推進方式：熱核融合ロケット

FRONT VIEW



REAR VIEW

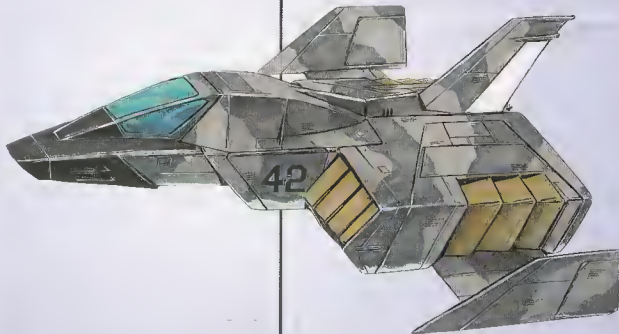
## 機体解説

本機はRX-78用に試作された、可変合体機能を持つ戦闘攻撃機である。内部にRX-78を収納するだけでなく、部品の組み合わせによって様々な戦術環境に適応させようという運用思想を反映した設計が行われている。武装としては、機体上部にエネルギーCAPを用いた連装式メガ粒子砲を持ち、機首には連装ミサイル・ランチャーを備えていた。操縦システムとしては、Gアーマー側がガンナーを兼ねたパイロット役を担い、MS側パイロットはシステムオペレーター役だったという。本機は戦後、連邦宇宙軍とアナハイム社の共同事業であるガンダム開発計画に大きな影響を与えたと噂されたが、目下のところ真相は明らかにされていない。

MOBILE SUIT VARIATION

130

EXTRA



CORE FIGHTER

FF-X7  
FIGHTER



EARTH FEDERATION  
FORCE

# コア・ファイター

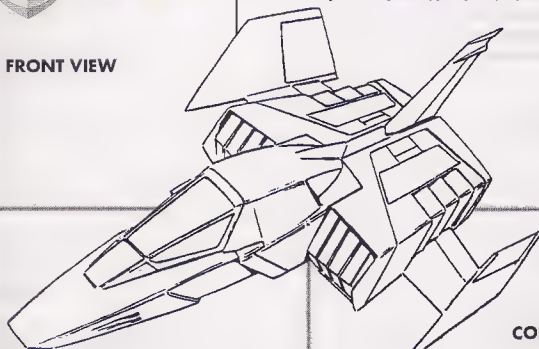
130



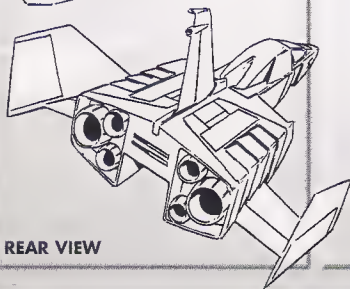
地球連邦軍

主兵装：機関砲4門（機首部）  
ミサイル発射機2基  
（コンフォーマル・ランチャー方式）

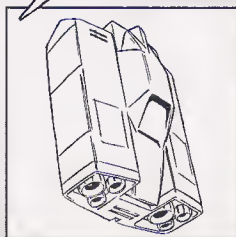
FRONT VIEW



CORE BLOCK



REAR VIEW



## 機体解説

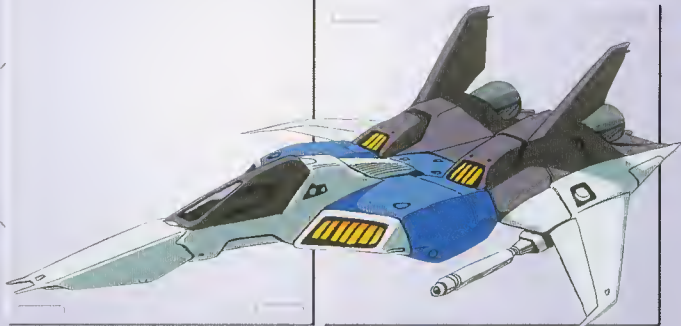
本機はRX計画機<sup>けいかくき</sup>の要諦<sup>ようてい</sup>であるコア・ブロック<sup>こうぶろく</sup>構想<sup>こうきよう</sup>の産物<sup>さんぶつ</sup>として開発<sup>かいはつ</sup>された。その学習コンピュータ<sup>がくしゆコンピユータ</sup>に収められているデータは、最重要機密<sup>じゆうじゆうきみつ</sup>であり、V作戦<sup>エー作戦</sup>の成否<sup>せいひ</sup>を決し得るほどの価値<sup>かち</sup>を持っていた。つまりRX計画<sup>エー計画</sup>とV作戦<sup>エー作戦</sup>の枢要<sup>しゆい</sup>なデータが収まっている機体<sup>きたい</sup>は、決してジオンの手<sup>て</sup>に渡すわけにはいかないのである。ここで重要な<sup>じゆうじゆうな</sup>のが、データの回収<sup>かいしゆ</sup>方法<sup>はうほう</sup>である。コア・ブロックは当初<sup>だんしゆ</sup>、脱出カプセル<sup>だつしゆかぷせる</sup>程度<sup>ていど</sup>でしかなかった。が、その帰還<sup>きかん</sup>を確実にするために航空機<sup>かうくうき</sup>としての機能<sup>きぬ能</sup>を追加<sup>ついか</sup>、自力<sup>じりき</sup>による敵勢力圏<sup>てきせうりきくわん</sup>からの脱出能力<sup>だつしゆのうりよく</sup>を与えたのである。コア・ファイターはこうして誕生<sup>たんじゆ</sup>したが、武装<sup>ぶさう</sup>の追加<sup>ついか</sup>という軍<sup>ぐん</sup>の無茶<sup>むちゃ</sup>な要求<sup>ようきう</sup>は、開発陣<sup>かいはつじん</sup>に大きな労苦<sup>らうこ</sup>を必要<sup>ひつよう</sup>とさせた。



MOBILE SUIT VARIATION

131

CAUTION



CORE FIGHTER II

FF-X7B  
FIGHTER



EARTH FEDERATION  
FORCE

# コア・ファイターII

131

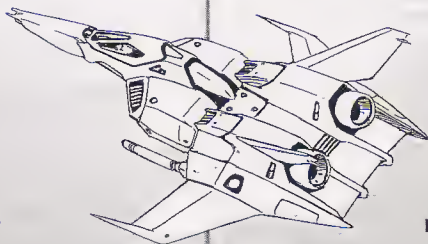
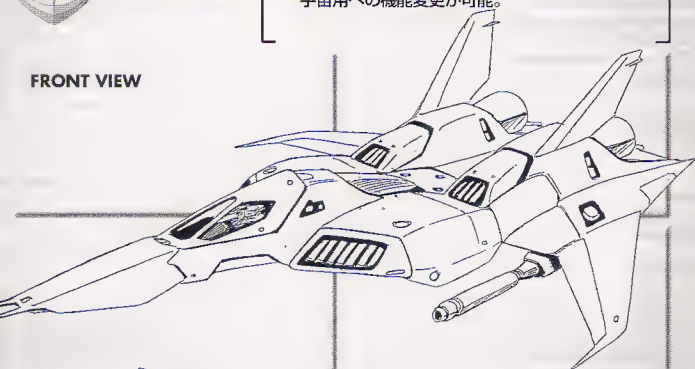


地球連邦軍

主兵装：ビームガン2門

※主翼をスラスターボッドに換装することにより、宇宙用への機能変更が可能。

FRONT VIEW



REAR VIEW

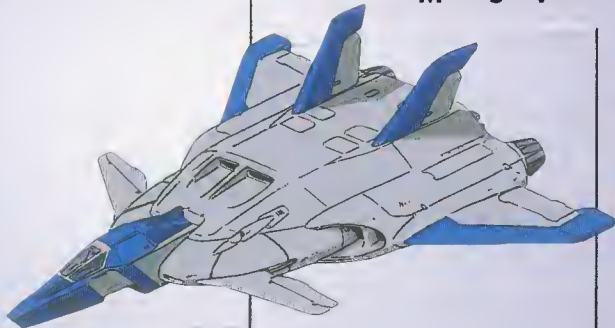
## 機体解説

本機はガンダム開発計画によって開発された、試作1号機ゼフィランサス用のコア・ブロックである。開発には戦後経営が悪化し、アナハイム・グループに吸収合併されたハービック社のスタッフが参加している。同社は戦前、連邦空軍などの主力戦闘機を納入しており、RX計画ではその実績が買われてコア・ファイターの製作を行った。つまりコア・ファイターIIはFF-X7の直系機なのである。しかしその仕様は大きく異なり、本機の推進器はそのままMSの主推進器として使用されるのだ。これは旧型で問題となった「空中におけるコア・ブロックへの変形に伴う失速」をクリアし、無駄な質量を減らすための方策だったといわれている。

MOBILE SUIT VARIATION

132

CAUTION



**JET CORE BOOSTER**

**FIGHTER  
ATTACKER**



**EARTH FEDERATION  
FORCE**

# ジェット・コア・ブースター

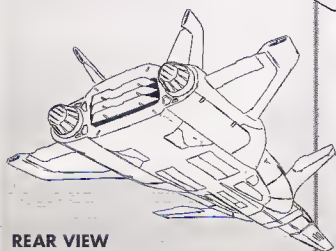
132



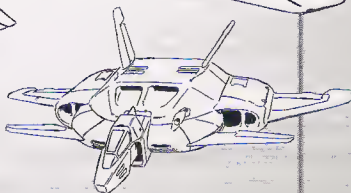
ちきゅうれんぽうぐん  
地球連邦軍

しゅへいそつ ぐん ぐん (ぐん ぐん ぐん)  
主兵装：機関砲1門（機体左上部）  
各種爆弾

FRONT VIEW



REAR VIEW



## 機体解説

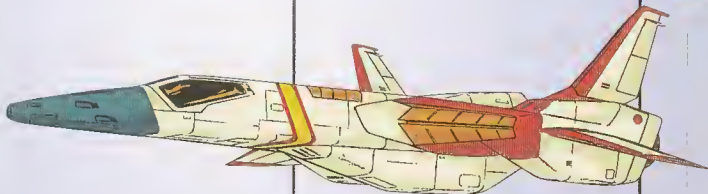
第13独立戦隊で使用されて有名になったコア・ブースターの、いわば空軍仕様の本機である。原型となったコア・ブースター自体が両用戦闘攻撃機であり、大気圏内での運用は可能だったが、推進機関にロケットモーターを用いているためにあまり効率的とは言い難かった。そこで考案されたのが、運用領域を大気圏内に絞りジェットエンジンに換装した本機なのである。生産コストの最も高いアビオニクス部分を含む機首はコア・ファイターからの流用であり、在来機に比べて電子機器は非常に高価だといえる。ハービック社は大量受注を見越して生産ラインを整えたが、突然の終戦のため発注を取り消され、巨大な負債を抱え込んでしまった。



MOBILE SUIT VARIATION

133

COMBINATION



**FF-3 SABER FISH**

**FIGHTER**



**EARTH FEDERATION  
FORCE**

# セイバーフィッシュ (空軍仕様機)

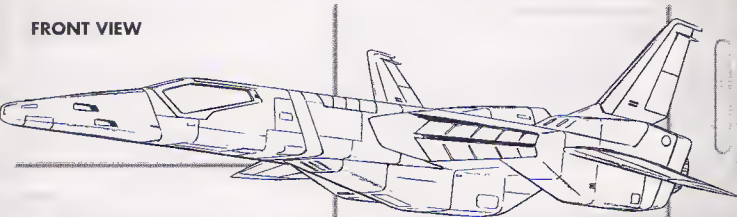
133



ちきゅうれんぽうぐん  
地球連邦軍

主兵装：機関砲4門（機首部）  
空対空ミサイル6基  
汎用パイロン2基  
（増槽・爆弾懸架用）  
推進方式：ジェットエンジン

FRONT VIEW



## 制空権と航空優勢

●制空権とは、敵航空戦力を撃破する制空作戦によってもたらされる支配権をいう。航空優勢とは量質ともに相手に勝る航空戦力により、戦場空域全体での優位を終始保持する状態を指す。前者は対症療法的であり、後者は根治療法的手法だといえるだろう。旧世紀後半、通信機器の発達によって、分散した多数の航空戦力の集中運用が可能となった。これにより、制空権確保のため常に航空戦力を作戦域上空に張り

付けておく必要がなくなり、航空優勢概念が主流となった。だがこれは、各種電波機器を使用不能にするミノフスキー粒子の出現によって時代にそぐわなくなってしまう。電子の目と耳が失われたため、後方域からの迅速な展開が不可能になってしまったのだ。このため空軍は大戦初期、ドクトリンを改変するため、大きな労苦を支払った。

## 機体解説

本機は連邦空軍と宇宙軍の共同計画によって開発された、両用戦闘機の空軍仕様機である。宇宙軍仕様機の特徴であったロケットモーターは取り外され、代わりにミサイルやドロップタンクを装備するためのパイロンが設置された。キャノピーも視界が広がっており、より空戦に適した機体になったといえよう。左右に張り出したエンジンナセルはデルタ翼の働きをし、翼端失速が起き難く翼の剛性を上げるといった利点を持っている。本機は高々度から侵入する敵機を捕捉・撃墜するための邀撃機として生産され、世界各地の空軍基地に配備された。戦後は宇宙軍を退役したロケットモーター付きの機体を日型として採用し、邀撃戦力のさらなる充実を図った。

MOBILE SUIT VARIATION

134

CAUTION



FLY DART

[ INTERCEPT  
FIGHTER ]



EARTH FEDERATION  
FORCE

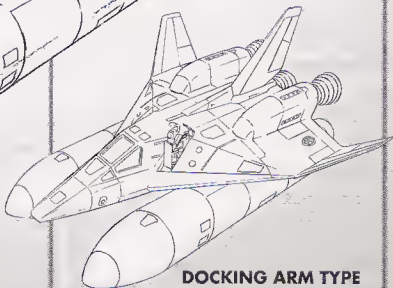
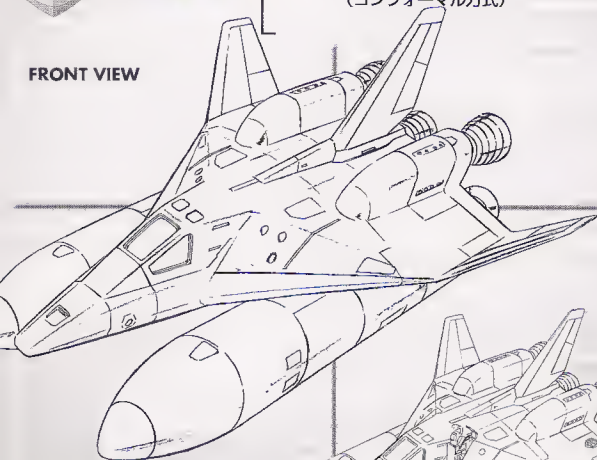
# フライダーツ

134

地球連邦軍

主兵装：電磁加速式モーターカノン1門  
ミサイル・ランチャー  
(コンフォーマル方式)

FRONT VIEW



DOCKING ARM TYPE

## 機体解説

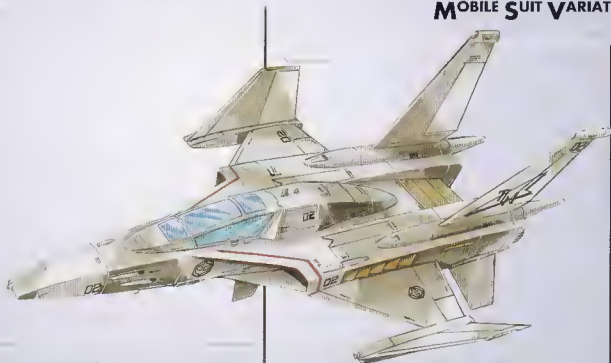
連邦宇宙軍は宇宙だけでなく、地球本土にも基地を有していた。これは宇宙軍の任務に軌道上の保全があったためだが、このことが長年の問題である、空軍との担当領域に関する諍いの原因となっていた。本機はその領域問題の象徴ともいえる機体である。この機体は軌道上に侵入した敵を邀撃するために開発されており、形状や用いられている技術は航空機というよりも航空機といった方が正しい。戦時中はジオン地球方面軍と本国を結ぶ交通線の破壊任務に従事、地球侵入を図るジオン軍の降下艇やHLLVを軌道回廊において多数撃墜した。これらの任務は相対速度差が非常に大きく、パイロットは宇宙軍の中でも屈指の者が選ばれていたという。



MOBILE SUIT VARIATION

135

CAUTION



**FF-6 TINKOOD**

[ FIGHTER ]



**EARTH FEDERATION  
FORCE**

# TINコッド

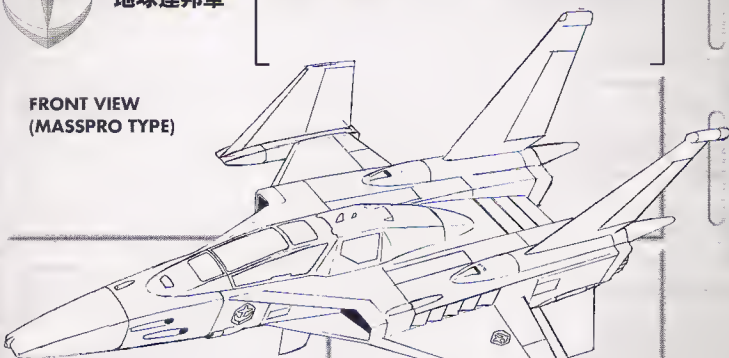
135

地球連邦軍

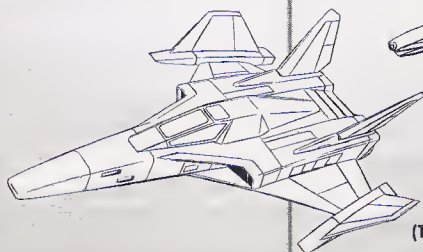
主武装：機関砲4門

推進方式：デュアル・ターボ式ジェットエンジン

FRONT VIEW  
(MASSPRO TYPE)



FRONT VIEW  
(TRIAL PRODUCT TYPE)



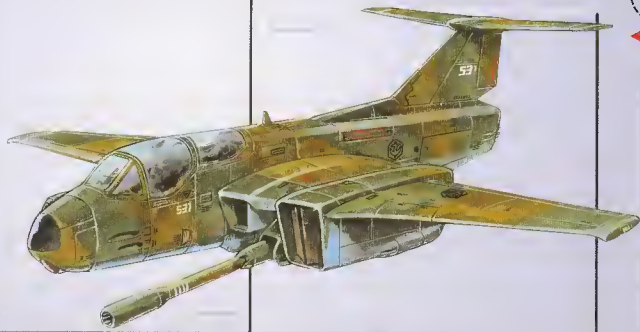
## 機体解説

セイバーフィッシュは邀撃任務ばかりでなく、制空戦闘や対地攻撃任務を視野に入れており、その高性能さに比して価格も非常に高かった。本機は邀撃任務を主眼としてコストの削減を狙った、いうなればロウ・コスト機である。しかし低価格といっても決して性能が低いわけではなく、逆に単機能に設計を絞ったぶん、局地防空という限定された任務では高い性能を示した。光ファイバーケーブルを使用した操舵機構、フライ・バイ・ライト（FBL）方式は完全に進化の頂点に達しており、高性能のCCV機能と相まって高い空戦能力をこの機体に与えることに成功している。本機の製作はハービック社であり、後のコア・ファイターの原型となった。

MOBILE SUIT VARIATION

136

CAUTION



**MONGOOSE**

[ **ATTACKER** ]



**EARTH FEDERATION  
FORCE**

# マンガース

136



地球連邦軍

主兵装：機関砲2門

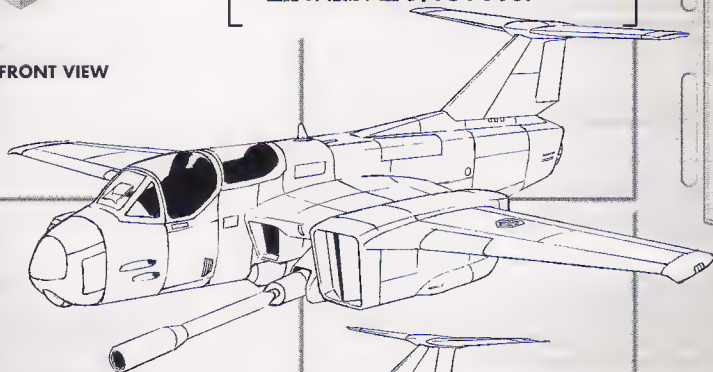
75mm自動砲1門

ビーツG-8 ロケット弾8基

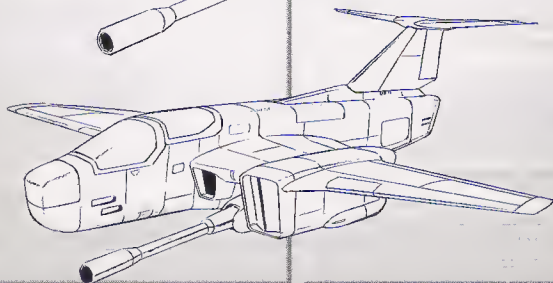
B-108爆弾12個

※上記の兵装は、最大時のものである。

FRONT VIEW



FRONT VIEW  
(LATER PERIOD MODEL)



## 機体解説

本機はミノフスキー粒子下での運用を前提として開発された、対地上用攻撃機である。低空・低速状態での安定性が高く、主兵装である自動砲の命中率も決して低くはなかった。ジオン軍は連邦の航空攻撃を無力化するため、戦車部隊や歩兵部隊の移動時においてもミノフスキー粒子を散布し、電子兵器による空爆や攻撃機の侵入を阻んでいた。実際、大戦初期にこの作戦は功を奏し、連邦軍の航空攻勢は実施不可能となりジオン地上部隊の行く手を遮るものはいなかったといって良いだろう。だがレーダー兵器を用いない、旧世紀の古典的手法……航空機に砲を搭載し、接近して撃破するという戦術が復活すると、ジオン軍は少なくない被害を被ったという。



MOBILE SUIT VARIATION

137

CAUTION



FLAT MOUSE

[ RECONNAISSANCE  
PLANE ]



EARTH FEDERATION  
FORCE

# フラットマウス

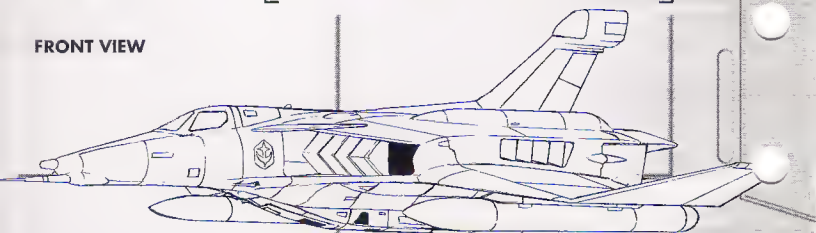
137



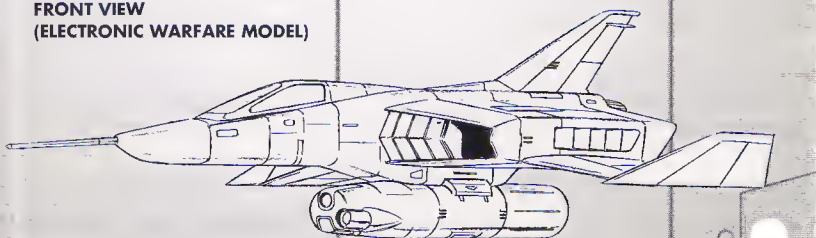
地球連邦軍

装備：磁気記録方式録画用カメラ  
レーザー式機密情報発信器  
増槽2基装備可能

FRONT VIEW



FRONT VIEW  
(ELECTRONIC WARFARE MODEL)



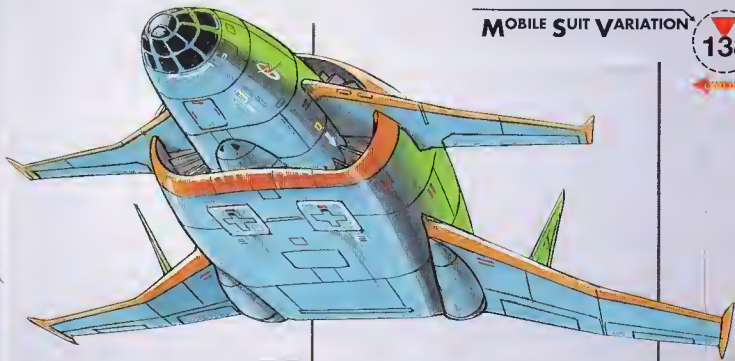
## 機体解説

偵察行動は大別すると、戦略偵察と戦術偵察に分けられる。戦略偵察とは国家戦略や戦争遂行のために行われる偵察であり、戦術偵察とは個々の戦闘において勝利するための情報を得ることを目的としている。フラットマウスは戦術偵察を行う機体として開発・配備された。大戦前、これらの偵察機は電子機器を情報収集の主な手段としていた。だがミノフスキー粒子の散布技術の確立は、偵察手段にも変革を迫ったのである。電子機器を用いた遠距離からの索敵や偵察行動は影を潜め、光学機器を使った方法が大きく注目されはじめたのだ。この結果、連邦軍偵察部隊の要請により、古典的なアナログ光学機器を搭載した新仕様機が登場することになる。

MOBILE SUIT VARIATION

138

LAST GUN



**DEPP-ROG**

[ BOMBER ]



EARTH FEDERATION  
FORCE

## デブ・ログ

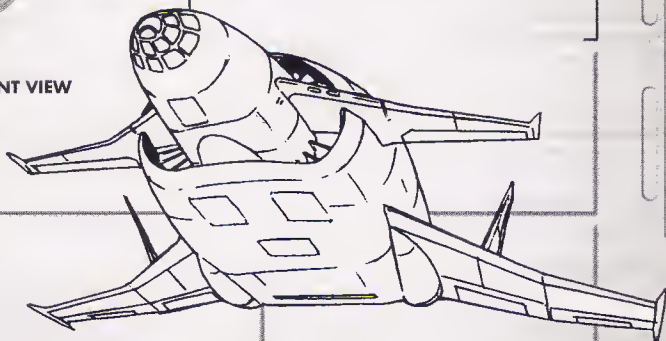
138



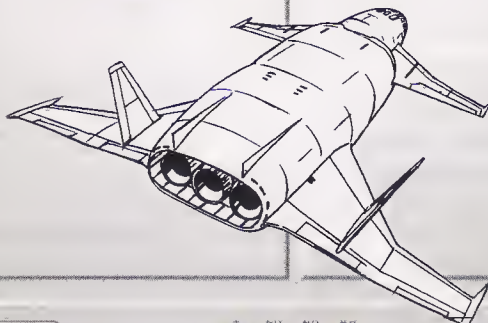
地球連邦軍

各種爆弾搭載用格納庫装備  
推進方式：ジェットエンジン

FRONT VIEW



REAR VIEW



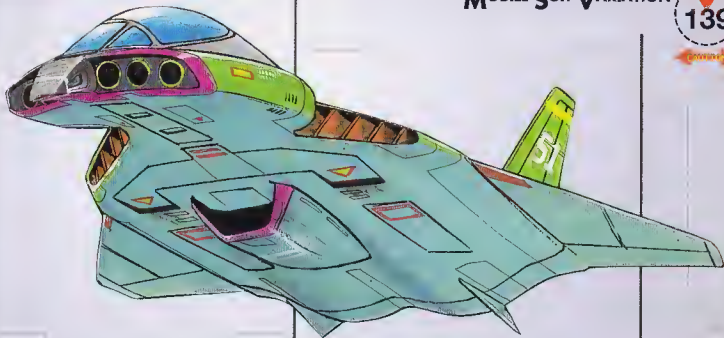
## 機体解説

本機は連邦空軍が、戦前から戦中まで使用していた戦略爆撃機。巨大なベ  
イロードを持ち、ビーム誘導式やイメージ・スキャン方式の誘導爆弾や巡  
航ミサイルを大量に搭載することが可能だった。前翼を有しており、巨大  
な機体を支える揚力を得ようという設計者の苦肉の策であることが理解で  
きる。本機が設計された当時は、宇宙移民者たちによる自治権要求運動が  
盛んな頃であり、軍の予算の多くが宇宙軍に割り当てられていた。この状  
況を憂慮した空軍首脳は地球本土の潜在的な反連邦武装勢力の危険性を声高  
に叫び、予算獲得を狙ったのだ。本機の開発計画にはこのような背景があ  
り、そのために必要以上の高価な技術や素材が使用されているのである。



MOBILE SUIT VARIATION

139



**FLY-MANTA**

**FIGHTER  
BOMBER**



**EARTH FEDERATION  
FORCE**

# フライマンタ

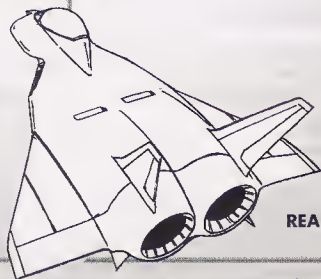
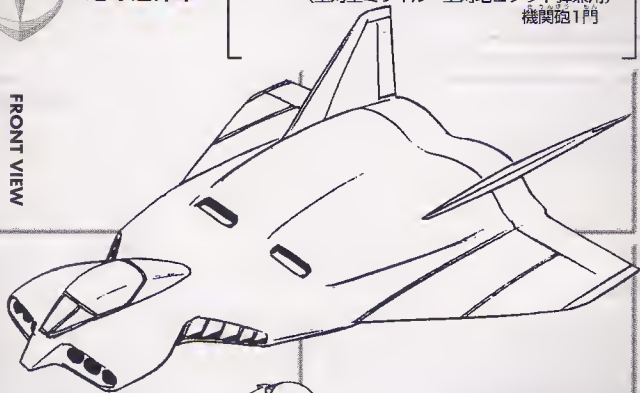
139



ちせうれんぽうぐん  
地球連邦軍

主兵装：3連装式ミサイル発射機2基  
(コンフォーマル方式ランチャー)  
(空対空ミサイル・空対地ロケット弾兼用)  
機関砲1門

FRONT VIEW



REAR VIEW

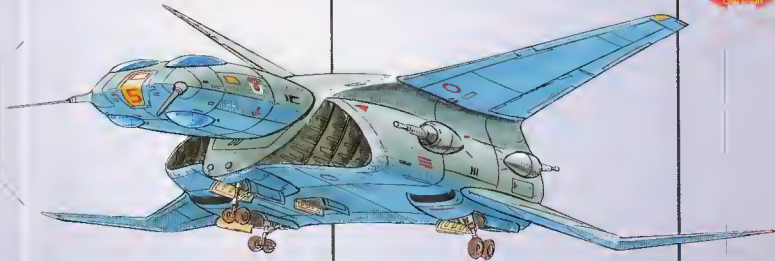
## 機体解説

特徴のないミノフスキー粒子登場以前の在来機ながら、大戦中の欧州方面戦域において活躍した連邦空軍の戦闘爆撃機。セイバーフィッシュと同様にデルタ翼を採用しており、低速飛行における翼端失速を起こし難く、また、翼付け根付近の翼弦が大きいために翼内に十分な容量を持つ燃料タンクを装備している。コクピット左右の張り出しは、3連装のコンフォーマル方式ミサイル・ランチャー装置である。連邦空軍は当初、ミノフスキー粒子散布下という想像を絶する環境に戸惑い、決して少なくない犠牲を払った。だが大戦も中期にさしかかるころにはレーダーを用いない環境での経験則が蓄積され、様々な対抗策を講じることで着実に戦果を挙げていった。

MOBILE SUIT VARIATION

140

CRAFT



**DON-ESCARGOT**

**PATROL  
PLANE**



**EARTH FEDERATION  
FORCE**

# ドン・エスカルゴ

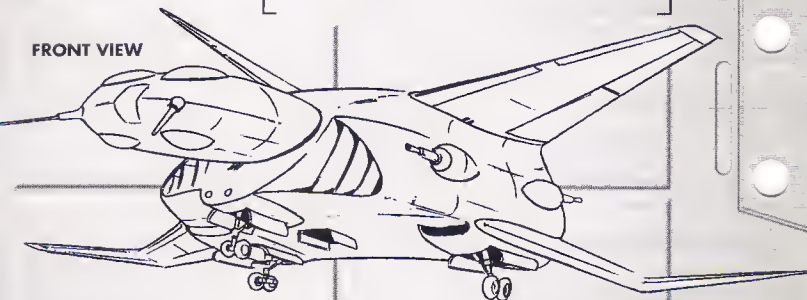
140



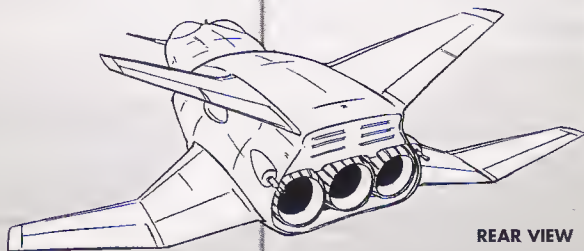
ちせうれんぽうぐん  
地球連邦軍

装備：投下式短魚雷用ボッド  
投下式アクティブ・ソナー・ボッド  
機関砲4門

FRONT VIEW



REAR VIEW



## 機体解説

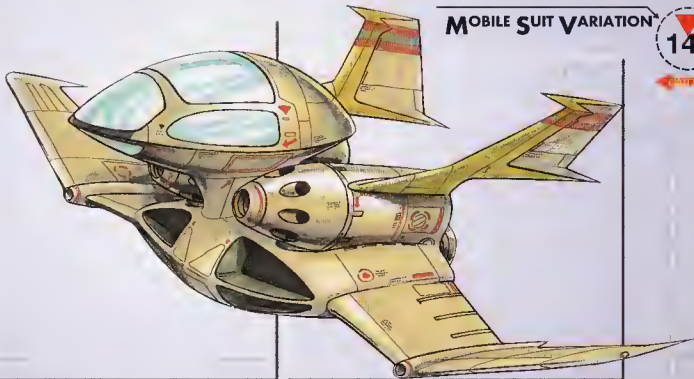
本機は連邦海軍航空隊の擁する、対潜哨戒機である。欧州と東南アジア、極東方面の連邦海軍は、土台となっている構成国家の歴史的背景から、対潜任務に大きな比重をかけていた。しかしジオン軍のMSを使った新戦術は度々対潜部隊の裏をかき、連邦軍輸送船団を海の漂くずと化していったのである。だがその猛威も大戦中期をピークとし、対潜部隊が経験則を十分に蓄積し、さらにジオン軍の作戦を徹底的に研究したために攻守は逆転した。水中部隊はドン・エスカルゴなどに追い回されることになり、数多くの潜水艦や両用戦用MSが失われたのである。ジオン軍の潜水艦乗りたちは、天敵ともいうべき本機を大いに恐れたという。



MOBILE SUIT VARIATION

141

CAUTION



**DOPP**

**[ FIGHTER  
ATTACKER ]**

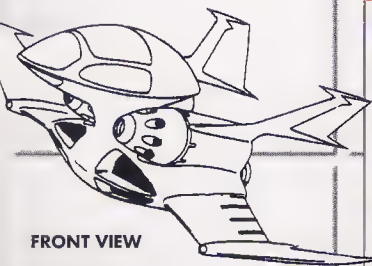


**PRINCIPALITY OF  
ZEON**

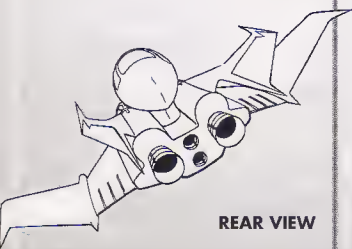


ジオン  
公国軍

主兵装：実体弾式滑空砲1門  
3連装式機関砲1門



FRONT VIEW



REAR VIEW

航空機の形状

●電子機器の発達した戦前までは、戦闘機の主兵装は高性能なミサイルであり、格闘戦というものは下策だとされていた。格闘戦は華々しく見えるが、戦術としては非常に悪い見本なのだ。しかしミノフスキー粒子の登場によって戦場環境は退行、高精度ミサイルの使えなくなった戦闘機は必然的に機関砲を使った戦術や格闘戦を重視せざるを得なくなったのである。さて格闘戦において重要なのは運動性だが、これは機体を不安定な状態で飛行させることを意味する。つまり、航空力学上「非常に飛びにくい（不合理な）」形状をした機体こそが運動性に優れているのだ。ドップの奇妙な形状は、本機の運動性が非常に高く、不安定な機体を補正し得る高性能なCCV機能を持っている証拠なのである。

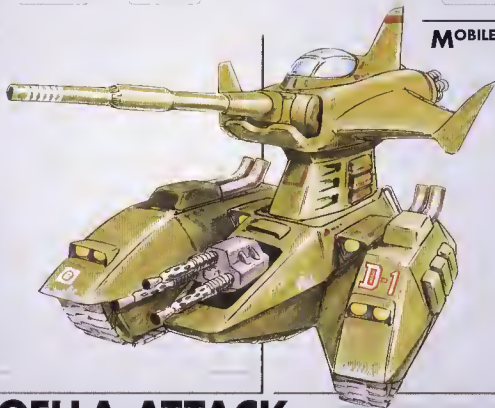
機体解説

本機はジオン軍航空隊の主戦力である。非常に特異な機体形状を持つが、これはCCVによる運動性を追求したためだ。原設計と整流試験などはサイド3で行われたが、実機の製作は地球上で行う必要があった。しかし連邦の潜在的敵国が、表立って地球上で戦闘兵器の開発を行えるわけがない。この機体がどの様な経緯で量産化に至ったかについては、未だに不明瞭なことが多い。ある研究家は、ペーパーカンパニーを使ったのではないかという説を発表した。つまり中立勢力をバイパスし、地球の航空機メーカーに「連邦空軍に売り込むため」の機体と偽り、開発を依頼したのではないかというのだ。だがこの説も、確固たる証拠があるわけではないという。

MOBILE SUIT VARIATION

142

CANNON



**MAGELLA-ATTACK**

[ SUPPORT  
TANK ]



PRINCIPALITY OF  
ZEON

## マゼラ・アタック

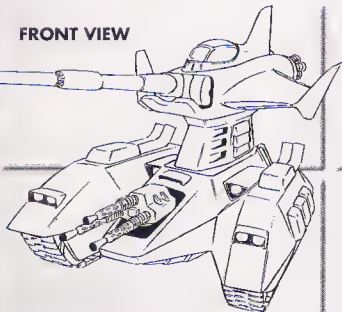
142



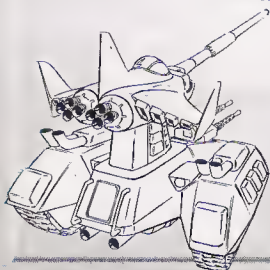
ジオン  
公国軍

主兵装：実体弾式滑腔砲1門  
3連装式機関砲1門

FRONT VIEW



REAR VIEW



## 戦う術とは

●大戦初期、ジオンのMSは数々の連邦陸軍部隊を撃破し無敵の強さを誇示した。だが、この世には不败の存在などはない。戦争（戦闘）を決するのは兵器の性能だけではない。古くから言われるように「最良の兵は最高の兵器に勝る」のである。事実、両軍の歩兵部隊や装甲部隊は思いのほか、MSに対する戦果を数多く残している。戦争とはルールのある殺し合いだ。喧嘩では卑怯と言われることも、戦争ならばそれは戦略であり戦術なのである。力に勝る相手に真っ正面から戦いを挑むことはない。相手を自分に有利な戦闘状況に引き摺り込んで戦うことこそ、軍人に求められる資質なのだ。あまり注目はされていないが、ジオン・連邦両軍の各兵科の将兵たちはこの点を良く踏まえ、戦ったといえるだろう。

## 車輛解説

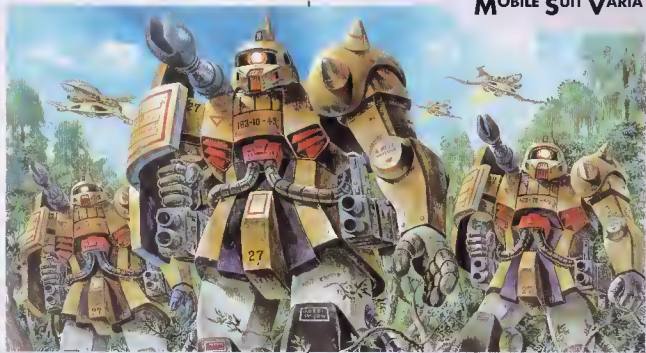
本車輛はジオン軍の主力戦車として紹介されることが多いが、実際は歩兵やMSの敵陣への突入支援砲撃を行うための装甲砲、もしくは自走砲というべきである。歩兵の突入戦術の問題として、敵に姿をさらさなければならぬという点がある。この突撃を容易にするために行われるのが敵に狙いをつけさせないようにする援護射撃であり、歩兵砲や装甲砲による直協砲撃であった。このうち直協砲撃には、突入支援だけでなく火点の撃破も含まれていた。本車輛はこれらの任務に合わせ、位置エネルギーを確保して様々な遠距離射撃を実施するために高い位置に砲を備えたのだ。対装甲戦では不利な形状も、直協砲撃には非常に有利なのである。



MOBILE SUIT VARIATION

143

UNIT 143



BATTLE OF EARTH

MS-06K



PRINCIPALITY OF  
ZEON

# 地球本土の戦い

143

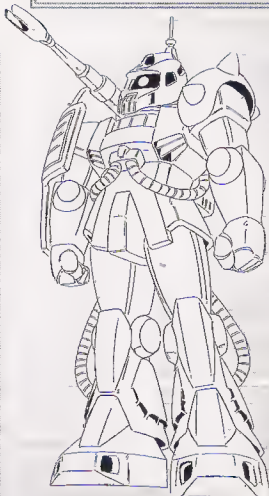


ジオン  
公国軍

ルウム戦役におけるジオン公国軍の戦略的敗北と早期講和の挫折は、ジオン公国軍の地球本土への侵攻を引き起こした。

公国軍総帥府および参謀本部は、このような事態を想定していなかったわけではない。しかし、地球連邦軍の徹底抗戦という最悪のケースが発生したことは、多方面において、少なからず混乱を発生させた。編成や兵站についても、その運用計画は充分とはいえず、侵攻作戦の発動とともに問題が発生するのは目に見えていたのである。そしてそれは現実のものとなった。

兵站の混乱は戦局を泥沼化させ、各地でジオン軍と連邦軍の決め手を欠く戦いが続いたのである。MSを主兵とするジオン軍は次々と大戦果を挙げていったが、戦争の勝利には至らなかった。何故ならばジオン軍は戦時体制を維持するために世界各地に戦力を分散させ過ぎており、戦局に決定的な打撃を与える作戦行動などできない状況下に置かれていたのである。各戦域での小競り合いによる勝利では、連邦の抗戦意志を崩すことはできない。といって、アフリカや東欧の資源地帯から戦力を引き抜くことも無理だ。こうしてジオンはジレンマに陥り、連邦に戦力を調える時間を与えてしまった。これがやがてV作戦の成功と、それに伴う東欧や北米の占領地域の失陥に繋がっていくのである。これは場当たりの参謀本部の戦争指導や、軍首脳的確執を抑えることが出来なかったジオン軍の体質が原因であり、敗北は必然であると評価する史家は多い。光輝あるMS部隊も戦術的勝利をもたらすことしか出来ず、ジオン公国は敗戦国として歴史にその名を刻むことになるのであった。



MOBILE SUIT VARIATION

144



**BURNING ON AFRICA**

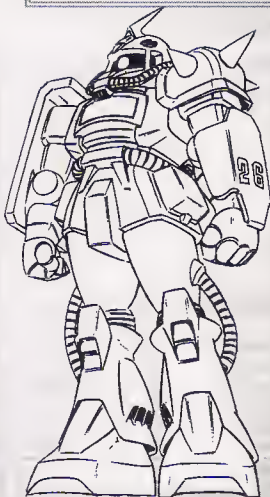
MS-06D

PRINCIPALITY OF  
ZEON

## 燃え上がるアフリカ



ジオン  
公国軍



オデッサを中心とするウクライナ丘陵重工業地帯は欧州最大規模であり、地球侵攻作戦の要だった。その占領に成功したジオン軍は長期戦に耐え得る国防体制の整備を開始する。さらにスエズ運河を制圧したのち、地下資源の宝庫であるアフリカへの侵攻に乗り出す。アフリカ大陸にはいまだ部族主義的傾向を持つ政府が多く、また反地球連邦運動も盛んな地域であった。ジオン軍の中には、それらの勢力と結託し資源地帯の多くを押さえることに成功した者たちもいたという。こうしてジオン軍は、アフリカへの侵攻を着実に

進めていった。これで生じた後遺症は、戦後に至ってもなお連邦を悩ませることになる。対する在アフリカ地球連邦軍は戦力の立て直しの真っ最中であり、ジオン軍に抗する術は皆無であるというのが実情だったという。戦局は小競り合いを繰り返す状態に留まり、その間にジオン軍はMS運用の改善を行うなど戦力の再編に努めていた。熱帯や砂漠という特殊環境は、宇宙育ちのジオン軍将兵を悩ませたが、彼らはよくこれを乗り越え、やがてはMS-06D〈ザク・デザートタイプ〉を中核とするMS部隊を編成するに至る。D型の参戦によって、それまでは連邦軍機甲部隊に押されがちだったジオン軍は反攻を開始、民族自決をテーゼとする反連邦勢力とともに連邦軍部隊や拠点を数多く撃破していった。こうしてジオン軍は完全にアフリカへの侵攻に成功する。戦争末期のアフリカ戦の後、多くの都市や港、工業地帯は再び連邦の支配下に置かれたが、一度火がついた民族自決の気運が簡単に抑えられるわけがなかった。





9784063465518



1920076020001

ISBN4-06-346551-9

C0076 ¥2000E (0)

定価：本体2000円(税別)  
講談社

# 『宇宙編』に続いて、地球で激闘を繰り広げた 『MSV』が72枚のファイル式カードになった!!

これが驚異の新生『MSV』だ!!

地球戦域に投入されたザクやグフなど第1世代MSばかりでなく、強襲揚陸艦や主力戦車、空軍仕様の戦闘機セイバーフィッシュなども収録! 川口克巳名人(バンダイ)の監修した新設定も宇宙編に続いて満載!!

